

比 恵 47

—比恵遺跡群第100次・第102次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第956集

2007

福岡市教育委員会

比 恵 47

—比恵遺跡群第100次・第102次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第956集



遺跡略号 HIE-100 HIE-102
調査番号 0522 0532

2007

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くより大陸との対外交流の場として栄え、その結果大陸よりもたらされた数多くの文化財が今なお地下に眠っています。なかでも、福岡平野の中央部に位置する比恵遺跡群は弥生時代の代表的な遺跡として知られ、発掘によって現れる様々な文物は、かつての奴国の繁栄を今に彷彿とさせてくれます。

福岡市教育委員会では比恵遺跡群を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。本書におさめた第100次・第102次調査は、いずれも共同住宅建設にともない実施したもので、弥生時代にはじまる集落の一部を確認し、往時の暮らしぶりを物語るさまざまな遺物が大量に出土いたしました。

調査に際し、事業主である株式会社リアン・インク、株式会社ケイコーには、快いご理解と多大なるご協力を賜りましたことを心よりお礼申し上げます。また、関係者のご尽力により、調査を円滑に進めることができましたことを深く感謝いたします。この報告書が広く活用され、文化財保護の理解を深める一助となれば幸いです。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

目 次

I. 比恵遺跡群の立地と地理・歴史的環境	1
1. 遺跡の立地	1
2. 遺跡の概要	1
3. 周辺の遺跡	3

挿図目次

Fig. 1 比恵遺跡群と周辺の遺跡 (1/40,000)	2
Fig. 2 比恵遺跡群主要部調査地点位置図 (1/4,000)	4

表 目 次

Tab. 1 比恵遺跡群・山王遺跡調査一覧	3
-----------------------------	---

II. 比恵遺跡群第100次調査報告	5
1.はじめに	7
1) 調査に至る経緯	7
2) 調査の組織	7
3) 調査地点の位置と周辺の調査	8
2.発掘調査の記録	9
1) 調査の概要と経過	9
2) 検出遺構	13
(1)井戸	13
(2)建物址	14
(3)溝状遺構	16
(4)不明遺構	17
3) 出土遺物	17
(1)土器・陶磁器	17
(2)木製品	24
(3)井戸出土植物遺存体(種子)について	25
3.まとめと考察	26
1) 比恵遺跡群第100次調査の成果	26
2) 古代の溝状遺構 SD002について	26
3) 比恵遺跡群における弥生時代終末期から古墳時代前期の土器編年 (SE005およびSE011出土一括資料の位置付けについて)(予察)	26

挿図目次

Fig. 1 比恵遺跡群第100次調査地点の位置 (1/2,000)	8	Fig. 4 西半調査区(Ⅱ区)平面図 (1/100)	11
Fig. 2 比恵100次調査区全体図 (1/250)	10	Fig. 5 SE005実測図 (1/30)	12
Fig. 3 東半調査区(Ⅰ区)平面図 (1/100)	13	Fig. 6 SE011実測図 (1/30)	13

Fig. 7 SB01・SB02実測図	14	Fig. 12 SE011出土土器（1/3）	19
Fig. 8 溝状遺構土層図・断面図(1) (1/40)	15	Fig. 13 その他の遺構出土土器・陶磁器(1/3)	20
Fig. 9 溝状遺構土層図・断面図(2) (1/40)	16	Fig. 14 各遺構出土木製品 (1/2)	22
Fig. 10 SX001(竪穴住居掘方か)実測図 (1/40)	17	Fig. 15 比恵・那珂遺跡群における下大隈式末～I B期の井戸出土土器群の変遷	27
Fig. 11 SE005出土土器 (1/3)	18	Fig. 16 比恵・那珂遺跡群におけるII B期～III A期古相の井戸出土土器群の変遷	28

本文中写真 (Ph.) 目次

Ph. 1 比恵遺跡群第100次調査 (I 区) 作業 風景 (東から)	中表紙	Ph. 9 SE011出土杭状木製品写真	23
Ph. 2 作業風景 (II 区) (西から)	9	Ph. 10 SD001出土蓋板状木製品写真	23
Ph. 3 SD001土層① (北西から)	15	Ph. 11 SE005出土壺 (11-1) 内面調整	23
Ph. 4 SD002土層② (西から)	15	Ph. 12 SE005出土小型丸底壺 (11-4) 底部の 黒斑	23
Ph. 5 SD002土層④ (東から)	15	Ph. 13 SE005 出土丸底壺の胴部外面下半の 調整	23
Ph. 6 SD002土層⑥ (南東から)	15	Ph. 14 SE005・SE011出土種子写真	25
Ph. 7 SE011出土楕形木製品写真	23		
Ph. 8 SE011出土杓形木製品柄部写真	23		

図版目次

PL. 1 1. I 区調査状況全景 (北西から) 2. I 区調査状況全景 (南西から)	9. SD001 (中央左)・SD002 (中央) 掘削状況 (東から)
PL. 2 3. II 区調査状況全景 (北西から) 4. II 区調査状況全景 (南西から) (手前は SE011)	10. SD001 (中央左)・SD002 (中央右) 掘削 状況 (西から)
PL. 3 5. SE005最下層土器出土状況 (南から) 6. SE005下層土器出土状況 (南から) 7. SE011土器出土状況 (南西から) 8. SE011最下層土器出土状況 (南東から)	PL. 4 11. SD002-III区遺物出土状況 (西から) 12. SP024 (SB01) 土層 (西から) 13. SP022 (SB01) 土層 (西から) 14. SX001検出状況 (西から) 15. 比恵100次出土遺物写真 (縮尺不同)

表目次

Tab. 1 比恵遺跡群第100次調査地点種子分析結果	25
-----------------------------	----

III. 比恵遺跡群第102次調査報告	33
1. はじめに	35
1) 調査に至る経緯	35
2) 調査の組織	35
2. 発掘調査の記録	36
1) 発掘調査の方法と経過	36
2) 検出遺構と出土遺物の概要	37
3) 検出遺構と出土遺物	38

(1)堅穴住居	38
(2)井戸	54
(3)土坑	59
(4)その他の遺構と出土土器	64
(5)鉄製品・ガラス製品・石製品	67
3. おわりに	68

挿図目次

Fig. 1 比恵遺跡群第102次調査区の位置 (1/500)	36
Fig. 2 遺構の配置 (1/100)	37
Fig. 3 遺構覆土の分布範囲 (1/200)	38
Fig. 4 SC -001 (1/40)	38
Fig. 5 SC -001出土遺物 (1/4)	38
Fig. 6 SC -002 (1/40)	39
Fig. 7 SC -002出土遺物 (1/4)	39
Fig. 8 SC -003 (1/40)	40
Fig. 9 SC -003出土遺物 (1/4)	40
Fig. 10 SC -004 (1/40)	42
Fig. 11 SC -004出土遺物 (1/4)	43
Fig. 12 SC -006 (1/40)	44
Fig. 13 SC -006出土遺物 I (1/4)	45
Fig. 14 SC -006出土遺物 II (1/2)	46
Fig. 15 SC -007 (1/40)	46
Fig. 16 SC -008 (1/40)	47
Fig. 17 SC -008出土遺物 (1/4)	47
Fig. 18 SC -010 (1/40)	49
Fig. 19 SC -010出土遺物 (1/4)	49
Fig. 20 SC -020 (1/40)	50
Fig. 21 SC -020出土遺物 (1/4)	50
Fig. 22 SC -027 (1/40)	51
Fig. 23 SC -027出土遺物 (1/4)	51
Fig. 24 SC -028 (1/40)	52
Fig. 25 SC -028出土遺物 (1/4)	52
Fig. 26 SC -030 (1/40)	53
Fig. 27 SC -030出土遺物 (1/4)	53
Fig. 28 SE -014 (1/40)	54
Fig. 29 SE -014出土遺物 (1/4)	54
Fig. 30 SE -040 (1/40)	55
Fig. 31 SE -040出土遺物 (1/4)	55
Fig. 32 SE -052 (1/40)	56
Fig. 33 SE -052出土遺物 I (1/4)	57
Fig. 34 SE -052出土遺物 II (1/4)	58
Fig. 35 SE -018・042・043・044・045・ 050・055・056・058 (1/40)	60
Fig. 36 SE -018・042・043・044出土遺物 (1/4)	61
Fig. 37 SK -044・050・045出土遺物 (1/4)	62
Fig. 38 SK -055・056・058出土遺物 (1/4)	64
Fig. 39 SX -021・026出土遺物 (272は1/2, 他1/4)	65
Fig. 40 その他の出土土器・土製品 (1/4)	66
Fig. 41 鉄製品・ガラス製品・石製品 (290~294は1/2, 他は1/3)	67

図版目次

PL. 1 1. 第102次調査区全景 (南西から)	2. 第102次調査区全景 (西から)
PL. 2 1. SC -001 (北西から)	2. SC -002 (北西から)
3. SC -003 (北西から)	4. SC -003磨製石剣出土状況 (北から)
5. SC -027 (西から)	6. SC -030 (南西から)
PL. 3 1. SC -004・010・020・028 (南から)	2. SC -006 (南西から)
PL. 4 1. SC -004遺物出土状況 (北西から)	2. SC -006遺物出土状況 (南から)
3. SC -008遺物出土状況 (南東から)	4. SK -042 (南から)
5. SK -043・044・050 (南東から)	6. SK -055・056・058 (南から)
PL. 5 1. SE -014 (北東から)	2. SE -052 (南西から)
PL. 6 出土遺物 (縮尺不同)	

I. 比恵遺跡群の立地と地理・歴史的環境

1. 遺跡の立地

福岡平野は東から南にかけて三郡山地、背振山系に囲まれ、北は博多湾に面し、南北に延びる舌状丘陵と沖積平野を交互に連ねて形成される。その沖積平野を複数の河川が貫流し、これら河川により開拓された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。狹義の福岡平野とは、樋井川以東の那珂川および御笠川流域で、旧都における那珂郡、御笠郡、席田郡の一部にあたり、月隈丘陵以西を指す。この福岡平野には、重要な遺跡群が分布している。比恵遺跡群は、福岡平野の中央部の北側に位置し、平野を北西側に流れる御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地である中位段丘上に立地する。現在この地域は、標高5~8m前後の平坦な市街地を形成しているが、これは戦前の区画整理事業や近年の都市開発の結果であり、本来は小規模な開拓谷が複雑に入り込んだ八つ手状の景観で、若干の起伏がある小丘陵状地形であったと推定される。遺跡群の立地する段丘は、花崗岩の風化疊層を基盤とし、その上部に粗砂、細砂、黒褐色～暗褐色シルト（腐植土状）、阿蘇山の火砕流起源の八女粘土・鳥栖ロームが堆積し、この上に表土層が形成される。比恵遺跡群の遺構は多くの場合、鳥栖ローム層上面ないし八女粘土上面においてこれらを掘り込んだ状況で検出される。遺跡群の南東側に接して広がる那河遺跡群も同様の立地であり、両遺跡群の間には浅い谷部が形成される部分もあるが、これは中世以降の水田開発による開拓の可能性があり、本来は一連の段丘と考えられ、遺構分布の連続や時期別の遺構展開過程の相異性から実質的に同一の遺跡群（「比恵・那河遺跡群」）としても理解される¹⁾。

2. 遺跡の概要 (Fig. 2)

比恵遺跡群では、縄文時代晩期末（弥生時代早期）以降、飛鳥時代に至る時期の集落および墳墓遺構が主に調査されている。比恵・那河遺跡群として見た場合、その範囲は南北2.4km×東西0.5~0.8kmという広大な面積となる。弥生時代中期末から古墳時代前期前半の間、飛鳥時代前半（6世紀末~7世紀中頃）に遺構分布と遺構密度のピークがあるが、これらの時期の遺跡範囲は100haを超える。特に弥生時代から古墳時代前期では日本列島における最大級の規模であり、その重要性が理解される。

比恵遺跡群の初源は旧石器時代の遺物に遡り、縄文時代は前期の遺物が出土している。弥生時代早期以降の遺物・遺構は継続的にあり、弥生時代前期以降は遺構・遺物ともに増加する。弥生前期は、遺跡の北西部を中心とした段丘縁辺部に貯蔵穴や水溜土坑などの遺構の分布がみられる。前期末以降に堅穴住居、貯蔵穴、堀塁墓地などの遺構の分布が各所に広がり、中期前半以降に段丘中央部の標高位面に堀塁墓地や堅穴住居、土坑などの遺構が進出する。中期中頃以降には段丘中央部を中心に遺構分布が濃密となり、「集住」して広大な集落を形成するようになる。その同時期に八女粘土層またはそれ以下までも深く掘削する井戸の築造が開始され、また掘立柱建物も多く見られるようになる。段丘中央には大型の堅穴住居や掘立柱建物も出現する。中期後半から後期にかけて、直線的な大溝や方形を指向する環溝が段丘上を区画し、通常の集落の構造とは一線を画する。中期の墓地は複数箇所で確認されるが、比恵6次の墓群は墳丘墓を形成し、中期前半の堀塁からは縄型銅剣が出土した。後期になると墓地遺構は不明確となるが、井戸、堅穴住居、掘立柱建物、溝などの遺構は間断なく営まれ、井戸数の増加を考慮するとむしろ集落の人口密度は増大したと考えられる。比恵における井戸址の集中は特異であり、水場に乏しい段丘上における極度の集住がその築造の背景にあろう。弥生時代の比恵遺跡群は、銅鏡副葬墓や青銅器埋納が今のところ見られない点が福岡平野のもう一つの大集落遺跡である須玖岡本遺跡群（春日市）と異なり政治・祭祀的センター性に乏しいが、高床倉庫域と考えら

れる広域の掘立柱建物群の存在（比恵7・27・6・58・35・48次など）や、朝鮮半島系土器を含む広範囲の外来系搬入土器の存在などから、交易の一大拠点としての性格が考えられる。水銀朱原料である辰砂の多量出土（57次）や青銅製鋤先の多数出土など、特異な遺物の出土もみられる。比恵・那珂では青銅器・ガラス製品生産関係遺物も複数地点で出土し、須玖岡本遺跡群のような極度の集中性はないものの、比較的多い出土状況と言える。須玖岡本遺跡群が古墳時代初頭前後に衰退し遺構が減少すると、これと交替するように比恵・那珂の遺構分布は若干増大し、その頃までに那珂遺跡群南部から比恵遺跡群中央西部までを貫く延長1.5kmの並列二条溝=道路が造営され、福岡平野最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が那珂遺跡群の中央に築造される。「奴国」の中核は比恵・那珂に移動したのであろう。比恵には大型の周溝墓があり（6・36次）、那珂遺跡群では周溝墓群が造営される。

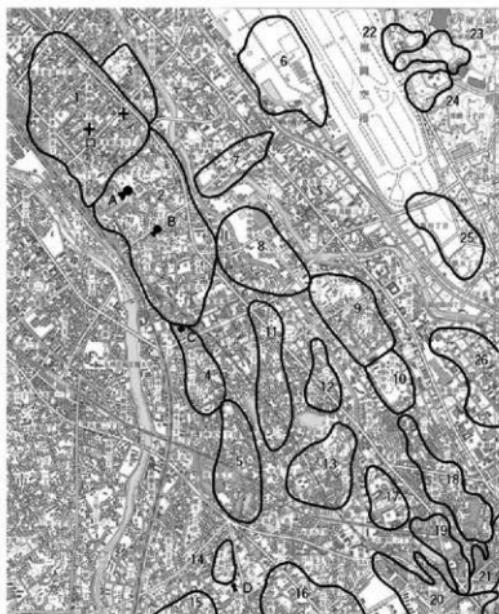
ところが古墳時代前期後半には遺構が激減し、中期の遺構はほとんど見られない。その後、5世紀末前後には那珂遺跡群に剣塚北古墳が造営される頃に比恵・那珂の集落が再開され、さらに6世紀中頃に三重周溝を巡らす全長75mの東光寺剣塚古墳が築造される頃から再び遺構が増大し始める。6世紀後半以降には、比恵・那珂全体に堅穴住居、掘立柱建物、溝などの遺構が多く展開し、「那津官家」の関連施設とされる比恵8・72次の大型倉庫群と三重欄列をはじめ、倉庫群、大型掘立柱建物や多重欄列が比恵・那珂の複数地点で検出されている。これら特殊な遺構群は7世紀中頃まで多く存在し、これらは『日本書紀』の「筑紫大宰」に関連するとの説もある。なお飛鳥時代（6世紀末以降）には、瓦の分布に示されるように比恵・那珂遺跡群のうち那珂に集落（官衙的遺構群を含む特殊な集落）の中心が移ったようである。7世紀中頃～末頃には正方位の溝が那珂を中心に縱横に走行し、那珂遺跡群に官衙的遺構群の存在が予測される。

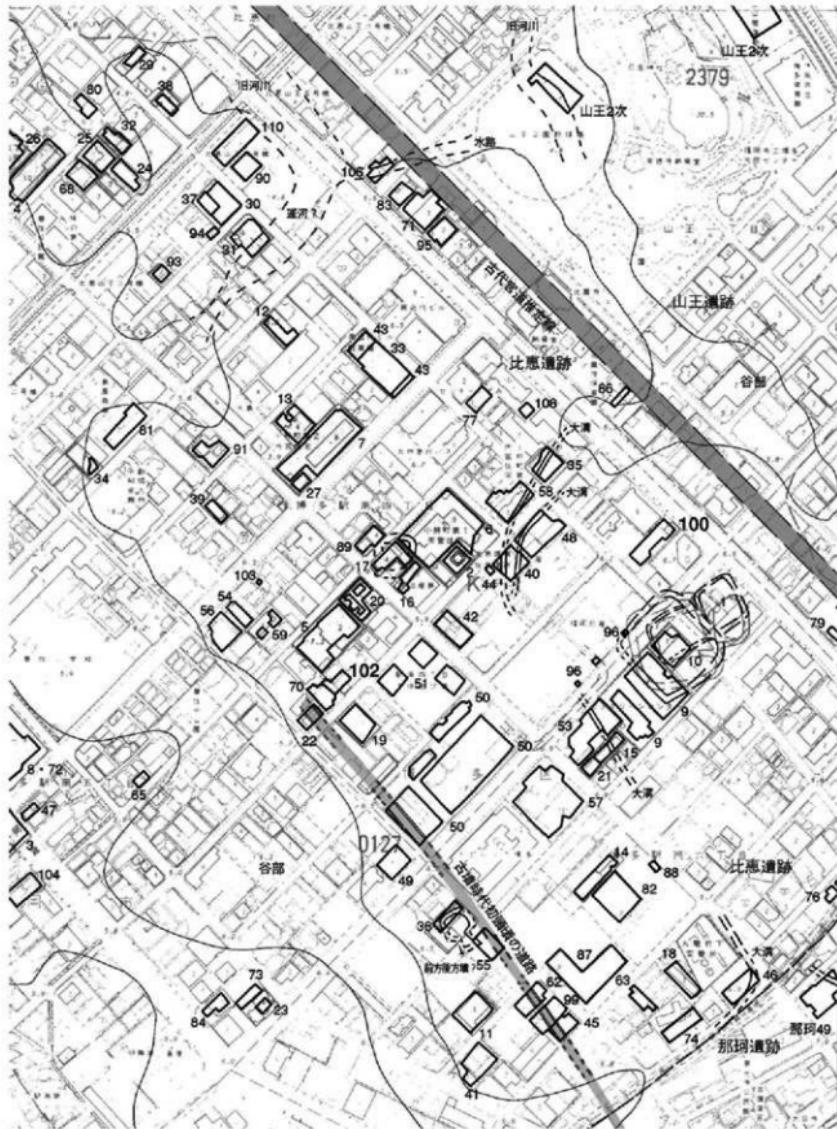
8世紀（奈良時代）になると、那珂では集落が継続するが、比恵では遺構が減少する。その後の集落も比恵では那珂に比較してやや少ない傾向にある。

- 1) 田崎博之1998「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発」『福岡平野の古環境と道路立地』九州大学出版会

Fig. 1 比恵遺跡群と周辺の遺跡
(S = 1/40,000)

- イ. 比恵100次地点 ロ. 比恵102次地点
- 1. 比恵遺跡群 2. 那珂遺跡群 3. 山王遺跡
- 4. 五十川遺跡 5. 井尻B遺跡群 6. 雀居遺跡
- 7. 東那珂遺跡 8. 那珂君体遺跡 9. 板付遺跡
- 10. 高煙遺跡 11. 諸岡B遺跡 12. 諸岡A遺跡
- 13. 鹿原遺跡 14. 寺島遺跡 15. 佐渡遺跡
- 16. 須玖岡本遺跡群 17. 三筑遺跡 18. 麦野A遺跡
- 19. 麦野B遺跡 20. 南八幡遺跡 21. 雜崎遺跡
- 22. 久保園遺跡 23. 席田大谷遺跡・赤徳ノ浦遺跡 24. 宝満尾遺跡（22～24席田遺跡群） 25. 下月隈C遺跡 26. 仲島遺跡 A. 東光寺剣塚古墳 B. 那珂八幡古墳 C. 今宮神社古墳 D. 須玖御陵古墳





比恵遺跡群第100次調査報告



Ph.1 比恵遺跡群第100次調査（I区）作業風景（東から）

遺跡略号 HIE-100
調査番号 0522

例 言

1. 本報告〔「比恵47」のうち「II. 比恵遺跡群第100次調査報告〕は、福岡市教育委員会が、平成17(2005)年6月1日から平成17(2005)年7月1日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設に伴う比恵遺跡群第100次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、建物址をSB、溝状遺構をSD、土坑をSK、柱穴をSP、性格不明遺構をSXとしている。なお報告の遺構番号は、調査時の番号をもとに整理時に一部修正して新たにつけ直したものである。
3. 本報告の遺構図に用いる方位は磁北である。調査区の座標は任意のものである。ただし、比恵（博多駅南）地区に設置されている福岡市教育委員会設置の国土座標測量基準杭より国土座標を移動して調査区の位置を求めてている（Fig. 2）。なおこの国土座標は日本湖地系（第2系）である。また調査区内の標高についてもこの測量基準杭より移動して求めたものである。
4. 本報告に用いる遺構図は、久住猛雄が実測し作成した。遺物の実測は西堂将夫、境聰子、久住が行った。拓本は成清直子、坂井かおりが行った。製図は西堂、坂井、成清、平井宏美、宇野美嘉が行った。遺構写真および遺物写真は久住が撮影した。また本書の福集および執筆は久住が行った。ただし、「井戸出土植物遺存体（種子）について」（24頁）は小畠弘己氏（熊本大学助教授）による執筆である。
5. なお本書〔「比恵47」〕のうち、「I. 比恵遺跡群の立地と環境」の編集と執筆は、「III. 比恵遺跡群102次調査報告」の福集者である吉武学と協議の上、久住が行った。
6. 中表紙写真は調査区東半（1区）の調査作業風景（東から）である。

遺跡調査番号	0 5 2 2		遺跡略号	HIE - 100	
調査地地番	福岡市博多区博多駅南4丁目71番、77番				
敷地面積	941.25m ²	調査対象面積	647.50m ²	調査面積	480.3m ²
調査期間	2005年6月1日～7月1日			分布図番号	37-0127

II. 比恵遺跡群第100次調査報告

1. はじめに

1) 調査に至る経緯

平成17年4月7日付で、株式会社ビルホーム（代表取締役 黒石征幸、平成18年度に株式会社リアン・インクに社名変更）より、博多区博多駅南4丁目71番1, 77番における共同住宅建設工事に関して文化財保護法に基づく事前審査申請書が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された（事前審査番号17-2-22）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群（分布地図番号37-0127）に含まれており、周囲の発掘調査および試掘調査の成果から、埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断され、予定される工事内容はこれに影響を及ぼすことが懸念された。したがって、申請者に対し、申請地における埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査が必要であることを告げ、協議の結果、5月17日に試掘調査を実施することとなった。

ところが、5月初旬頃より申請地において掘削工事がなされ、土砂が撒出されているとの報告があり、埋蔵文化財課事前審査係（当時）の久住猛雄が現地に5月8日に向かい、この工事が以前の旧建築物基礎を撤去する掘削工事であることを確認した。この工事は、旧基礎の底面まで全面的に掘削するものであったため、掘削の一部が地山まで達しており、埋蔵文化財に一部影響が及んでいる懸念が生じた。そのため、埋蔵文化財の有無について早急に確認する必要が生じ、急ぎ再度申請者と協議し、試掘調査の予定を早め5月11日に行うことになった。

試掘調査の結果、遺構が確認されたため、以後の掘削工事に関しては、文化財保護法に基づき、事前に記録保存のための発掘調査が必要であると回答した。この結果、申請者と協議を行い、記録保存のための発掘調査を行うことで合意を得た。平成17年5月30日付で、株式会社ビルホームを委託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書が福岡市教育委員会との間で締結され、平成17年6月1日より申請地における本調査を行うことになった。

なお、本調査は平成17年（2005年）7月1日に終了し、整理作業および発掘調査報告書作成は平成18年度に行った。

2) 調査の組織

調査委託 株式会社ビルホーム（平成17年度）、株式会社リアン・インク（平成18年度）
(平成18年に社名変更)

調査主体 福岡市教育委員会文化財部

埋蔵文化財課（平成17年度）、埋蔵文化財第1課（平成18年度）（平成18年度組織変更）

調査総括 埋蔵文化財課長（平成17年度）、埋蔵文化財第1課（平成18年度） 山口譲治

埋蔵文化財課調査第1係長（平成17年度）、埋蔵文化財第1課調査係長（平成18年度）

山崎龍雄

調査庶務 文化財整備課管理係（平成17年度）、文化財管理課管理係（平成18年度） 鈴木由喜

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係 久住猛雄（前任）（平成17年度5月まで）

埋蔵文化財課事前審査係（平成17年度）、埋蔵文化財第1課事前審査係（平成18年度）

本田浩二郎

調査担当 埋蔵文化財課調査第1係（平成17年度）、埋蔵文化財第1課（平成18年度）

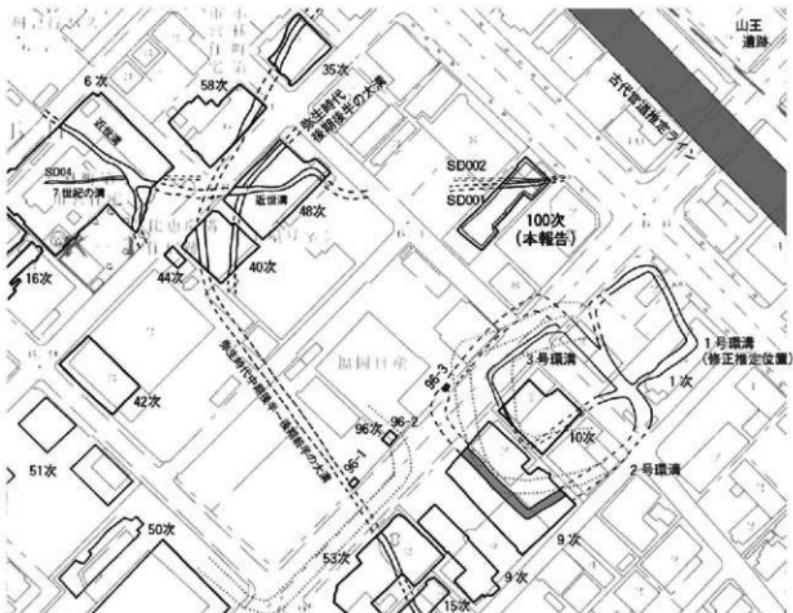
久住猛雄

本調査においては多くの発掘作業員の方々の協力を得た。また整理作業においては西堂将夫、宇野美嘉、坂井かおり、成清直子、平井宏美的手を煩わせた。また、本調査に至る協議および条件整備などについては、委託者である株式会社ビルホーム（当時）の柴川幸美氏、窪田哲也氏のご理解とご協力を得た。これら関係者の方々に対し、記して感謝申し上げたい。

3) 調査地点の位置と周辺の調査 (Fig. 1)

比恵遺跡群は福岡平野の北半、御笠川と那珂川に挟まれた中位段丘上に位置する。調査地点は遺跡群の北東部に位置する。比恵遺跡群の東側で、御笠川左岸に接する山王遺跡とは埋没した浅い谷地形を挟んで接した位置にある（本書「I. 比恵遺跡群の立地と環境」Fig. 2 参照）。この山王遺跡との境界線の西側に沿うように、奈良時代に大宰府東門から現在の博多駅付近まで直線的な古代官道が推定されているが、その推定線上の比恵遺跡群79次において官道の側溝や路面痕跡が検出されている（福岡市埋蔵文化財調査報告書第821集）。

比恵100次調査地点付近の南側には、九州帝国大学（当時）の鏡山猛氏が戦前に調査した「比恵遺跡 1～3号環溝」が所在する（鏡山猛 1956～1959「環溝住居跡論攷」(1)～(4)『史澤』67, 68, 74, 78）。この比恵遺跡の環溝は、弥生時代集落研究史の上で重要な位置を占めている。当時の調査の原因となった博多駅南地区の大規模な区画整理は、それまでのある程度起伏のあった段丘地形を大きく削平するもので、現在の付近の地形は市街化され平坦になっているが、この環溝群があった区域は比較的高かったようである。また鏡山氏の調査した環溝群は、正確な位置が長らく不明であった。しかし比恵9次調査において、2号環溝の一部と考えられる溝状遺構 SD01（掘り直しの



SD17が重複する)が検出された。また10次調査では3号環溝の痕跡の可能性の高い小溝(3号溝)も検出された(福岡市埋蔵文化財調査報告書第145集)。これらの溝は、鏡山氏が区画整理後の街区と環溝群の関係を記した図とは若干位置に相違があるが、他には考え難い遺構であり、それぞれ2・3号環溝に相当するとしてよい。そしてこれらの出土土器から、2号環溝は弥生時代終末～古墳時代前期、3号環溝は弥生時代後期と推定され、また2号環溝はその規模と時期から、古墳時代初頭前後における「奴国」の首長の居館に関わる方形区画ではなかったかと評価される(久住猛雄2000「奴国の遺跡－比恵・那珂遺跡群と須玖・岡本遺跡群」「考古学から見た弁・辰韓と倭」九州考古学会・嶺南考古学会第4回合同考古学会)。また比恵9次調査の第3地点では、比恵9次SD01と断面や土層が酷似する溝の一部が検出された(福岡市埋蔵文化財年報Vol.19 2004年度)。これらにより、鏡山氏が平面位置を確認した2号環溝の正確な位置がほぼ明らかとなった(Fig.1)。この2号環溝と、3号環溝と考えられる比恵10次3号溝の位置関係を基準とし、鏡山氏の1～3号環溝の関係を示す平面図を合成して(鏡山氏報文の図を左回転する形になる)、各環溝の地図上における位置を修正して推定したのがFig.1である。今後の検証を必要とするが、特に異論が無ければ、今後この推定位置をもとに話をするべきであろう。なお鏡山氏の環溝群の確認と1号環溝の調査は、「比恵1次」調査とされている。さて1号環溝は、鏡山氏の報告をはじめ、従来は弥生時代中期後半とされることが多かったが、溝出土という遺物実測図や、環溝に接してあったとされる甕棺群との関係や九州大学に残る1次調査の遺物を冷静に検討すると、後期初頭～後期前半になる蓋然性が高い。したがって3つの方形区画の環溝は、1号環溝(後期初頭～前半)→3号環溝(後期中頃前後)→2号環溝(後期終末～古墳前期)となり、比恵遺跡群における中核的な施設(首長居館か)として継続したと考えられる(久住猛雄2003「北部九州における弥生時代の特定環溝区画と大型建物の展開」「日本考古学協会2003年度滋賀大会資料集」)。

比恵100次地点の西側に目を向けると、比恵40次・48次において弥生時代後期中頃～終末の大溝が調査され、また35次・58次・40次においては弥生時代中期後半に掘削され上層に後期初頭～後期前半の土器群が大量に廃棄される大溝が検出されている(Fig.1)。これらの大溝は、溝の両側に前後の時期の集落遺構が展開し、集落外縁を巡るいわゆる環濠というよりは大集落内部を区画する大溝と言える。また中期後半～後期前半の大溝は途中や不明な箇所があるが、40次地点の南側からは略南北に走行し、53次・15次調査の大溝に統くと見られる。15次調査の報告では、この大溝の掘削当初は、本来「運河」として使用されたのではないかとの指摘がなされる(福岡市埋蔵文化財調査報告書第596集)。これら大溝の両側の遺構は、削平がそれほど顕著ではない(北から)35次・58次・6次東半・48次・40次の各地点では竪穴住居が少なく、掘立柱建物が多く分布し、柱穴に礎板(の痕跡)が確認できる例が少なくないことから、弥生時代後期初頭頃から古墳時代前期にかけて高床倉庫群区域であった可能性がある。なお中期後半～後期前半の大溝と、上述の操作により位置を修正推定した1号環溝と3号環溝の方位がほぼ同じであることが注意されよう。

2. 発掘調査の記録 (Fig. 2)

1) 調査の概要と経過

比恵100次調査地点の昭和の区画整理以前の旧地形は、検出された地山の状況などから、西側がやや高い段丘であり、東側は一段低く



Ph. 2 作業風景 (II区) (西から)

水田であったようである。現況は平坦であり、付近の現標高は6.5m前後である。

遺構検出面は現地表から-100~140cmの八女粘土上面である。調査区西半分(II区)は、鳥栖ローム下部から八女粘土上面が検出面となり、東半分(I区)はほぼ八女粘土上面が検出面である。昭和の区画整理により全体的に削平された上に、旧建物の基礎工事と調査前の基礎解体によりさらに顕著な削平と擾乱を受け、遺構の遺存は悪い。より下部の地山層での検出となったI区の方が遺構の遺存が僅かに良好で(Fig. 2)、やや高い地山層での検出となったII区(Fig. 3)の方が遺構の遺存が劣悪なのは、西側が元々段丘で高かったのが大きく削平されたのに対し、東側がもとよりやや低く浸食された地形でその後の削平度合いが小さく、遺構が若干残ったためであろう。なお、遺構検出面レベルは擾乱により凹凸があるが、I区では4.70~5.20m、II区では4.70~5.00mでそう変わらない。

遺構は、溝状遺構3、井戸2、不明遺構(堅穴住居の貼床痕跡か)1、掘立柱建物1、建物址(堅穴住居の可能性がある)1、土坑1、柱穴若干を検出した。主な遺構は以下の通りである。溝のうちSD001は近世後期以降から近代の水路で、途中に井堰状の杭列痕跡がある。SD002はSD001に一部切られるがほぼ平行する古代の溝である。箱形断面で掘り直しが推定され、掘り直し土層の底面から8世紀前半の須恵器が出土した。SD006は002に平行する細い小溝である。井戸SE005からは古墳時代前期中頃の、SE011からは弥生時代終末の土器群が各井戸の下層から一括して出土した。いずれも素掘りである。SB01は推定1×2間の掘立柱建物で、古墳時代初頭と推定される。SB02は2本の柱穴の組み合わせで対応する列が不明である。いずれの柱穴も残りは非常に悪い。他に弥生~古墳時代と考えら

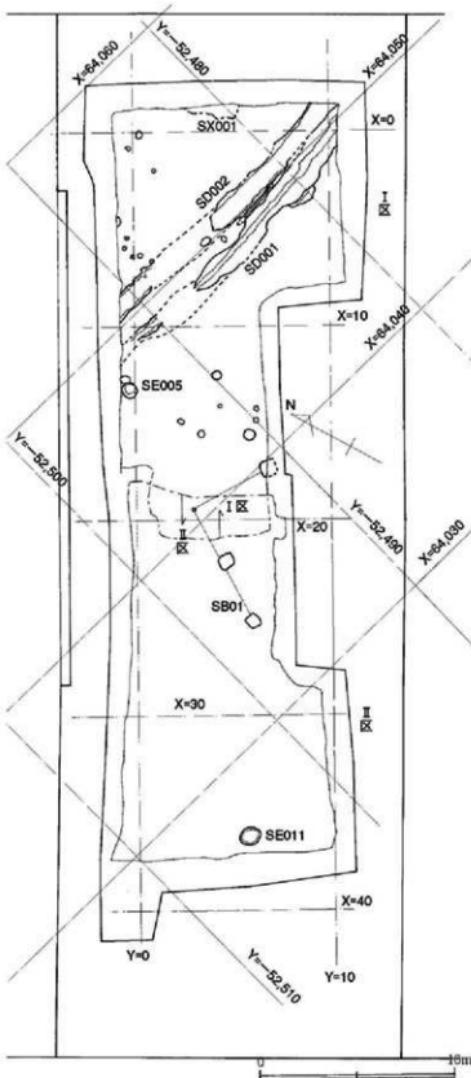


Fig. 2 比恵100次調査区全体図 (S = 1 / 250)

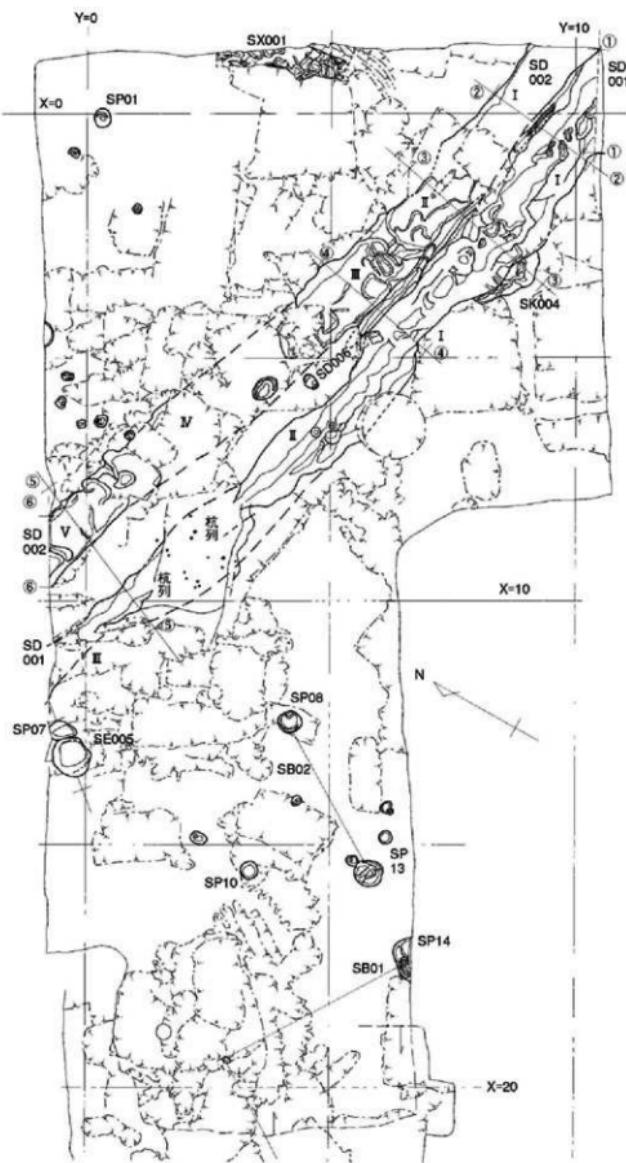


Fig. 3 東半調査区(1区)平面図 ($S = 1/100$)

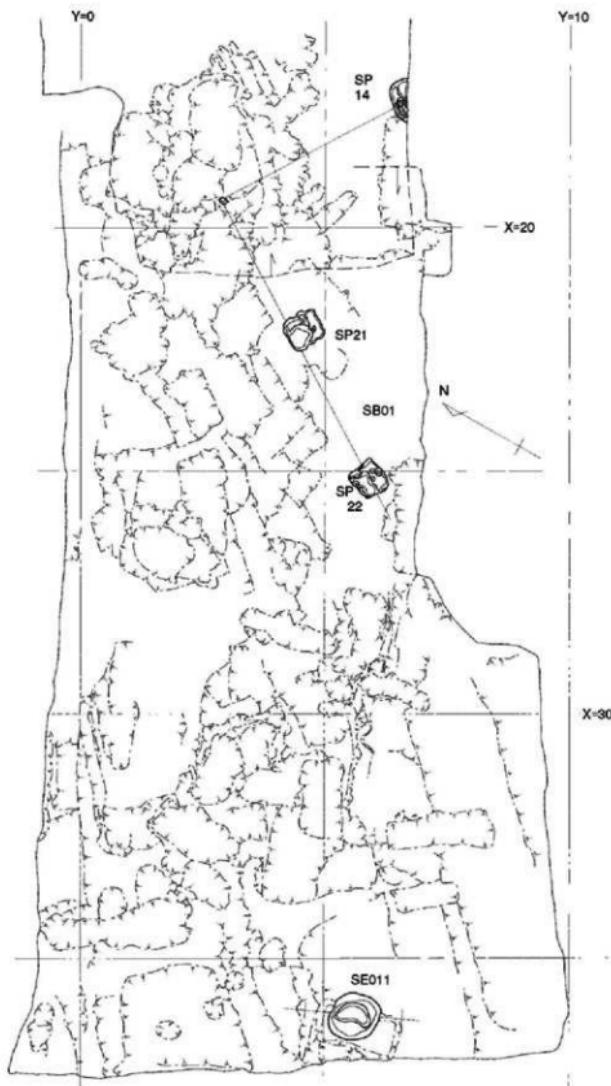


Fig. 4 西半調査区（II区）平面図 ($S = 1/100$)

れる柱穴もあるが、削平や擾乱で建物構成は不明である。

遺物はパンケース6箱分出土した。弥生土器、古式土器、古代の土師器・須恵器、中世～近世の土器・陶磁器のほか、弥生時代終末の井戸と近世溝から木製品が、古墳時代前期と弥生終末の井戸から植物遺存体（種子）が出土している。

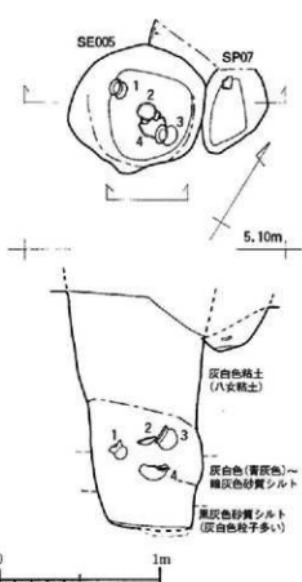


Fig. 5 SE005実測図 (S = 1 / 30)

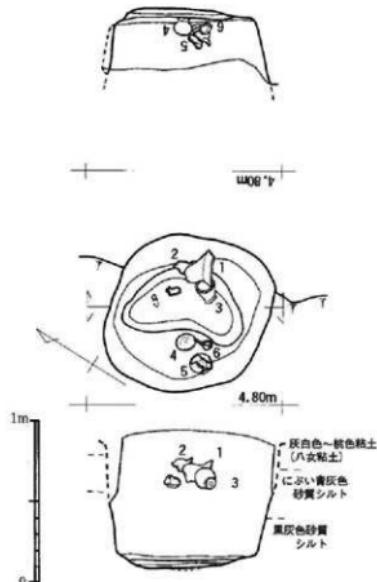


Fig. 6 SE011実測図 (S = 1 / 30)

発掘調査は2005年6月1日に開始した。まず重機により遺構検出面である地山上面までの表土を除去した。廃土処理の都合から敷地の東半分を先に調査し、これをI区とした(Fig.3)。西半分(II区)は土砂を反転して調査している。6月2日に機材を搬入し、調査区内の作業を開始した。6月17日までにI区の調査を終了した。6月18日から21日にかけて重機により廃土の埋め戻しと西半分の表土の除去を行った。6月21日より西半分(II区)の調査を開始し(Fig.4)、6月30日までに調査区内の作業を終了し、機材を撤収した。7月1日に西半分の調査区を埋め戻し、本調査を終了した。

2) 検出遺構

(1) 井戸 (SE)

・SE005 (Fig.5, PL.3-5, 6)

I区北側壁面際で検出した井戸である。SP07を切る。検出面のレベルは4.80m前後で、八女粘土上面で検出した。上面で75×85cmの略円形、検出面から底面までの深さは1.5mを測る素掘りの井戸である。周囲が近世以降の水田開発で削平されているので、本来は+1m前後の深さがあったであろう。底面近くで周囲が黒灰色シルト地山になる深さで湧水する。覆土は黒色粘土を主体に地山の八女粘土ブロックを含む。検出面から-30cm前後ではほぼ完形の小型丸底壺が検出され、さらに深さ-80~100cm前後で小型丸底壺などの3個体の完形土器の廃棄があり、この下の-100~110cmで壺の破片の廃棄があった。その他は遺物の出土は小片のみで少ない。完形土器3個の廃棄レベルのやや上(-70cm前後)で桃核のまとまった廃棄があり(桃核についての報告は24頁参照)、一連の井戸廃棄儀礼の可能性がある。井戸の廃棄時期は、小型丸底壺の型式観から、古墳時代前期後半(III A期古

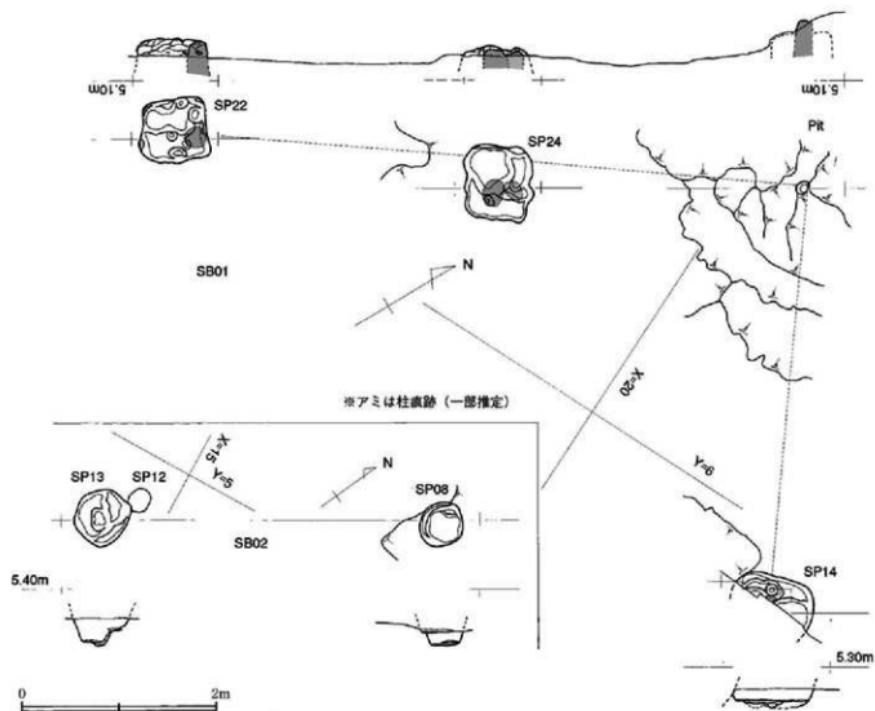


Fig. 7 SB01・SB02実測図 ($S = 1/50$)

相)と考えられる。

・SE011 (Fig. 6, PL. 3-7, 8)

II区西縁で検出した井戸。西半分を搅乱坑で大きく切られ、また削平が顯著であり(八女粘土上面で検出)、深さ86cmの遺存である。 $100 \times 112\text{cm}$ の不正楕円形を呈する。底面やや上の暗灰色シルト地山から湧水する。検出面から20cm前後で土器(甕片2、支脚)や石の一括出土があり、さらに底面付近で小型壺2点と木製品(柄杓)の出土があった。覆土途中で杭が打ち込まれたような出土状況が1カ所あり、確認できなかったが、あるいは井戸側のような構造が最下部にあった可能性もある。土器は井戸本体の深さを考えれば全て「下層」出土であり、井戸廢棄時の祭祀行為に伴い、時期を示すだろう。土器は弥生時代終末(I B期)の在地系主体の様相である。

(2) 建物址 (SB)

・SB01 (Fig. 7, PL. 3-9, 10)

I区西側からII区東側で検出した掘立柱建物。 1×2 間と推定するが、南側2柱穴分は調査区外であり、北隅は搅乱を除去した下から検出した痕跡的な柱穴で、復元にやや不安もある。いずれの柱穴も、削平により僅かな深さしか残っていない。SP22とSP24では柱痕が認められ、SP24の状況からは建替も想定しうる。主軸方位はN-37°-Eである。SP22から古式土器片が数点出土し、古墳時代前期初頭から前半の建物であろう。

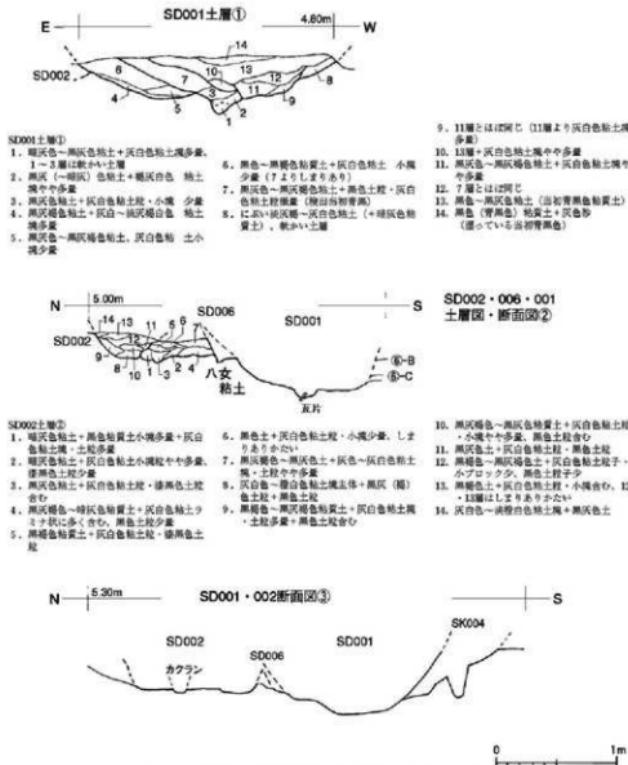
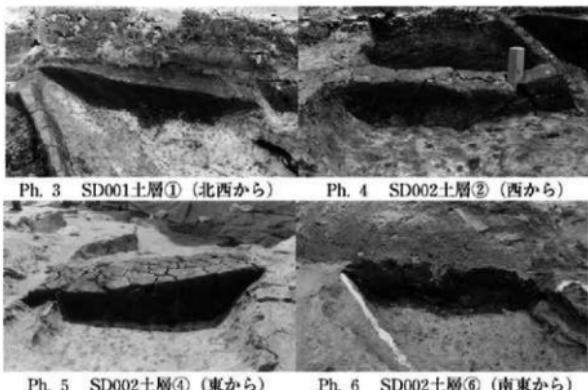
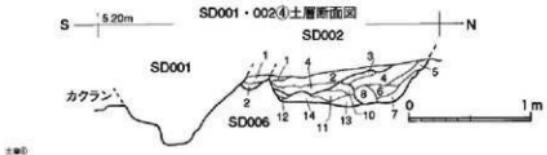


Fig. 8 溝状遺構土層図・断面図 (1) (1/40)





土壤④
SD001
1. 黒褐色土・深褐色粘土質土・洪积土层
2. 黑褐色粘土質土 (SD001地表下約1m)、流入
土層
SD002
1. 黑褐色土・深褐色粘土質土・土塊・洪积土層
2. 黑褐色土 (1~4cm) すきま水
3. 黑褐色土 (4~6cm)、流入
4. 黑褐色土 (6~8cm) (洪积土層)、流入
5. 黑褐色土 (8~10cm)、流入
6. 黑褐色土 (10~12cm) (洪积土層)、流入
7. 黑褐色土 (12~14cm) (洪积土層)、流入
8. 黑褐色土 (14~16cm)、流入
9. 黑褐色土 (16~18cm)、流入
10. 黑褐色土 (18~20cm)、流入
11. 黑褐色土 (20~22cm)、流入
12. 黑褐色土 (22~24cm)、流入
13. 黑褐色土 (24~26cm)、流入
14. 黑褐色土 (26~28cm)、流入
15. 黑褐色土 (28~30cm)、流入
16. 黑褐色土 (30~32cm)、流入
17. 黑褐色土 (32~34cm)、流入
18. 黑褐色土 (34~36cm)、流入
19. 黑褐色土 (36~38cm)、流入
20. 黑褐色土 (38~40cm)、流入
21. 黑褐色土 (40~42cm)、流入
22. 黑褐色土 (42~44cm)、流入
23. 黑褐色土 (44~46cm)、流入
24. 黑褐色土 (46~48cm)、流入
25. 黑褐色土 (48~50cm)、流入
26. 黑褐色土 (50~52cm)、流入
27. 黑褐色土 (52~54cm)、流入
28. 黑褐色土 (54~56cm)、流入
29. 黑褐色土 (56~58cm)、流入
30. 黑褐色土 (58~60cm)、流入
31. 黑褐色土 (60~62cm)、流入
32. 黑褐色土 (62~64cm)、流入
33. 黑褐色土 (64~66cm)、流入
34. 黑褐色土 (66~68cm)、流入
35. 黑褐色土 (68~70cm)、流入
36. 黑褐色土 (70~72cm)、流入
37. 黑褐色土 (72~74cm)、流入
38. 黑褐色土 (74~76cm)、流入
39. 黑褐色土 (76~78cm)、流入
40. 黑褐色土 (78~80cm)、流入
41. 黑褐色土 (80~82cm)、流入
42. 黑褐色土 (82~84cm)、流入
43. 黑褐色土 (84~86cm)、流入
44. 黑褐色土 (86~88cm)、流入
45. 黑褐色土 (88~90cm)、流入
46. 黑褐色土 (90~92cm)、流入
47. 黑褐色土 (92~94cm)、流入
48. 黑褐色土 (94~96cm)、流入
49. 黑褐色土 (96~98cm)、流入
50. 黑褐色土 (98~100cm)、流入
51. 黑褐色土 (100~102cm)、流入
52. 黑褐色土 (102~104cm)、流入
53. 黑褐色土 (104~106cm)、流入
54. 黑褐色土 (106~108cm)、流入
55. 黑褐色土 (108~110cm)、流入
56. 黑褐色土 (110~112cm)、流入
57. 黑褐色土 (112~114cm)、流入
58. 黑褐色土 (114~116cm)、流入
59. 黑褐色土 (116~118cm)、流入
60. 黑褐色土 (118~120cm)、流入
61. 黑褐色土 (120~122cm)、流入
62. 黑褐色土 (122~124cm)、流入
63. 黑褐色土 (124~126cm)、流入
64. 黑褐色土 (126~128cm)、流入
65. 黑褐色土 (128~130cm)、流入
66. 黑褐色土 (130~132cm)、流入
67. 黑褐色土 (132~134cm)、流入
68. 黑褐色土 (134~136cm)、流入
69. 黑褐色土 (136~138cm)、流入
70. 黑褐色土 (138~140cm)、流入
71. 黑褐色土 (140~142cm)、流入
72. 黑褐色土 (142~144cm)、流入
73. 黑褐色土 (144~146cm)、流入
74. 黑褐色土 (146~148cm)、流入
75. 黑褐色土 (148~150cm)、流入
76. 黑褐色土 (150~152cm)、流入
77. 黑褐色土 (152~154cm)、流入
78. 黑褐色土 (154~156cm)、流入
79. 黑褐色土 (156~158cm)、流入
80. 黑褐色土 (158~160cm)、流入
81. 黑褐色土 (160~162cm)、流入
82. 黑褐色土 (162~164cm)、流入
83. 黑褐色土 (164~166cm)、流入
84. 黑褐色土 (166~168cm)、流入
85. 黑褐色土 (168~170cm)、流入
86. 黑褐色土 (170~172cm)、流入
87. 黑褐色土 (172~174cm)、流入
88. 黑褐色土 (174~176cm)、流入
89. 黑褐色土 (176~178cm)、流入
90. 黑褐色土 (178~180cm)、流入
91. 黑褐色土 (180~182cm)、流入
92. 黑褐色土 (182~184cm)、流入
93. 黑褐色土 (184~186cm)、流入
94. 黑褐色土 (186~188cm)、流入
95. 黑褐色土 (188~190cm)、流入
96. 黑褐色土 (190~192cm)、流入
97. 黑褐色土 (192~194cm)、流入
98. 黑褐色土 (194~196cm)、流入
99. 黑褐色土 (196~198cm)、流入
100. 黑褐色土 (198~200cm)、流入
101. 黑褐色土 (200~202cm)、流入
102. 黑褐色土 (202~204cm)、流入
103. 黑褐色土 (204~206cm)、流入
104. 黑褐色土 (206~208cm)、流入
105. 黑褐色土 (208~210cm)、流入
106. 黑褐色土 (210~212cm)、流入
107. 黑褐色土 (212~214cm)、流入
108. 黑褐色土 (214~216cm)、流入
109. 黑褐色土 (216~218cm)、流入
110. 黑褐色土 (218~220cm)、流入
111. 黑褐色土 (220~222cm)、流入
112. 黑褐色土 (222~224cm)、流入
113. 黑褐色土 (224~226cm)、流入
114. 黑褐色土 (226~228cm)、流入
115. 黑褐色土 (228~230cm)、流入
116. 黑褐色土 (230~232cm)、流入
117. 黑褐色土 (232~234cm)、流入
118. 黑褐色土 (234~236cm)、流入
119. 黑褐色土 (236~238cm)、流入
120. 黑褐色土 (238~240cm)、流入
121. 黑褐色土 (240~242cm)、流入
122. 黑褐色土 (242~244cm)、流入
123. 黑褐色土 (244~246cm)、流入
124. 黑褐色土 (246~248cm)、流入
125. 黑褐色土 (248~250cm)、流入
126. 黑褐色土 (250~252cm)、流入
127. 黑褐色土 (252~254cm)、流入
128. 黑褐色土 (254~256cm)、流入
129. 黑褐色土 (256~258cm)、流入
130. 黑褐色土 (258~260cm)、流入
131. 黑褐色土 (260~262cm)、流入
132. 黑褐色土 (262~264cm)、流入
133. 黑褐色土 (264~266cm)、流入
134. 黑褐色土 (266~268cm)、流入
135. 黑褐色土 (268~270cm)、流入
136. 黑褐色土 (270~272cm)、流入
137. 黑褐色土 (272~274cm)、流入
138. 黑褐色土 (274~276cm)、流入
139. 黑褐色土 (276~278cm)、流入
140. 黑褐色土 (278~280cm)、流入
141. 黑褐色土 (280~282cm)、流入
142. 黑褐色土 (282~284cm)、流入
143. 黑褐色土 (284~286cm)、流入
144. 黑褐色土 (286~288cm)、流入
145. 黑褐色土 (288~290cm)、流入
146. 黑褐色土 (290~292cm)、流入
147. 黑褐色土 (292~294cm)、流入
148. 黑褐色土 (294~296cm)、流入
149. 黑褐色土 (296~298cm)、流入
150. 黑褐色土 (298~300cm)、流入
151. 黑褐色土 (300~302cm)、流入
152. 黑褐色土 (302~304cm)、流入
153. 黑褐色土 (304~306cm)、流入
154. 黑褐色土 (306~308cm)、流入
155. 黑褐色土 (308~310cm)、流入
156. 黑褐色土 (310~312cm)、流入
157. 黑褐色土 (312~314cm)、流入
158. 黑褐色土 (314~316cm)、流入
159. 黑褐色土 (316~318cm)、流入
160. 黑褐色土 (318~320cm)、流入
161. 黑褐色土 (320~322cm)、流入
162. 黑褐色土 (322~324cm)、流入
163. 黑褐色土 (324~326cm)、流入
164. 黑褐色土 (326~328cm)、流入
165. 黑褐色土 (328~330cm)、流入
166. 黑褐色土 (330~332cm)、流入
167. 黑褐色土 (332~334cm)、流入
168. 黑褐色土 (334~336cm)、流入
169. 黑褐色土 (336~338cm)、流入
170. 黑褐色土 (338~340cm)、流入
171. 黑褐色土 (340~342cm)、流入
172. 黑褐色土 (342~344cm)、流入
173. 黑褐色土 (344~346cm)、流入
174. 黑褐色土 (346~348cm)、流入
175. 黑褐色土 (348~350cm)、流入
176. 黑褐色土 (350~352cm)、流入
177. 黑褐色土 (352~354cm)、流入
178. 黑褐色土 (354~356cm)、流入
179. 黑褐色土 (356~358cm)、流入
180. 黑褐色土 (358~360cm)、流入
181. 黑褐色土 (360~362cm)、流入
182. 黑褐色土 (362~364cm)、流入
183. 黑褐色土 (364~366cm)、流入
184. 黑褐色土 (366~368cm)、流入
185. 黑褐色土 (368~370cm)、流入
186. 黑褐色土 (370~372cm)、流入
187. 黑褐色土 (372~374cm)、流入
188. 黑褐色土 (374~376cm)、流入
189. 黑褐色土 (376~378cm)、流入
190. 黑褐色土 (378~380cm)、流入
191. 黑褐色土 (380~382cm)、流入
192. 黑褐色土 (382~384cm)、流入
193. 黑褐色土 (384~386cm)、流入
194. 黑褐色土 (386~388cm)、流入
195. 黑褐色土 (388~390cm)、流入
196. 黑褐色土 (390~392cm)、流入
197. 黑褐色土 (392~394cm)、流入
198. 黑褐色土 (394~396cm)、流入
199. 黑褐色土 (396~398cm)、流入
200. 黑褐色土 (398~400cm)、流入
201. 黑褐色土 (400~402cm)、流入
202. 黑褐色土 (402~404cm)、流入
203. 黑褐色土 (404~406cm)、流入
204. 黑褐色土 (406~408cm)、流入
205. 黑褐色土 (408~410cm)、流入
206. 黑褐色土 (410~412cm)、流入
207. 黑褐色土 (412~414cm)、流入
208. 黑褐色土 (414~416cm)、流入
209. 黑褐色土 (416~418cm)、流入
210. 黑褐色土 (418~420cm)、流入
211. 黑褐色土 (420~422cm)、流入
212. 黑褐色土 (422~424cm)、流入
213. 黑褐色土 (424~426cm)、流入
214. 黑褐色土 (426~428cm)、流入
215. 黑褐色土 (428~430cm)、流入
216. 黑褐色土 (430~432cm)、流入
217. 黑褐色土 (432~434cm)、流入
218. 黑褐色土 (434~436cm)、流入
219. 黑褐色土 (436~438cm)、流入
220. 黑褐色土 (438~440cm)、流入
221. 黑褐色土 (440~442cm)、流入
222. 黑褐色土 (442~444cm)、流入
223. 黑褐色土 (444~446cm)、流入
224. 黑褐色土 (446~448cm)、流入
225. 黑褐色土 (448~450cm)、流入
226. 黑褐色土 (450~452cm)、流入
227. 黑褐色土 (452~454cm)、流入
228. 黑褐色土 (454~456cm)、流入
229. 黑褐色土 (456~458cm)、流入
230. 黑褐色土 (458~460cm)、流入
231. 黑褐色土 (460~462cm)、流入
232. 黑褐色土 (462~464cm)、流入
233. 黑褐色土 (464~466cm)、流入
234. 黑褐色土 (466~468cm)、流入
235. 黑褐色土 (468~470cm)、流入
236. 黑褐色土 (470~472cm)、流入
237. 黑褐色土 (472~474cm)、流入
238. 黑褐色土 (474~476cm)、流入
239. 黑褐色土 (476~478cm)、流入
240. 黑褐色土 (478~480cm)、流入
241. 黑褐色土 (480~482cm)、流入
242. 黑褐色土 (482~484cm)、流入
243. 黑褐色土 (484~486cm)、流入
244. 黑褐色土 (486~488cm)、流入
245. 黑褐色土 (488~490cm)、流入
246. 黑褐色土 (490~492cm)、流入
247. 黑褐色土 (492~494cm)、流入
248. 黑褐色土 (494~496cm)、流入
249. 黑褐色土 (496~498cm)、流入
250. 黑褐色土 (498~500cm)、流入
251. 黑褐色土 (500~502cm)、流入
252. 黑褐色土 (502~504cm)、流入
253. 黑褐色土 (504~506cm)、流入
254. 黑褐色土 (506~508cm)、流入
255. 黑褐色土 (508~510cm)、流入
256. 黑褐色土 (510~512cm)、流入
257. 黑褐色土 (512~514cm)、流入
258. 黑褐色土 (514~516cm)、流入
259. 黑褐色土 (516~518cm)、流入
260. 黑褐色土 (518~520cm)、流入
261. 黑褐色土 (520~522cm)、流入
262. 黑褐色土 (522~524cm)、流入
263. 黑褐色土 (524~526cm)、流入
264. 黑褐色土 (526~528cm)、流入
265. 黑褐色土 (528~530cm)、流入
266. 黑褐色土 (530~532cm)、流入
267. 黑褐色土 (532~534cm)、流入
268. 黑褐色土 (534~536cm)、流入
269. 黑褐色土 (536~538cm)、流入
270. 黑褐色土 (538~540cm)、流入
271. 黑褐色土 (540~542cm)、流入
272. 黑褐色土 (542~544cm)、流入
273. 黑褐色土 (544~546cm)、流入
274. 黑褐色土 (546~548cm)、流入
275. 黑褐色土 (548~550cm)、流入
276. 黑褐色土 (550~552cm)、流入
277. 黑褐色土 (552~554cm)、流入
278. 黑褐色土 (554~556cm)、流入
279. 黑褐色土 (556~558cm)、流入
280. 黑褐色土 (558~560cm)、流入
281. 黑褐色土 (560~562cm)、流入
282. 黑褐色土 (562~564cm)、流入
283. 黑褐色土 (564~566cm)、流入
284. 黑褐色土 (566~568cm)、流入
285. 黑褐色土 (568~570cm)、流入
286. 黑褐色土 (570~572cm)、流入
287. 黑褐色土 (572~574cm)、流入
288. 黑褐色土 (574~576cm)、流入
289. 黑褐色土 (576~578cm)、流入
290. 黑褐色土 (578~580cm)、流入
291. 黑褐色土 (580~582cm)、流入
292. 黑褐色土 (582~584cm)、流入
293. 黑褐色土 (584~586cm)、流入
294. 黑褐色土 (586~588cm)、流入
295. 黑褐色土 (588~590cm)、流入
296. 黑褐色土 (590~592cm)、流入
297. 黑褐色土 (592~594cm)、流入
298. 黑褐色土 (594~596cm)、流入
299. 黑褐色土 (596~598cm)、流入
300. 黑褐色土 (598~600cm)、流入
301. 黑褐色土 (600~602cm)、流入
302. 黑褐色土 (602~604cm)、流入
303. 黑褐色土 (604~606cm)、流入
304. 黑褐色土 (606~608cm)、流入
305. 黑褐色土 (608~610cm)、流入
306. 黑褐色土 (610~612cm)、流入
307. 黑褐色土 (612~614cm)、流入
308. 黑褐色土 (614~616cm)、流入
309. 黑褐色土 (616~618cm)、流入
310. 黑褐色土 (618~620cm)、流入
311. 黑褐色土 (620~622cm)、流入
312. 黑褐色土 (622~624cm)、流入
313. 黑褐色土 (624~626cm)、流入
314. 黑褐色土 (626~628cm)、流入
315. 黑褐色土 (628~630cm)、流入
316. 黑褐色土 (630~632cm)、流入
317. 黑褐色土 (632~634cm)、流入
318. 黑褐色土 (634~636cm)、流入
319. 黑褐色土 (636~638cm)、流入
320. 黑褐色土 (638~640cm)、流入
321. 黑褐色土 (640~642cm)、流入
322. 黑褐色土 (642~644cm)、流入
323. 黑褐色土 (644~646cm)、流入
324. 黑褐色土 (646~648cm)、流入
325. 黑褐色土 (648~650cm)、流入
326. 黑褐色土 (650~652cm)、流入
327. 黑褐色土 (652~654cm)、流入
328. 黑褐色土 (654~656cm)、流入
329. 黑褐色土 (656~658cm)、流入
330. 黑褐色土 (658~660cm)、流入
331. 黑褐色土 (660~662cm)、流入
332. 黑褐色土 (662~664cm)、流入
333. 黑褐色土 (664~666cm)、流入
334. 黑褐色土 (666~668cm)、流入
335. 黑褐色土 (668~670cm)、流入
336. 黑褐色土 (670~672cm)、流入
337. 黑褐色土 (672~674cm)、流入
338. 黑褐色土 (674~676cm)、流入
339. 黑褐色土 (676~678cm)、流入
340. 黑褐色土 (678~680cm)、流入
341. 黑褐色土 (680~682cm)、流入
342. 黑褐色土 (682~684cm)、流入
343. 黑褐色土 (684~686cm)、流入
344. 黑褐色土 (686~688cm)、流入
345. 黑褐色土 (688~690cm)、流入
346. 黑褐色土 (690~692cm)、流入
347. 黑褐色土 (692~694cm)、流入
348. 黑褐色土 (694~696cm)、流入
349. 黑褐色土 (696~698cm)、流入
350. 黑褐色土 (698~700cm)、流入
351. 黑褐色土 (700~702cm)、流入
352. 黑褐色土 (702~704cm)、流入
353. 黑褐色土 (704~706cm)、流入
354. 黑褐色土 (706~708cm)、流入
355. 黑褐色土 (708~710cm)、流入
356. 黑褐色土 (710~712cm)、流入
357. 黑褐色土 (712~714cm)、流入
358. 黑褐色土 (714~716cm)、流入
359. 黑褐色土 (716~718cm)、流入
360. 黑褐色土 (718~720cm)、流入
361. 黑褐色土 (720~722cm)、流入
362. 黑褐色土 (722~724cm)、流入
363. 黑褐色土 (724~726cm)、流入
364. 黑褐色土 (726~728cm)、流入
365. 黑褐色土 (728~730cm)、流入
366. 黑褐色土 (730~732cm)、流入
367. 黑褐色土 (732~734cm)、流入
368. 黑褐色土 (734~736cm)、流入
369. 黑褐色土 (736~738cm)、流入
370. 黑褐色土 (738~740cm)、流入
371. 黑褐色土 (740~742cm)、流入
372. 黑褐色土 (742~744cm)、流入
373. 黑褐色土 (744~746cm)、流入
374. 黑褐色土 (746~748cm)、流入
375. 黑褐色土 (748~750cm)、流入
376. 黑褐色土 (750~752cm)、流入
377. 黑褐色土 (752~754cm)、流入
378. 黑褐色土 (754~756cm)、流入
379. 黑褐色土 (756~758cm)、流入
380. 黑褐色土 (758~760cm)、流入
381. 黑褐色土 (760~762cm)、流入
382. 黑褐色土 (762~764cm)、流入
383. 黑褐色土 (764~766cm)、流入
384. 黑褐色土 (766~768cm)、流入
385. 黑褐色土 (768~770cm)、流入
386. 黑褐色土 (770~772cm)、流入
387. 黑褐色土 (772~774cm)、流入
388. 黑褐色土 (774~776cm)、流入
389. 黑褐色土 (776~778cm)、流入
390. 黑褐色土 (778~780cm)、流入
391. 黑褐色土 (780~782cm)、流入
392. 黑褐色土 (782~784cm)、流入
393. 黑褐色土 (784~786cm)、流入
394. 黑褐色土 (786~788cm)、流入
395. 黑褐色土 (788~790cm)、流入
396. 黑褐色土 (790~792cm)、流入
397. 黑褐色土 (792~794cm)、流入
398. 黑褐色土 (794~796cm)、流入
399. 黑褐色土 (796~798cm)、流入
400. 黑褐色土 (798~800cm)、流入
401. 黑褐色土 (800~802cm)、流入
402. 黑褐色土 (802~804cm)、流入
403. 黑褐色土 (804~806cm)、流入
404. 黑褐色土 (806~808cm)、流入
405. 黑褐色土 (808~810cm)、流入
406. 黑褐色土 (810~812cm)、流入
407. 黑褐色土 (812~814cm)、流入
408. 黑褐色土 (814~816cm)、流入
409. 黑褐色土 (816~818cm)、流入
410. 黑褐色土 (818~820cm)、流入
411. 黑褐色土 (820~822cm)、流入
412. 黑褐色土 (822~824cm)、流入
413. 黑褐色土 (824~826cm)、流入
414. 黑褐色土 (826~828cm)、流入
415. 黑褐色土 (828~830cm)、流入
416. 黑褐色土 (830~832cm)、流入
417. 黑褐色土 (832~834cm)、流入
418. 黑褐色土 (834~836cm)、流入
419. 黑褐色土 (836~838cm)、流入
420. 黑褐色土 (838~840cm)、流入
421. 黑褐色土 (840~842cm)、流入
422. 黑褐色土 (842~844cm)、流入
423. 黑褐色土 (844~846cm)、流入
424. 黑褐色土 (846~848cm)、流入
425. 黑褐色土 (848~850cm)、流入
426. 黑褐色土 (850~852cm)、流入
427. 黑褐色土 (852~854cm)、流入
428. 黑褐色土 (854~856cm)、流入
429. 黑褐色土 (856~858cm)、流入
430. 黑褐色土 (858~860cm)、流入
431. 黑褐色土 (860~862cm)、流入
432. 黑褐色土 (862~864cm)、流入
433. 黑褐色土 (864~866cm)、流入
434. 黑褐色土 (866~868cm)、流入
435. 黑褐色土 (868~870cm)、流入
436. 黑褐色土 (870~872cm)、流入
437. 黑褐色土 (872~874cm)、流入
438. 黑褐色土 (874~876cm)、流入
439. 黑褐色土 (876~878cm)、流入
440. 黑褐色土 (878~880cm)、流入
441. 黑褐色土 (880~882cm)、流入
442. 黑褐色土 (882~884cm)、流入
443. 黑褐色土 (884~886cm)、流入
444. 黑褐色土 (886~888cm)、流入
445. 黑褐色土 (888~890cm)、流入
446. 黑褐色土 (890~892cm)、流入
447. 黑褐色土 (892~894cm)、流入
448. 黑褐色土 (894~896cm)、流入
449. 黑褐色土 (896~898cm)、流入
450. 黑褐色土 (898~900cm)、流入
451. 黑褐色土 (900~902cm)、流入
452. 黑褐色土 (902~904cm)、流入
453. 黑褐色土 (904~906cm)、流入
454. 黑褐色土 (906~908cm)、流入
455. 黑褐色土 (908~910cm)、流入
456. 黑褐色土 (910~912cm)、流入
457. 黑褐色土 (912~914cm)、流入
458. 黑褐色土 (914~916cm)、流入
459. 黑褐色土 (916~918cm)、流入
460. 黑褐色土 (918~920cm)、流入
461. 黑褐色土 (920~922cm)、流入
462. 黑褐色土 (922~924cm)、流入
463. 黑褐色土 (924~926cm)、流入
464. 黑褐色土 (926~928cm)、流入
465. 黑褐色土 (928~930cm)、流入
466. 黑褐色土 (930~932cm)、流入
467. 黑褐色土 (932~934cm)、流入
468. 黑褐色土 (934~936cm)、流入
469. 黑褐色土 (936~938cm)、流入
470. 黑褐色土 (938~940cm)、流入
471. 黑褐色土 (940~942cm)、流入
472. 黑褐色土 (942~944cm)、流入
473. 黑褐色土 (944~946cm)、流入
474. 黑褐色土 (946~948cm)、流入
475. 黑褐色土 (948~950cm)、流入
476. 黑褐色土 (950~952cm)、流入
477. 黑褐色土 (952~954cm)、流入
478. 黑褐色土 (954~956cm)、流入
479. 黑褐色土 (956~958cm)、流入
480. 黑褐色土 (958~960cm)、流入
481. 黑褐色土 (960~962cm)、流入
482. 黑褐色土 (962~964cm)、流入
483. 黑褐色土 (964~966cm)、流入
484. 黑褐色土 (966~968cm)、流入
485. 黑褐色土 (968~970cm)、流入
486. 黑褐色土 (970~972cm)、流入
487. 黑褐色土 (972~974cm)、流入
488. 黑褐色土 (974~976cm)、流入
489. 黑褐色土 (976~978cm)、流入
490. 黑褐色土 (978~980cm)、流入
491. 黑褐色土 (980~982cm)、流入
492. 黑褐色土 (982~984cm)、流入
493. 黑褐色土 (984~986cm)、流入
494. 黑褐色土 (986~988cm)、流入
495. 黑褐色土 (988~990cm)、流入
496. 黑褐色土 (990~992cm)、流入
497. 黑褐色土 (992~994cm)、流入
498. 黑褐色土 (994~996cm)、流入
499. 黑褐色土 (996~998cm)、流入
500. 黑褐色土 (998~1000cm)、流入

Fig. 9 溝状構造土層図・断面図 (2) (S = 1/40)

広がる部分とみられる。このような特徴は灌漑水路であることを示すだろう。覆土もやや粘質のシルト主体の水成堆積で、また何處か掘り直しされた土層状況である (Fig. 8, 9, Ph. 3)。出土遺物には近代の陶磁器片も含み、18世紀の陶磁器片がある土坑 (SK004) も切り、近世後期に掘削され比較的最近まで利用された水路と推定される。

• SB02 (Fig. 7)

I 区側検出の 2 柱穴から推定した。覆土の特徴や深さが類似し、組み合うものとしたが、対応する他の柱穴が不明である。遺構検出面の道存度を考えると、2 本柱の豊穴住居の主柱穴ではないかと推定する。覆土は黒褐色土であり、また弥生土器小片があり、弥生後期前半以降と考えられる。

• SD01 (Fig. 3, 8, 9, PL. 3-10)

I 区で検出した溝状構造。ほぼ東西方向に走る。底面は東半分が標高 4.50m、西側は 4.30m 前後であり、SD001 と逆に西側が若干深くなる。箱形ないし逆台形の断面形である。覆土はしまった黒褐色土が主体で、一部波状のラミナ堆積がみられるが、流水があったわけではなくさうである (Fig. 8, 9, Ph. 4~6)。水路ではなくこの時期はまだ高かった段丘を区画する溝であろう。土層を検討すると、1, 2 回の掘り直しの可能性があり、土層④ (Fig. 9 上) の状況と、この 7 層に対応する位置の最下層から出土 (PL. 3-11) した須恵器壺身の型式から、8 世紀前半に一度掘り直されたとみられる。ただし当初の掘削時期は不明である。

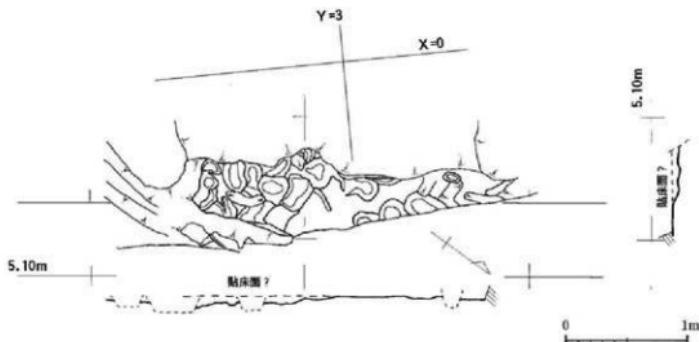


Fig. 10 SX001 (縦穴住居床面掘方か) 実測図 ($S = 1/40$)

・ SD06 (Fig. 3, 8中, 9上)

SD002とSD001の間で検出した細い小溝。重複で本来の溝幅は不明である。SD001に切られ、SD002を切ると考えたが、SD002との関係は微妙である。覆土の特徴はSD002に近いが、場所により推定される断面形が微妙に異なるのはSD002と相違する。出土遺物は少なく時期を決め難いが、SD002の区画方向を踏襲する古代以降の区画溝か。

(3) 不明造構

・ SX001 (Fig. 10, PL. 4-14)

I区東縁で検出された造構。地山の八女粘土面の上に黒色粘質土が覆う状況で検出されたが、これを取り除くと凹凸が激しい掘り方となった。最近の搅乱で周囲や上面の一部を削られ、範囲や壁が全く不明であるが、あるいは縦穴住居の掘方下部の可能性もある。検出面は貼床であった可能性がある。ただし、伴う柱穴などが不明であり、あるいは他の造構かもしれない。黒色土中や検出時に弥生土器の細片が出土しているが、図化に耐えるものではなく、造構の時期も不明である。

その他の造構では、I区検出のSK004がある。SD001に切られる径150cmほどの円形土坑であるが、掘り鉢状断面を呈する (Fig. 8下)。壁の途中に柱穴が伴う。出土遺物には18世紀の陶磁器があり、近世に下る造構である。

3) 出土遺物

(1) 土器・陶磁器

・ SE005出土土器 (Fig. 11)

1は布留系の壺。井戸下層から出土 (Fig. 5-4)。口縁部は全て欠損し、胴部が半裁されたように約半分が現存する。接合する他の破片は無かった。外面調整は、口縁部から頸部下が擦痕あるヨコナデ、胴部はタテハケ後に肩部にストロークの長いヨコハケ、胴部下半はナナメハケ。内面調整は、口縁部がヨコハケ? → 擦痕あるヨコナデ、頸部ナデ、胴部はヘラケズリだが削られた面はやや粗い感じ (あまり平滑でない)、底部から胴部下部にやや広くユビナデ圧痕があるが明らかにヘラケズリによる砂粒の動きの軌線を消し、これを切っている (Ph. 11)。すなわちケズリ後にナデが施される (押し出し丸底技法)。一部胴部中位もケズリ後にナデが施される。器壁はやや厚く、ケズリ調整は布留系壺盛期の丁寧さを欠く。外面は全体的に煤が付着する。表面および器壁ともに灰白色。胎土は比

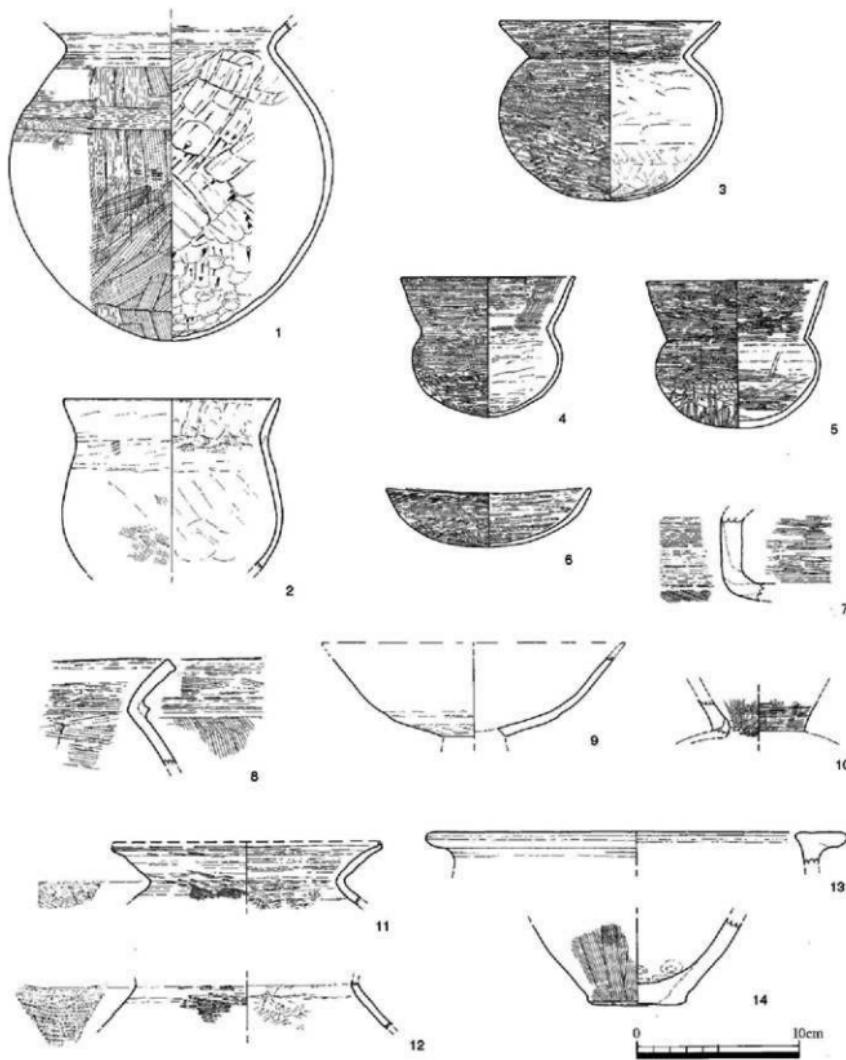


Fig. 11 SE005出土土器 (S = 1 / 3)

較的きめ細かい土だが、やや粗い砂礫を含む。5mmまでの石英を多く、他に3mm以下の長石、花崗岩粒を含み、雲母微粒を僅かに含む。2はおそらくB系統（伝統的V様式変容）壺の末期型式。外表面は、頸部に右上タタキ痕跡、口縁部～胴部上半ナデ、胴部中位以下にハケ痕跡。内面は主にナデ、頸

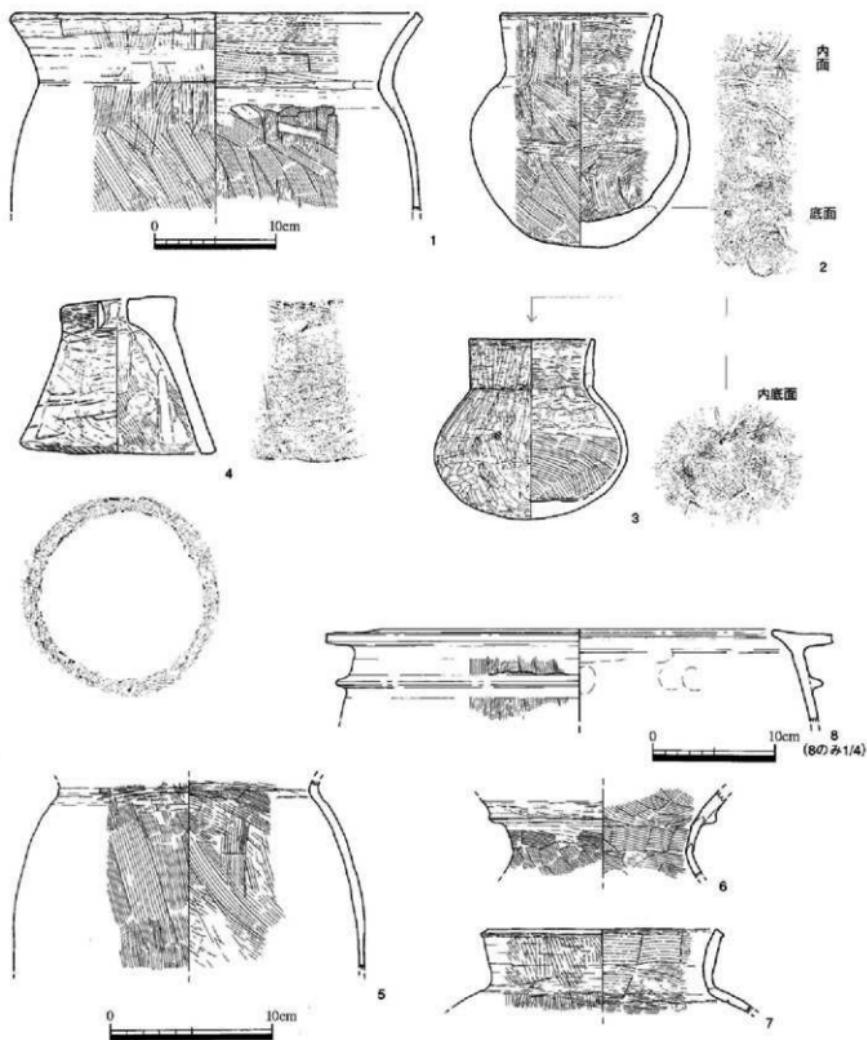


Fig. 12 SE011出土土器 (S = 1 / 3)

部に成形時のユビ压痕残る。上層出土。遺存率 1/4 でやや古い時期の混入か。3 は丸底の堀。下層出土の完形品 (Fig. 5-3)。外面は全体的に顕著な細密ミガキで仕上げる。体部下半は粗い右上タタキ→ケズリ→ミガキ (Ph. 13)、体部上半から頭部はタテハケ (細密条痕) → ヨコミガキ、口縁部はヨコナデ→ヨコミガキ。底部はケズリのみ。内面は、口縁部がヨコ板ナデ→ヨコミガキ、体部はケ

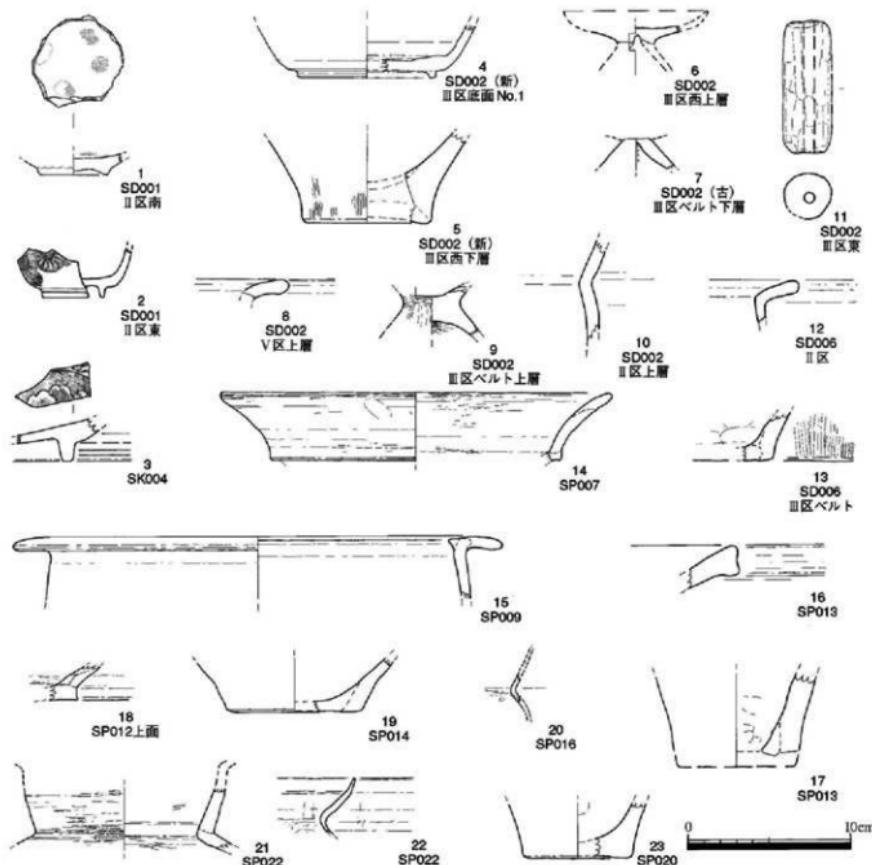


Fig. 13 その他の遺構出土土器・陶器 (S = 1 / 3)

ズリ痕跡→ナデ仕上げ、底部付近は簾状板ナデ→ナメ板ナデ→ナデ。外面下半に小黒斑。にぶい黄橙色。水流精良胎土で長石、雲母、赤色粒子を微量含む。粗いタタキ痕跡があるなど本来の精製器種の作りからはやや異なる。4・5は小型丸底壺。いずれも口縁部が延びるあまり広がらない型式で、口縁部高／体部高は4が0.68、5が0.66でI c類（久住猛雄1999）。全体に細密ミガキ仕上げで水流精良胎土の「精製器種B群」の作り（次山淳1993）。いずれもほぼ完形。4は検出面-60cm前後で出土。外面は、体部中位～口縁部が細密タテハケ→ヨコミガキ、体部下半がケズリ→ミガキ（やや疎）。内面は、口縁部がヨコナデ、一部タテハケ→ヨコミガキ、体部はナデ。灰白色。底部外面に黒灰色斑（Ph. 12）。5は4より下層で鉢や丸底壺などと出土（Fig. 5-1）。外面は、体部中位～口縁部が細密タテハケ→ヨコミガキ、体部下半がケズリ→一定方向のミガキだがミガキが疎で雑。内面は、口縁部

がヨコハケ→ヨコミガキ、体部はヨコのナデ→下半ヨコミガキ、底部は簾状板ナデ痕跡→ナデ。底部がやや厚い感。にぶい橙色。体部上半～口縁部に広く褐色斑、口縁部に黒斑。4・5ともにミガキ調整は盛期の精製器種の作りだが、黒斑を有したり、胎土・色調にばらつきがあるなど、II C期までの統一された一群とは少し異なる観があり、ミガキを省略し始めたI e類に近い型式で、III A期古相に下る。6は精製の丸底の碗状鉢。下層出土の完形品(Fig. 5-2)。外面はケズリ→細密ミガキ、上半はヨコミガキ。下半～底部のミガキは疎で雜。内面は擦痕ヨコナデ→ヨコミガキ。水流精良胎土の精製器種B群。ただし器壁がやや厚い感がある。7は大型の二重口縁壺の頸部と推定。外面はタテハケ→やや細密なヨコミガキ。内面は頸部より下は細密ハケメ、頸部はヨコハケかヨコミガキか不詳。灰白色だが内面は黒色(炭素吸着か)。8は在地系の甕だが型式的に弥生時代後期後半か。頸部に三角突帯。内外面ハケメ、一部ナデないしヨコナデ。9は精製の高杯D1類。坏部下半外面にケズリ痕跡がある他は器表面摩滅し調整不明。水流精良胎土。橙白色を呈するが本来の器表面の橙色が一部残る。10は精製の長頸壺の頸部と判断した。頸部が厚い接合部となるもので、比恵50次SE105に類例があり、やや新しい特徴である。外面はタテハケ→タテミガキ→ヨコミガキ。内面は、頸部が細密ハケメ、頸部より上はヨコハケ→ナナメミガキ。水流精良胎土。にぶい褐色～にぶい橙色。11・12は筑前型庄内甕の比較的新しい型式だが、井戸の時期よりは古い。11は口縁部が上方に明瞭につまみ上げるもので、口縁部は内外面とも回転的ヨコナデを施し、新しい型式(IV式)。12は小片からの径復元などがで肩になるもの。なお上記を含め本報告における古式土師器(弥生時代終末土器も含む)の分類と編年は久住猛雄1999を基本とする。13・14は須玖I式の甕の口縁部と底部。混入品だが、調査地点付近にこの時期の遺構が本来は存在したことを示す。

久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行型の土器様相」「庄内式土器研究」XIX

次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」「考古学研究」第40巻第2号

• SE011出土土器 (Fig. 12)

1は在地系甕。口径34cm(1/4周より復元)のやや大型品。検出面やや下で出土(Fig. 6-1)。胴部最大径が口径とほぼ同じになる型式。口縁部端部は面取り。外面は、口縁部タテハケ→雜なヨコナデ、胴部タテハケ・ナナメハケ→頸部から下にタテハケ。内面は、口縁部ヨコハケ、胴部タテハケ→ナナメハケ→頸部から下にタテハケ、頸部ナデ。外面は頸部前後を除いて煤付着痕跡、内面も煤もしくはコゲ付着。にぶい黄橙色～浅黄橙色、一部灰白色。2は在地系の小型直口壺。最下層出土(Fig. 6-5)。一部欠損(1/3)あるが略完形。全体に厚い器壁で底部が特に分厚い。底部は凸レンズ状。口縁部は面取り後ヨコナデするが、ハケメ仕上げ。外面は、胴部がナナメハケ→ヨコハケ、口縁部タテハケ。底部はハケ→ケズリ→ナデ。内面は、ほぼすべてハケメ仕上げ。外面は(明)褐色、内面は灰褐色。3は小型直口壺。僅かな欠損はあるが完形。最下層出土(Fig. 6-4)。内面底部のハケメの施し方(簾状ハケメ崩れ)や下半のナナメハケ→ヨコハケ、頸部直下の調整などからB系統の在地変容品。類品が比恵51次SE203に(福岡市報告第452集 Fig. 32-198)、またやや異なるが那珂106次SE06にある(福岡市報告第889集 Fig. 12-57, 58)。技法は外来系だが器形は2のような在地系を模倣している可能性がある。外面は、口縁部がヨコナデ→タテのミガキで一部ヨコミガキ、胴部は中位より上がタテハケ→ミガキ、下半はケズリ→粗いミガキ。底部は平底の名残がある丸底。内面は、口縁部ヨコハケ→ヨコナデ、胴部上位はオサエ→ナデ、中位以下はハケメ。外面は灰褐色(下半部は炭素吸着し黒灰色)、内面は黒褐色。4は在地系の脊形器台。完形品。検出面のやや下で出土(Fig. 6-3)。上面が傾き、穿孔がある。外面は、上面がナデ、受部側面にタタキ、以下の脚部にもタタキ痕跡→板ナデ→ナデ。板ナデの起点が条痕状に残る。脚部接地面にタタキ原体の押圧調整。

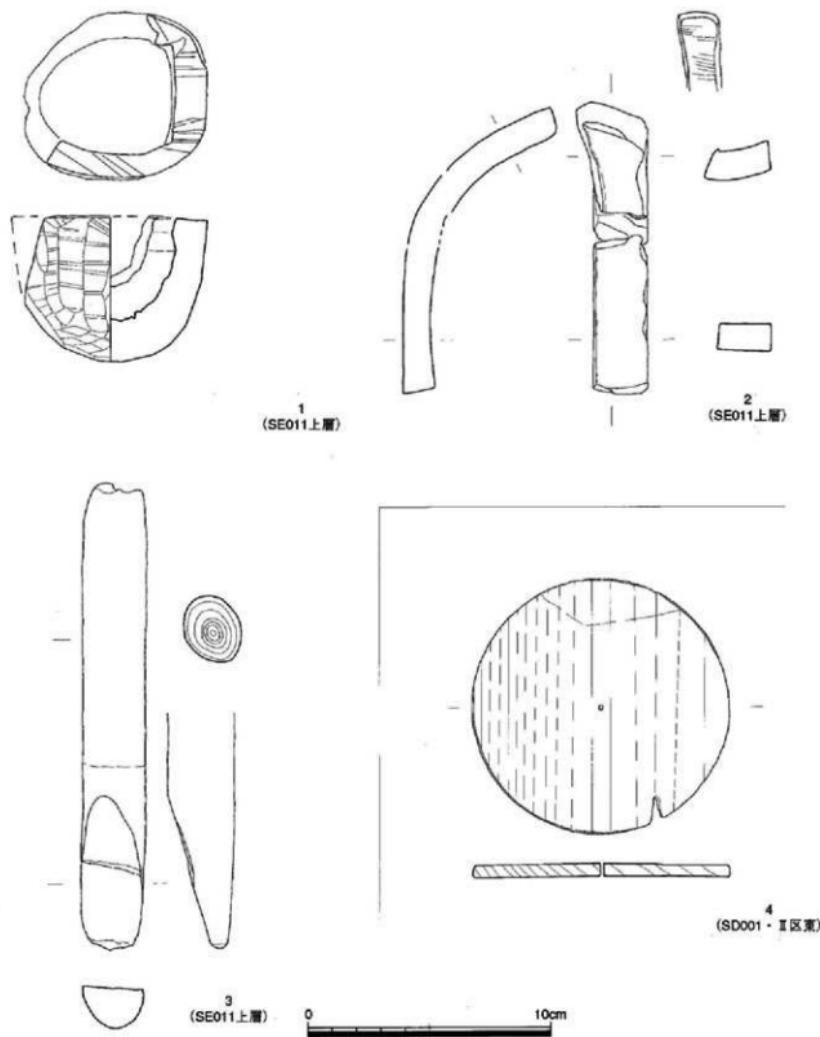


Fig. 14 各遺構出土木製品 (S = 1 / 2)

内面はハケメ→ナデ。5は在地系甕。検出面やや下で出土 (Fig. 6-2)。1/5周から復元。胴部がやや張り出すタイプ。口縁部は欠損。内外面ともハケメ。外面は煤付着。にぶい褐色 (外面) ~ 淡橙

色（内面）。6は在地系の複合口縁壺であろうが、屈曲部は外側に突帯貼付し口縁部は外反する。山陰系や西部瀬戸内系の複合口縁（二重口縁）壺の形態の影響を受けて変容したものか。外面は、口縁部屈曲部前後はヨコナデ（タタキ痕跡）、頸部以下はハケメ。内面は、ヨコハケ・ナナメハケ。灰白色～にぶい橙色。7は在地系の短頸直口壺。1/4周。口縁部端部は面取り。外面は、口縁部がタテハケ→ナデ、頸部ヨコナデ、胴部タテハケ。内面は、口縁部がヨコハケ、頸部以下もヨコハケ。灰白色～淡橙色。以上のうち、1, 4～7は胎土が類似し、色調も近い。また3, 4も胎土に特に大きな違いは無く、いずれも在地品であろう。以上の土器は、弥生時代終末（IA～IB期）である。2の小型壺が凸レンズ底であることや1の壺の形態はIA期にもあるが、5の壺の形態や3のB系統変容品の存在、6の複合口縁壺の変容形態は新しい様相であり、底部はやや古相の2も粗雑な作りであり、全体的には新しい様相でIB期とすべきか。8は弥生中期後半（須玖Ⅱ式）の壺。

・その他の遺構出土土器・陶磁器 (Fig. 13)

井戸以外の出土土器類は少なく、比較的小片が多い。以下、図化できた遺物について簡潔に記す。

1, 2はSD001出土。1は朝鮮王朝の粉青沙器の壺。内底見込みに砂目。全面施釉で壺付はケズリ。



Ph. 7 SE011出土楕形木製品写真



Ph. 8 SE011出土柄杓形木製品写真



Ph. 9 SE011出土杭状木製品写真



Ph. 10 SD001出土蓋板状木製品写真



Ph. 11 SE005出土壺(11-1)内面調整



Ph. 12 SE005出土小型丸底壺
(11-4)底部の底壁



Ph. 13 SE005出土丸底壺の
胴部外表面下半の調整

2は近代の肥前陶磁（有田焼）の染付鉢。プリント文様。3はSK004出土の肥前陶磁の染付の大皿。18世紀代。4～12はSD002出土。4は8世紀前半の須恵器环身。SD002が大きく再掘削された層位の最下層より出土。5は弥生中期（須玖I式）の壺の底部。6は庄内系小型器台の受部、または高杯の环底部。水滸胎土の精製品。7は庄内系小型器台の脚部。8は弥生中期後半～後期初頭の壺の口縁部。小片で傾きはやや不安がある。9は古式土師器（B系）の小型器台ないし脚付小型鉢。10は精製の大型鉢か。径が復元できず、傾きもやや不安がある。時期が不詳だが、弥生後期～終末の高杯などの精良胎土に類似する。11は土鉢。径約6mmの穿孔（軸芯に巻き付けて成形か）がある。砂礫の多い粗い胎土。黒斑あり。時期は不詳。以上、S D002には弥生土器（中期～後期前半）や古式土師器小片がやや多く含まれ、本来はこの地に該期の遺構が多くあったことを伺わせる。溝本来の時期と推定される古代前後の遺物はごくわずかで、他に7世紀頃の須恵器大甕の胴部小片（未図化）がある。

12, 13はSD006出土。12は弥生中期後半の壺の口縁部。13は弥生中期～後期初頭の壺（？）の底部。以上はSD06の推定時期とは異なる混入品。

14～23はピット出土の土器。14はSP007出土の畿内系（C系）二重口縁壺。灰白色～灰褐色だが断面は黒褐色で筑前型庄内壺の焼成と色調に類似。II A期か。15はSP009出土。弥生中期（須玖II式）の壺の口縁部。16, 17はSP013出土。16は弥生土器の広口壺の口縁部。丹塗痕跡があり須玖II式か。17はやや分厚い器壁の弥生土器底部で、後期初頭～前半であろうか。SP13出土の土器片はSB02の時期の上限を示す。18はSP012検出時出土。畿内系（C系）二重口縁壺の口縁部届曲部。接合部の特徴などからII B期前後。19はSP014出土の弥生土器底部。中期後半～後期初頭の壺か。20はSP016出土。小型丸底壺の頸部の小片。頸部ヨコナデなどからおそらく口縁部が長い形態のものだろう。21, 22はSP022出土。21は畿内系（C系）二重口縁壺の頸部。外表面は細密ヨコミガキの痕跡。22は布留系甕の口縁部。いずれもII B期頃か。21, 22はSB01の時期を示すか。23はSP020出土。弥生中期（須玖I式）の壺の底部か。

（2）木製品（Fig. 14）

・SE011出土木器（Fig. 14-1～3, Ph. 7～9）

1, 2は最下層（Fig. 6-6）から出土した楕形柄杓の楕部と柄部。出土状況では、両者が同一と思われる位置で出土していたがすでに破損しており、接合しない。また特に2はやわらかくなってしまっており、遺存状態がやや悪い。またいずれも広葉樹材であろう。1の楕部は、器高6.0cm、口径7.0×8.0cm前後。縱木取りの製作。外表面はシャープな鉄製工具の削り痕跡が明瞭に残るが、工具痕の凹凸はそのままでならっていない。底部を最後に削るか。内表面は例り貫き、ケズリで仕上げるが、工具刃先痕跡はやや残るが外表面より平滑。口縁部は上から見ると隅丸方形気味。2は柄部。残存長11.7cm、幅2.3cm、厚さ1.2cm。3片に破損している。湾曲する柄部で、図の下側が破断面であり楕部に接合する方。上側の持ち手はひねったような形態で、先端は丸みがある。表面に鉄製工具によるケズリ痕跡が一部残る。全体に平滑に仕上げる。縱木取りの製作。比恵痕跡では、異なる形態だが後期後半の58次6号井戸（第561集 Fig. 34-3）などで弥生時代の木製柄杓が出土している。3は杭。検出面からやや下の覆土に刺さったように出土。残存長19.1cm、幅2.6cm、厚さ2.8cm。ほぼ原本のままで先端を斜めに削り切り落とす。一部に僅かな樹皮が残る。

・SD001出土木器（Fig. 14-4, Ph. 10）

4は木製の蓋または底板だが、中央に小孔があり底板よりは曲物の蓋などとすべきか。2片に割れ、一部破損する。ほぼ正円の形態。径10.5cm、厚さ5～5.5mm。木取りは板目取り。おそらく針葉樹材（スギか）。側面の一部にケズリ痕跡。遺存状況は良好で、溝の時期からも近世以降の新しいものであろう。

(3) 井戸出土植物遺存体(種子)について

小畠 弘己(熊本大学埋蔵文化財調査室・文学部助教授)

1. 種子出土遺跡の調査と概要

遺跡の名称: 比恵(ひえ)遺跡群第100次

調査地点

遺跡の所在地: 福岡市博多区博多駅南4丁目

71番1, 77番

調査期間: 2005年6月1日~7月1日

調査担当者: 久住猛雄

遺跡の年代: 弥生時代~古代

遺跡の立地: 台地上、標高6~7m前後

2. 検討資料

資料はいずれも井戸址より出土し、検出後水漬けの状態で保存されていた。種子はすでに土壤から抽出された状態であった。なお出土遺構である第5号井戸は古墳時代前期、第11号井戸は弥生時代終末の所産である。

3. 検出種子の概要

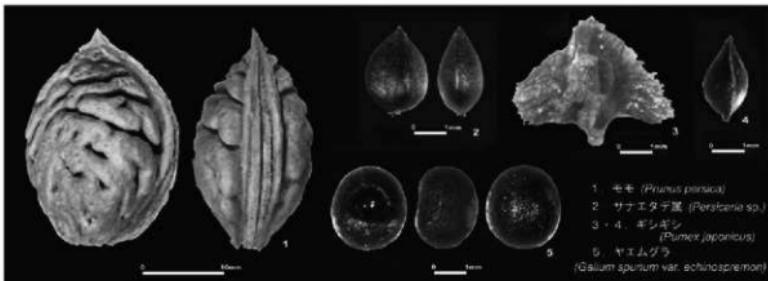
I区第5号井戸(SE005)下層から出土した種子は、モモ(*Prunus persica*)の核である。弥生時代~古墳時代のモモは形態的に3種類に分類(金原ほか1990)されているが、本遺跡例はA類: 2個、B類: 2個、C類: 11個とC類が最も多い。各タイプの平均の大きさは、A類: 22.95 × 17.95 × 14.85mm、B類: 22.55 × 16.70 × 12.50mm、C類: 24.79 × 17.90 × 13.55mmである。平均の大きさは、24.25 × 17.75 × 13.58mmである。これらモモの核が出土した層位は、遺構検出面-70cm前後であるが、小型丸底壺などの一括出土面の直上レベルにあたり、モモは井戸廃棄に伴う一連の儀礼行為に使用された可能性がある。

II区第11号井戸(SE011)最下層に廃棄されていた小型壺2点の内部の土壤からは、サナエタデ属(*Persicaria* sp.)、ギシギシ(*Pumex japonicus*)、ヤエムグラ(*Gallium spurium* var. *echinospermon*)の種子が検出されている。このことからこの井戸に堆積に土壤が堆積した時期の周辺環境は、荒地もしくは人為的行為の及んだ広場の環境であったと考えられる。

Tab.1 比恵遺跡群第100次調査地点種子分析結果

資料名	仮番号	種子検出状況
I区 SE005 (<70cm以下)	1020	モモ核15個体分(完形3、半欠1、破片4)
I区 SE005 (>70cm以上)	1019	モモ核2個
II区 SE11 №4	1016	ギシギシ果実3・種子1
II区 SE11 №4	1017	ヤエムグラ種子5・ギシギシ果実2・同花被2・種子1・サナエタデ属種子1・不明種子皮片3・甲虫脚節1
II区 SE11 №5	1018	ヤエムグラ種子5・ギシギシ果実2・同花被3・サナエタデ属種子1・不明種子皮片3・甲虫脚節1

参考文献: 金原正明・金原正子・鷹川昭平1990[和闌遺跡出土復元と花粉分析]『天理市和闌・森木遺跡第5次調査報告』、20~26頁、奈良県立橿原考古学研究所。



Ph. 14 SE005・SE011出土種子写真

3.まとめと考察

1) 比恵遺跡群100次調査の成果

今回の調査では、遺構の遺存が良好ではなかったが、弥生時代終末から古墳時代前期、古代の遺構を検出した。遺物には弥生中期～後期前半もあり、本来は遺構も存在した可能性がある。地山の状況や遺構遺存状況で比較すると、調査区の東側の方が西側よりも削平度合が小さい。遺構検出面レベルは東西であまり変わらず、本来は東側が低く、西側がより高い地形であったと推定される。東側は後世に水田化し、灌漑水路 SD01が掘削されるが、西から東へ低くなる傾斜地をより東の低いところに合わせて開墾したのである。西側（II区）では井戸と削平された建物1棟しか検出できなかつたが、環溝群（Fig. 1）のある遺跡中枢地区の段丘高位面に隣接し、本来は重要な遺構が展開していたとしてもおかしくない。SE05の桃核の多量出土は、同時期の2号環溝に居た可能性のある首長に関わる儀礼の可能性もあり、環溝群周辺の井戸祭祀のあり方については特に注意を払う必要がある。

2) 古代の溝状遺構 SD02について

東西正方位の区画溝 SD02は、掘り直し溝底面の出土須恵器が8世紀前半であるが（Fig. 13-4）、本来の掘削時期は遺物が少なく不明である。この溝の西側延長線上では（Fig. 1参照）、48次では該当遺構が不明だが（削平か）、さらに西の6次において同一線上の溝がある（SD04）。6次SD04からはIV期前後の須恵器が出土し（市報130集）、この溝と同一とするならば100次SD02の掘削もこの時期まで遡る可能性がある。比恵の南の那珂遺跡群では7世紀後半前に正方位の区画溝や柵列、建物が展開し、比恵でも7・13次では7世紀代の正方位の三重柵区画があり（596集）、比恵・那珂において正方位の地割が広域に作られた可能性がある。SD02の東側延長線上の山王3次調査区では（市報879集）、線上にSD016がある。この溝は11～12世紀の道路遺構 SF030に伴う側溝の可能性がある。道路遺構は補修や再整備、側溝の掘り直しでその成立時期が不明な場合が少なくなく、この溝も古代以来の区画溝（道路側溝？）を踏襲している可能性も今後の周辺の調査で検討されよう。

3) 比恵遺跡群における弥生時代終末期から古墳時代前期の土器編年

（SE005およびSE011出土一括資料の位置付けについて）（予察）

SE011の土器（Fig. 12）は、指標器種が少ないが類例を探るとI B期（弥生終末新相）に比定できる（編年は久住1999、本報告21頁）。壺1は48次SE269や那珂12次SEに、小型壺3は6次SE49や51次SE203に同一型式がある（Fig. 15-33, 65, 38, 61）。小型壺3は「B系統」の製作技法によるが、在地A系統にも同形品がある（Fig. 15-51）。比恵・那珂周辺ではI A～I B期において、在地系と同形または在地系器形を模倣するが技法がB系統である壺類が多くあり（他の地域には希少）、観察や時期（型式）認定に注意が必要である（Fig. 15-18, 24, 16, 14, 9, 10, 46, 38, 52, 61～63など）。I A～I B期の比恵・那珂では、B系統は意外に多く存在するが在地土器様式に規制され潜在化している部分があると言える。またI B期には庄内壺を中心とするC系統が比恵・那珂で受容され生産・消費され始めるが、この時期にはまだ、伝統的な井戸の土器祭祀にはあまり用いられない。比恵・那珂で畿内系精製薄壺が井戸祭祀の主役を奪うのはII A期からであり、またII A期に在地系が急速に減少する（Fig. 16-1の複合口縁壺は希少例）。ただし比恵・那珂周辺（博多・雀居も含む）以外では、II A期はいまだ在地系土器群が主体である。

SE005の土器（Fig. 11）は、小型丸底壺4・5の型式観からIII A期古相に下る（Fig. 16）。細密ヨコミガキで充填するなど一見盛期の精製品だが、体部下半のケズリがあり消されていないことや胎土の選択において（鮮やかな橙色胎土ではない）、やや退化した段階である。壺1もやや厚い器壁でありII C期より新しく、小片だが精製長頸壺10も頭部接合が分厚く古い型式ではない。Fig. 16には比恵・那珂のII B期からIII A期古相の一括資料を配列した。II A期も含む編年の詳細は後日に期したい。

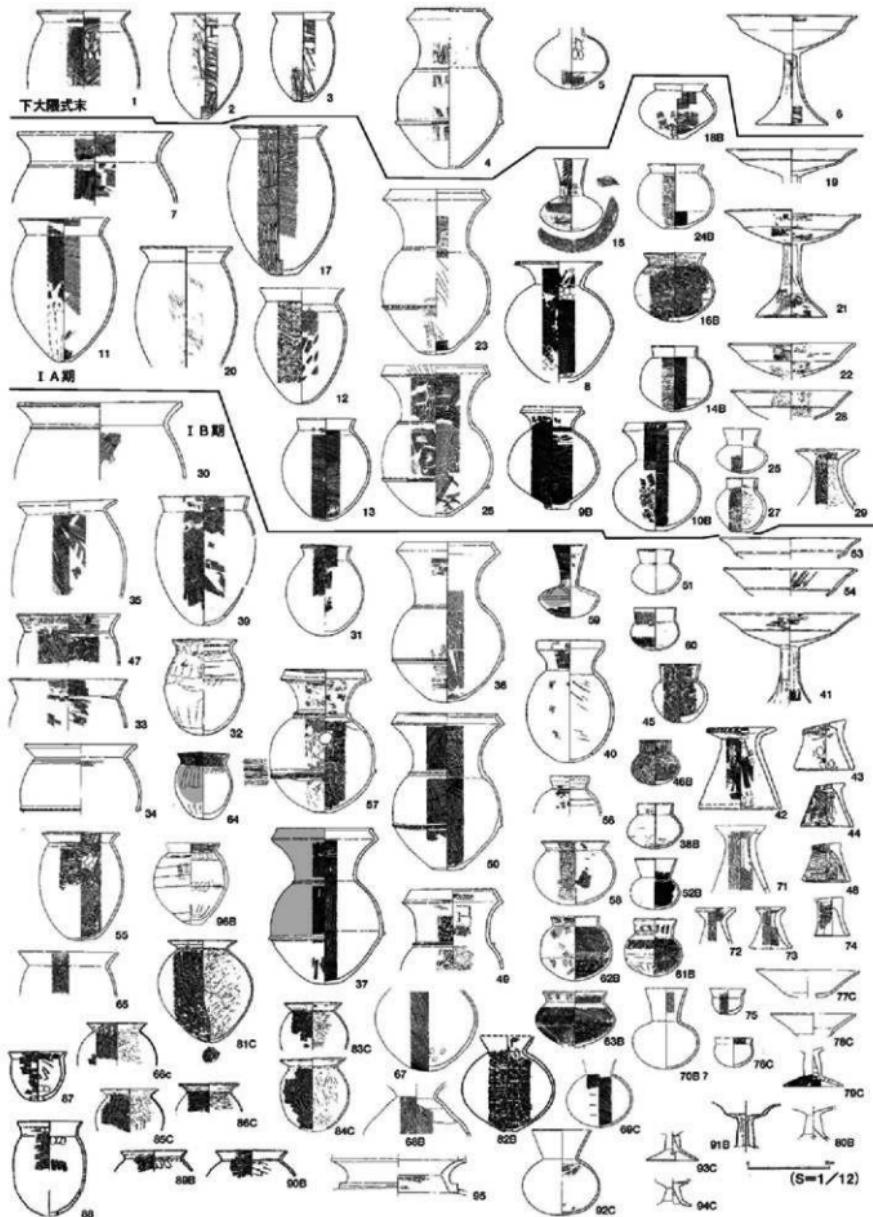


Fig. 15 比叡・那珂遺跡群における下限式末～I B 期の井戸出土土器群の変遷

*大部分が比叡遺跡出土。また一部は土器、堅穴住居など出土で補った。番号後の「B」「C」は製作技法系統（久住1999）。在地系（A系統）は無印。

1~6 比叡 6次SE02(以下、比叡は遺跡名略。SEは井戸)。7~10 14次SE04、11~14 6次SE07、15 82次SE07、16 90次SE207、17~19 43次SE07、20~22 60次SE02、23~24 6次SE45、25~26 6次SE47、27~28 14次SE03、30~34 96 48次SE206、35~36 6次SE202、37~38 79次SE35、39~44 45次SE209、45~48 100次SE11、49 100次SE10、50~52 48次SE254、53~55 48次SE228、55~56 79次SE36、57~58 79次SE37、59~64 51次SE203、65~69 50次SE12、69~71 52次SE291(堅穴住居六ヶ所)、63~64 6次SH14(土坑)、65~66、92~95 基町20次SE17、67~91 基町40次SC16(堅穴住居)

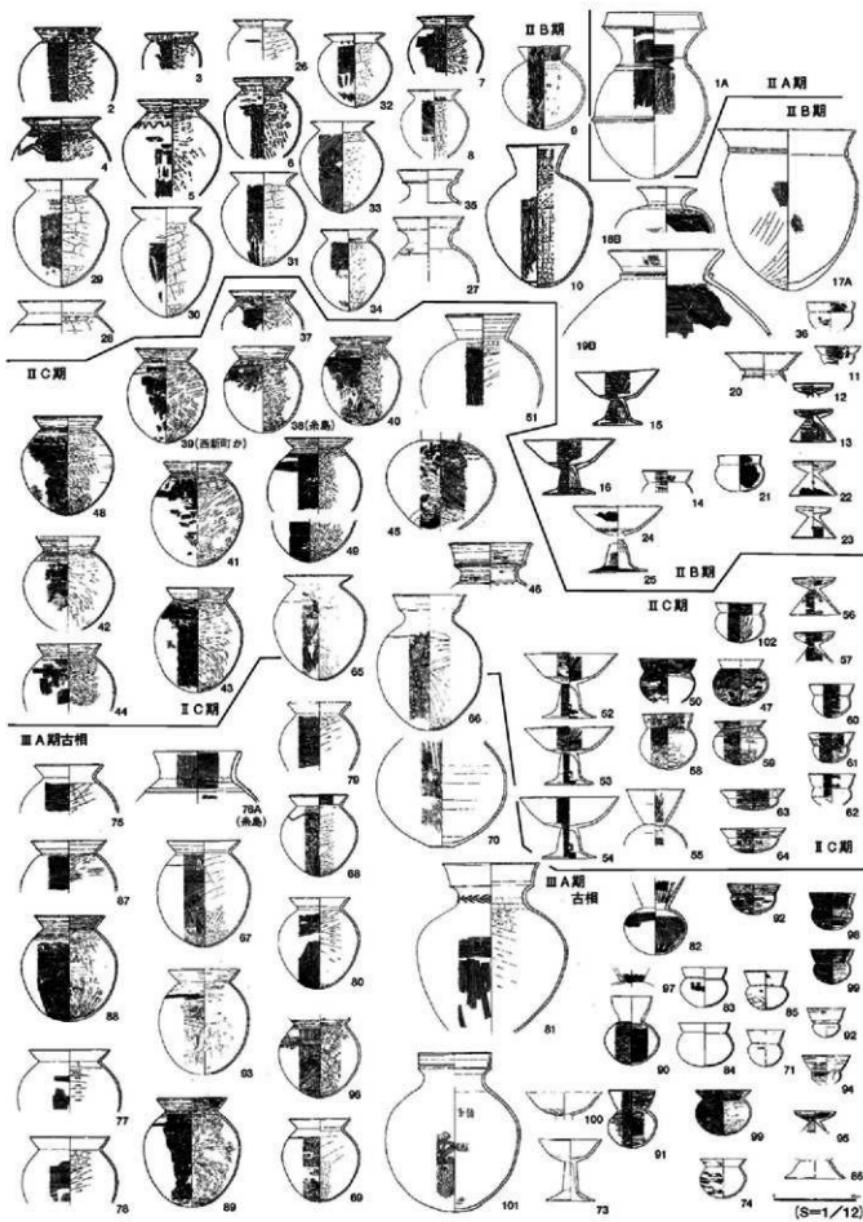


Fig. 16 比恵・那珂遺跡群におけるII B期～III A期古相の井戸出土土器群の変遷（1のみII A期）

※墓園遺跡の資料あり。また一部は溝内一括出土や土坑資料で補った。「A」「B」は技法系統。庄内系（C）、布雷系（D）、山陰系（E）は省略。15無印。
1 比恵6次SE11（以下、比恵は遺跡名省略、2～16 9次SE15、17～28 51次SE201、SK201（井戸口ではなく大柱土坑の可能性あり）、29～32 15次SE11、36、7
大柱SE96、37～47 50次SE136、48～50 50次SE107下層、51～57 102 畠原9次SE19（土坑）、58～64 畠原7次SE104、65～72 那珂50次SD04～P7～P29・那珂土
（窓）、73～74 那珂50次SD04～P3～P6 一般出土（窓）、75～86 11次SE504、87～92 50次SE105上層、93～95 畠原12次SE201、96～100 100次SE05、101 那珂50
次SD04上層（窓）



1. I区調査状況全景
(北西から)



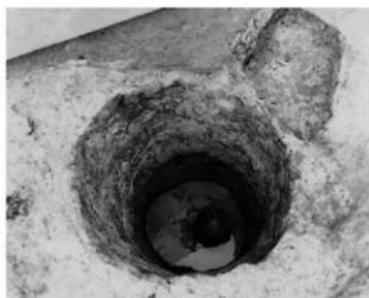
2. I区調査状況全景
(南西から)



3. II区調査状況全景（北西から）



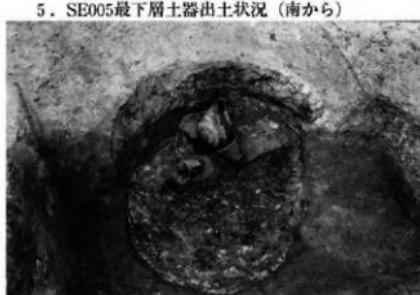
4. II区調査状況全景（南西から）（手前は SE011）



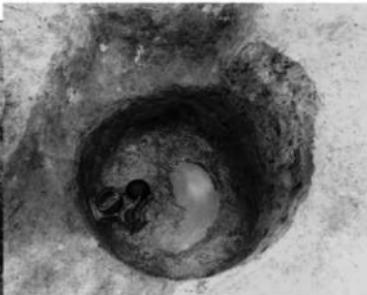
5. SE005最下層土器出土状況（南から）



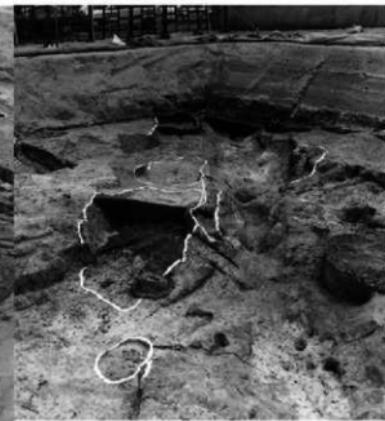
6. SE005下層土器出土状況（南から）

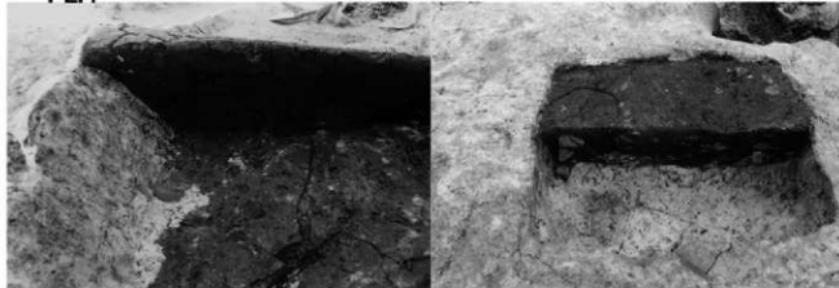


7. SE011土器出土状況（南西から）



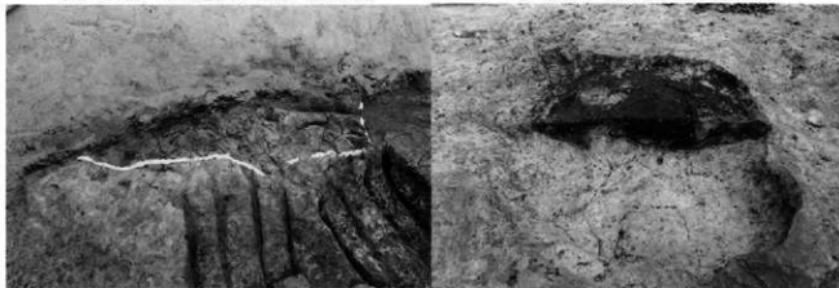
8. SE011最下層土器出土状況（南東から）

9. SD001（中央左）・SD002（中央）掘削状況
(東から)10. SD001（中央左）・SD002（中央）掘削
状況（西から）



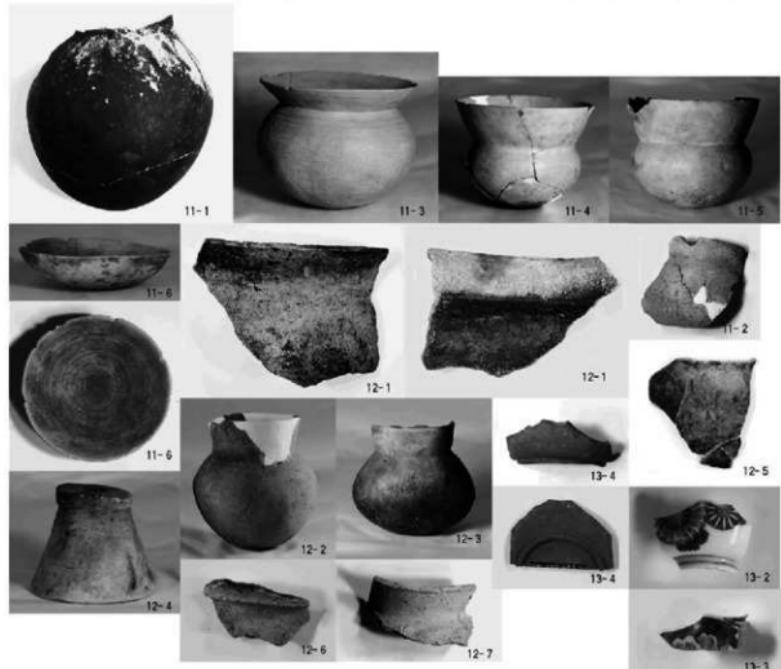
11. SD002-Ⅲ区遺物出土状況（西から）

12. SP024 (SB01) 土層（西から）



14. SX001検出状況（西から）

13. SP022 (SB01) 土層（西から）



15. 比惠100次出土遺物写真（縮尺不同）

III. 比恵遺跡群第102次調査報告



調査前及び表土剥ぎの状況（西から）

遺 跡 名 比恵遺跡群第102次

遺 跡 略 号 HIE-102

遺跡調査番号 0532

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成17年7月4日から8月25日に行った、福岡市博多区博多駅南4丁目100-1・99-2所在の比恵遺跡群第102次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は共同住宅建設に伴う民間受託調査として実施した。
3. 検出遺構はその性格の如何によらず発見順に3桁の連番号を与え、遺構の性格を示す記号としてSC(堅穴住居)、SE(井戸)、SK(土坑)、SP(柱穴・ピット)を頭に付した。
4. 本書に使用した遺構実測図の作製は、吉武　学、坂口剛毅が行った。
5. 本書に使用した遺物実測図の作製は、吉武、田中克子が行った。
6. 鉄製品の透過X線撮影と鑄型の成分分析は、福岡市埋蔵文化財センターが行った。
7. 本書に使用した写真的撮影は、吉武が行った。
8. 本書に使用した図の製図は、吉武・田中・萩尾朱美が行った。
9. 本書に使用した方位は全て磁北である。
10. 本書の執筆・編集は吉武が行った。
11. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理・活用する。

遺跡調査番号	0 5 3 2		遺跡略号	H I E - 1 0 2	
調査地地籍	博多区博多駅南4丁目100-1・99-2		分布地図番号	37	東光寺 0127
開発面積	953.66m ²	調査対象面積	220.15m ²	調査面積	220m ²
調査期間	2005年(平成17年)7月4日～2005年(平成17年)8月25日				

1. はじめに

1) 調査に至る経過

博多区の比恵・那珂遺跡群は福岡平野の歴史を語る上で欠くことのできない重要遺跡である。福岡市教育委員会ではこの遺跡を保護するため、ビル建設などの開発行為が予定された場合には事前に試掘調査を行って地下の遺跡の状況を確認するとともに、現状保存が困難な場合には地権者等の協力を得て記録保存のための緊急発掘調査を行っている。

平成17年、福岡市博多区博多駅南4丁目100-1及び99-2の宅地跡953.66m²において、株式会社ケイコーによる共同住宅建設が計画され、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に4月12日付で埋蔵文化財の事前調査願が提出された。申請地は、福岡市文化財分布地図上の比恵遺跡群に含まれるとともに、西半部分はかつて調査を行った第70次調査地点に相当した。共同住宅建設に伴う民間受託調査として行った第70次調査では、調査後に予定建築物は施工されず、駐車場として利用されていたが、今回更に東側の宅地跡を含めた範囲で新たに共同住宅建設が計画されたものである。この東側宅地部分は、第70次調査地点や周囲の道路よりも65cmほど標高が高く、遺跡が良好に保存されていることが予想された。このため、埋蔵文化財課では5月11日に試掘調査を実施し、対象地に設けた1本のトレンチ（9.4m²）により地表下0.4～0.65mで堅穴住居等の遺構とみられる覆土及び地山ローム層を確認し、極めて濃密に遺構が存在するとの確証を得た。試掘の結果を踏まえ、埋蔵文化財課では施工側と協議を持ったが、予定建築物の構造上、地下の遺跡への影響は避けがたい状況にあり、やむなく記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。調査対象域には、西隣で実施した第70次調査の未調査部分が一部含まれる。発掘調査は平成17年7月4日から8月25日に、整理報告書作成は平成18年度に、埋蔵文化財課が民間受託事業として行った。

2) 調査の組織

調査は以下の組織で行い、埋蔵文化財課調査第2係星野恵美の応援を得た。

調査委託 株式会社ケイコー

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子

調査総括 埋蔵文化財課長 山口譲治（現埋蔵文化財第1課長）

調査庶務 文化財整備課 御手洗 清（前任）、鈴木由香（現文化財管理課管理係）

調査担当 埋蔵文化財課事前審査係 久住猛雄（試掘調査及び事前協議担当）（現埋蔵文化財第1課）

埋蔵文化財課第2係 吉武 学（発掘調査担当）（現埋蔵文化財第1課調査係）

調査協力 坂口剛毅（技能員）、池田省三、上野龍夫、江島光子、加藤常信、唐島栄子、坂下達男、

鶴 ヒサ子、大長正弘、高野瑛子、谷 英二、谷 正則、徳永静雄、中村尚美、

水松トミ子、布江孝子、野田淳一、平川正夫、松永シゲ子、持丸玲子、森田祐子、

山崎光一、山下智子、結城フデ子、吉住政光、吉田恭子、吉田米男（五十音順、敬称略）

整理協力 田中克子（技能員）、下山慎子、萩尾朱美、森 寿恵（五十音順、敬称略）

調査にあたり、委託者である株式会社ケイコーには調査について快くご理解頂くとともに、多大なるご協力を賜りました。また、有限会社ケンソー取締役吉永憲正様には条件整備等でご尽力頂きました。深く感謝申し上げます。

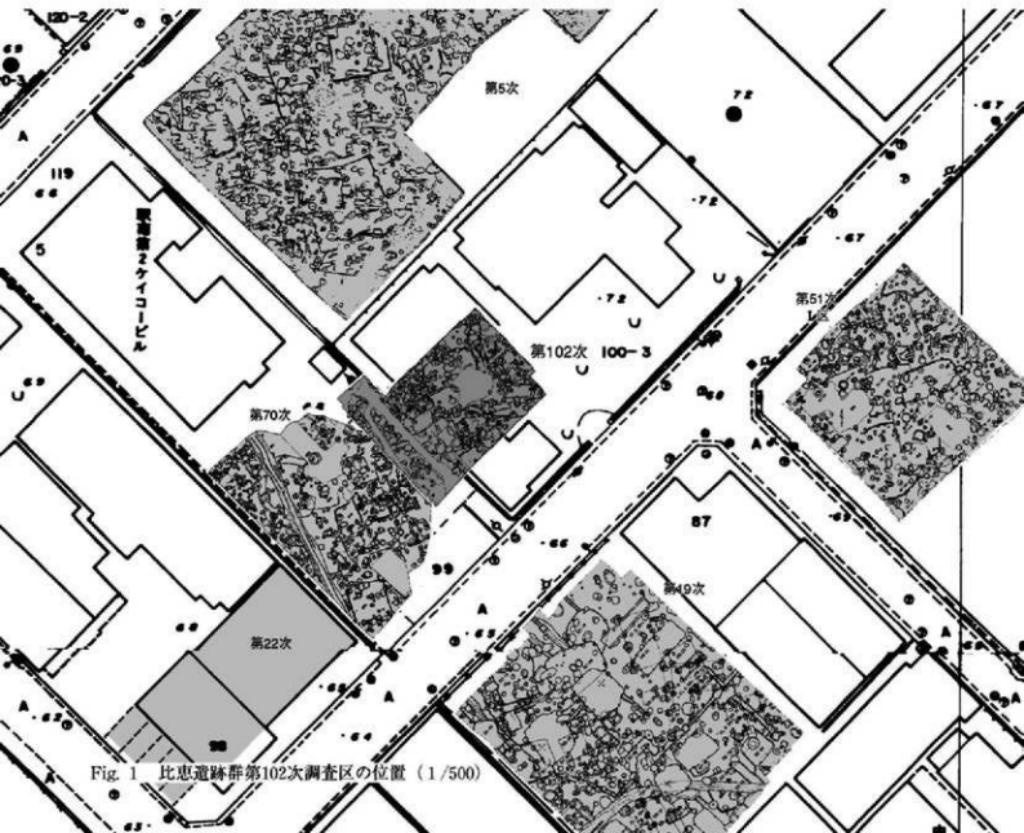
2. 発掘調査の記録

1) 発掘調査の方法と経過

調査対象範囲は敷地の中央部分で、北西側境界から幅7.5m、南東側境界から幅6.7mを残し、北東側は境界際までを対象とし、南西側は第70次調査区境までの範囲である。調査区の形状は北東～南西に長い17.4m×12mの長方形で、北西部は建物の構造上、北へ4.4m×2.9mの拡張区がある。調査面積は220m²である。既に述べたように、調査区の西端は第70次調査区と一部重複し、調査済みの遺構を含む。

調査は7月4日に重機による表土除去から開始した。西隣の第70次調査区は駐車場として利用されていたが、今回の調査に先立ち廃止となったため、ここに排水を置いた。また、対象地西端部には上下水道管とガス管が埋設されていたため、着手はこれの除去工事後となり、1ヶ月遅れて8月5日に再度表土剥ぎを行った。調査中は雨天が少なく猛暑に見舞われたが、8月19日に全景撮影を行い、遺構実測後、25日に埋め戻して調査を終了した。

遺構実測の基準線は調査区の形状に合わせて任意に設定し、後『博多区・南区内（那珂～井尻地区）遺跡基準点測量委託 四級基準点測量成果簿（平成6年2月）』の成果を利用して国土座標（第II系）上に位置づけた。標高もこれによる。



2) 検出遺構と出土遺物の概要 Fig. 2・3、PL. 1

周辺には既調査箇所が多く、西隣に第70次調査地点、北に第5次調査地点が隣接するほか、道路を挟んで南に第19次調査地点が位置する。第70次西側の第22次調査地点では丘陵の落ち際が確認された。本調査区では地表から遺構面までの深さは40cm前後で、基盤の島栖ロームは削平が少なく、遺構検出面の標高は西側第70次より40cm高い。

主な検出遺構は、弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居12軒以上、井戸3基、土坑16基で、他に弥生時代中期～古墳時代前期のピット多数があり、密集した状態で遺構が認められた。土坑や井戸には甕棺の破片が投棄されていたが、埋葬遺構は確認できなかった。また、戰前の工場基礎や前宅地による搅乱坑・溝が多数ある。

遺物は弥生土器・古式土器を中心としたコンテナ80箱分が出土した。特筆すべき遺物には、鐸形土製品・絵画土器・外来系土器・磨製石劍・小鉄斧等がある。

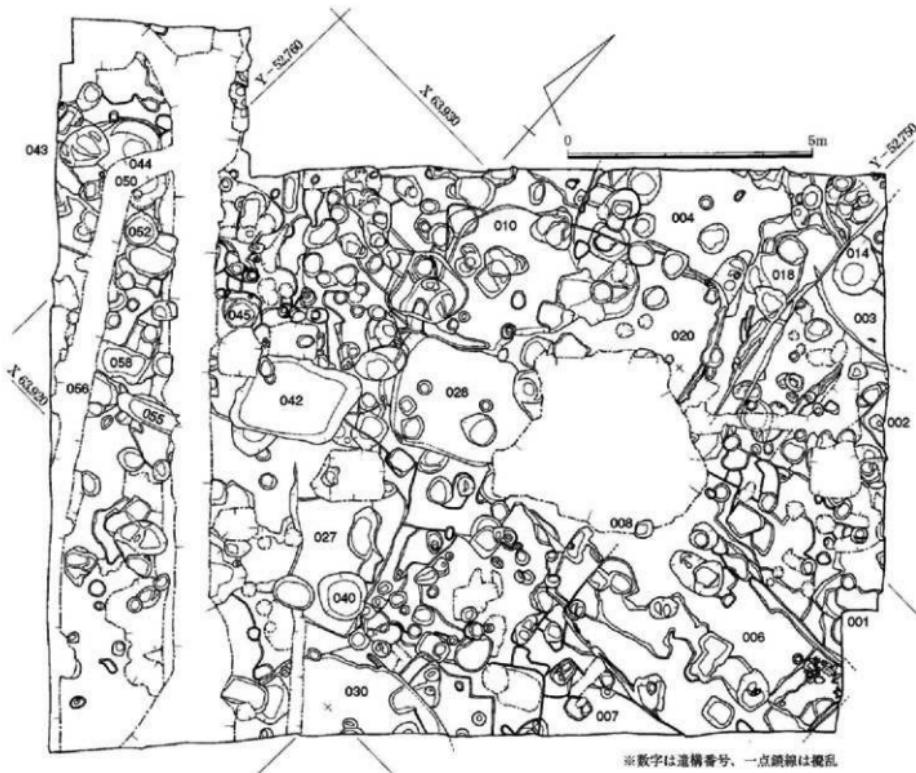


Fig. 2 遺構の配置 (1/100)

遺構は調査区のほぼ全域で密に切り合っており、表土除去時にはFig. 3にスミアミで示した部分は全て遺構覆土（黒褐色粘質土）であった。これらは竪穴住居など複数の遺構が重複したものと考えられるが、覆土が極めて近似しており、繰り返し行った遺構精査によってもプランを明確にできなかったものが多い。遺構覆土からは、須恵器など古墳時代後期以降に下る遺物の出土が極めて少なく、明確な遺構も認められない。よって、弥生時代中期～古墳時代前期に集中して集落が営まれたものと考えられよう。



Fig. 3 遺構覆土の分布範囲 (1/200)

3) 検出遺構と出土遺物

(1) 竪穴住居

SC-001 Fig. 4, PL. 2

調査区の南東壁際で一部を確認した。竪穴住居の壁と思われる立ち上がりが方形に回るが、極く一部であり、住居ではない可能性もある。住居とすれば北西コーナー部ということになるが、残りの良いところでも5cm程度の高さである。現況で西辺0.7m、北辺は土坑状の深い窪みに切られて0.9mが残る。底面に土坑SK-015とピット複数が認められるが住居との関わりは不明である。住居覆土は黒褐色粘質土である。

SC-001出土遺物 Fig. 5, PL. 6

弥生土器・古式土師器の壺・壷・鉢・蓋、砥石片の他土器片約100点がある。

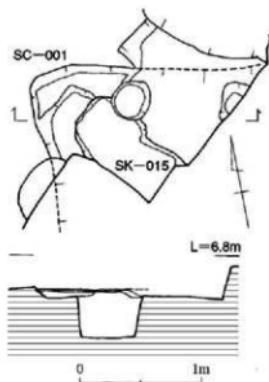


Fig. 4 SC-001 (1/40)

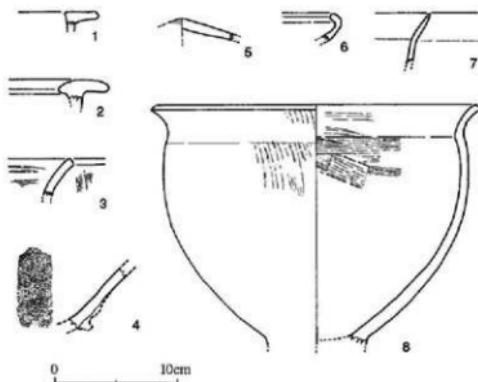


Fig. 5 SC-001出土遺物 (1/4)

1・2は「逆L」字形に屈曲する壺の口縁部で、2は口縁内端が少し突出する。3は外反して聞く壺の口縁部で、外面縦刷毛目、内面横刷毛目調整。灰褐色～橙褐色を呈し、胎土に多量の細砂粒と雲母粒を含み、焼成良好。4は二重口縁壺の口縁部とみられ、内面に櫛描波状文を施す。外面は剥落する。橙褐色を呈し、胎土に細砂粒少量と雲母粒を含み、焼成良好。5は蓋の一部で、外面丹塗り。6は内窓口縁だが、口径が大きく、壺ではなく鉢の口縁部と見られる。7も鉢で、調整不明。淡黄褐色～橙褐色を呈し、胎土に細砂と雲母粒を含み、焼成良好。以上の土器は全て小片で摩滅している。8は脚付鉢で、脚を欠く。外面上半は縦刷毛目、下半ナデ、内面上半横刷毛目、下半ナデ、口縁内外を横ナデ調整する。にぶい橙褐色を呈し、粗砂混じりの細砂粒を多量、カクセン石を少量含み、焼成不良。8は土坑SK-015から出土した。固化していないが、他に台形突帯を貼付した壺の胸部分小片がある。

古墳時代前期の遺構と考えられるが、資料が少なく詳細時期不明である。

SC-002 Fig. 6, PL. 2

SC-001の北側に位置し、同じく調査区の東壁にかかる。擾乱坑に切られて残りが悪いが、方形プランの堅穴住居の南西コーナー部分と考えられる。擾乱坑の東側に長さ0.9m、高さ10cm程度の壁の立ち上がりが伸び、西に0.9m離れて幅20cm、深さ10cmの壁溝状の窪みが南北に並走することから、西壁沿いにベッド状遺構を持つ堅穴住居となる可能性がある。南側は擾乱坑の際まで遺構覆土が続き、床面には東西方向に浅い段が走ることから、L字ないしコ字配置のベッドを持つプランが想定できよう。主柱穴等、床面の施設は不明である。遺構覆土は黒褐色粘質土である。

SC-002出土遺物 Fig. 7

弥生土器壺、古式土師器壺・高杯のほか、土器小片約70点が出土した。

9は弥生土器の壺で、摩滅した小片である。口縁が「逆L」字形に屈曲し、内端がやや突出する。10は古式土師器壺の口縁部で、口唇部を上へつまみ出す。横ナデ調整する。灰褐色を呈し、胎土は精良、焼成不良で破面が黒色を呈する。11は高杯の脚で、外面は縦に暗文を入れ、内面屈曲部以下は横刷毛目、以上はナデ調整する。淡褐色～橙褐色を呈し、胎土は精良で雲母粒を含み、焼成不良である。

資料が少ないが、古式土師器の出土により古墳時代前期の堅穴住居と考えられよう。

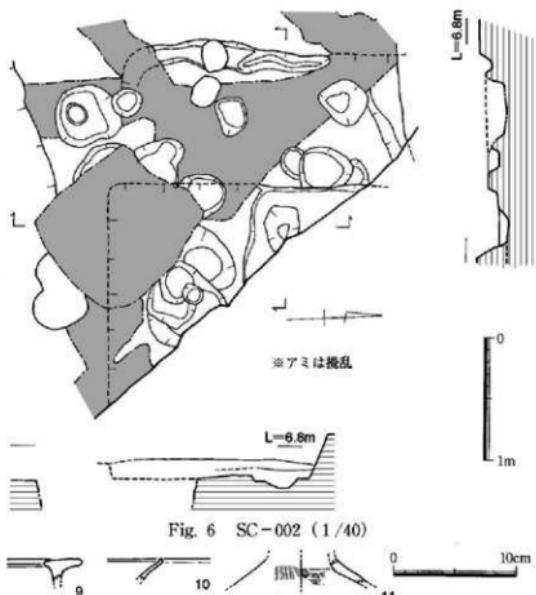


Fig. 6 SC-002 (1/40)

Fig. 7 SC-002出土遺物 (1/4)

SC-003 Fig. 8, PL. 2

調査区北東隅に検出した。住居SC-004に切られる。また、井戸SE-014は出土土器より後出の遺構であることが明らかであるが、切り合いがつかめずに同時に掘り下げた。平面円形の竪穴住居で、弧状に伸びる長さ4.7mの壁から推測される径は10m弱となる。最も残りの良いところで検出面から床面まで20cmが残る。壁の内寄りに離れて幅20cm、深さ5cmほどの壁溝の一部が認められ、建て替えないし括張を示すものかと考えられるが、調査範囲が狭く確認はない。北東隅で柱穴が著しく切り合っており、当住居の主柱穴が含まれるものと考えられる。覆土は黒褐色粘質土で、SC-004やSE-014と酷似する。床面直上から磨製石剣の再利用品が出土した。

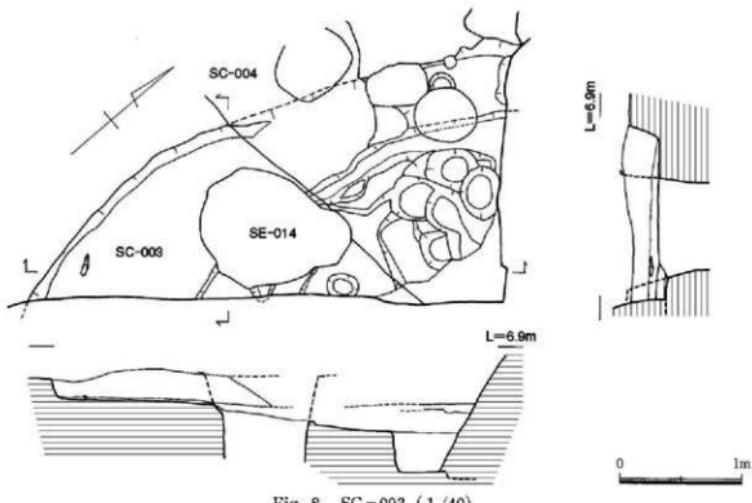


Fig. 8 SC-003 (1/40)

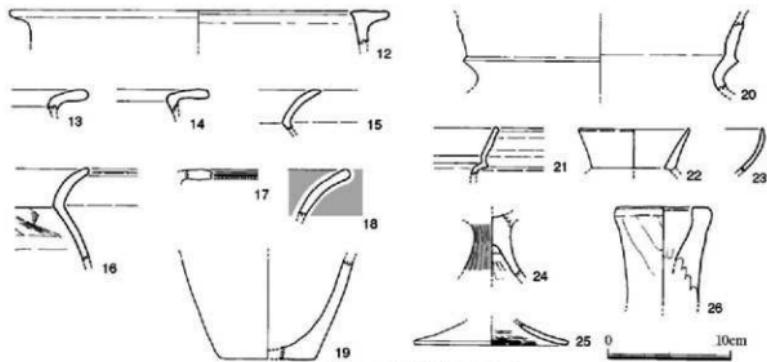


Fig. 9 SC-003出土遺物 (1/4)

SC-003出土遺物 Fig. 9・41、PL. 6

コンテナ1/2箱程度で、弥生土器が大半を占める。古式土師器が少量ながらまとまって出土しており、住居に切り込む土坑・ピット等の検出漏れがあった可能性が強い。弥生土器には壺・壺・高杯・器台・鉢・古式土師器には壺・二重口縁壺がある。他に磨製石剣(295)、黒曜石碎片が出土した。

12~16は弥生土器の壺である。12は口縁が「逆L」字形に屈曲する。13・14は口縁が「く」字形に屈曲するが、内面の稜は曖昧である。小片のため図の傾きは不正確である。15・16も口縁が「く」字形に屈曲するが、内面の稜は明瞭で、口縁が長く外反する。17は壺もしくは壺の口唇部片で、端部に沈線と刻目を入れ、丹塗りする。18は広口壺の口縁部片で、内外面に丹塗りする。19は小壺または鉢の底部か。20・21は古式土師器の二重口縁壺である。22は古式土師器の小型丸底、23は鉢である。24は弥生土器高杯の脚で、外面に丹塗り磨研を施し、内面は螺旋状にヘラ整形する。25は古式土師器高杯の脚で、破面に透孔の痕跡が認められる。26は支脚で、二次加熱を受けている。

古式土師器はいずれも小片であり、12~14・17・18・24等が遺構の時期を示すと考えられ、弥生時代中末期頃の円形住居であろう。

SC-004 Fig. 10, PL. 3・4

調査区北東側に位置する。複数の遺構が切り合い、覆土が酷似するため遺構検出が極めて困難であった。住居の東側は地山ロームが露出しており、中央部の攪乱坑から調査区北端まで伸びる東辺は確実である。東辺は中程で屈曲し東へやや開くため、当初は2軒の住居の切り合いと判断し、北半をSC-004、南半をSC-005としたが、度数にわたる精査でも切り合いを確認することはできなかった。西辺については、切り合う遺構の覆土を徐々に掘り下げたところ、壁の立ち上がりと壁溝と見られる遺構SC-022を確認し、更にSC-022の南側に貼床と考えられる粘土層の広がり(SC-023)を確認した。なお、北辺は調査区外へ伸び、南辺は攪乱坑に破壊され不明である。床面には複数のピットがあるが、SP-263を挟んで南北に対峙するSP-272とSP-285が他より深く、前者を地床炉、後者を主柱穴とすれば、2本柱の方形住居を想定できる。とすれば、調査時より2軒の切り合いと考えてきたが、北へ聞く不整な長方形プランの1軒の住居となろう。規模は東西幅4.3~4.7m、南北長6.1m以上を測る。實際には部分的に壁溝がある。SP-256は東辺中央の壁際土坑とみられ、土器がまとまって出土した。床面には粘質土の貼床が部分的に施され、下層住居SC-020と重なる部分では特に厚い。

SC-004出土遺物 Fig. 11

弥生土器壺・壺・高杯・鉢・器台・黒曜石製石器・碎片・磨製石器・砥石・台石・ガラス小玉・古式土師器壺など、コンテナ2箱が出土した。

27~31は弥生土器壺である。27は口縁が「く」字形に屈曲し端部が上に肥厚する。頭部外面に低い三角突帯を貼付する。口縁外面は継の、内面は横の刷毛目後、横ナナメ調整。胴部は内外とも斜めの刷毛目調整。淡灰褐色を呈し、粗砂混じりの細砂粒を多量に含み、焼成不良で胴部外面に黒斑がある。28は口縁が「逆L」字形に屈曲する。29~31は口縁が「く」字形に屈曲する。32・34は複合口縁壺。33は袋状口縁壺にしては胎土が粗く、鉢かもしれない。35は壺の肩部で、外面は斜刷毛目後、三角突帯を貼付して横ナナメ、内面は指押さえ後ナナメ調整し、上端は横刷毛目。36は壺だが小片のため傾きは不正確。37~40は壺ないし壺の底部で、37・38は平底、他は丸底気味で安定が悪い。41~43は高杯で摩滅する。44は小壺で、口縁が断面三角形に肥厚する。45・46は鉢、47~50は器台である。

古式土師器は量的には少ないが、古墳時代前期の住居と考えられる。

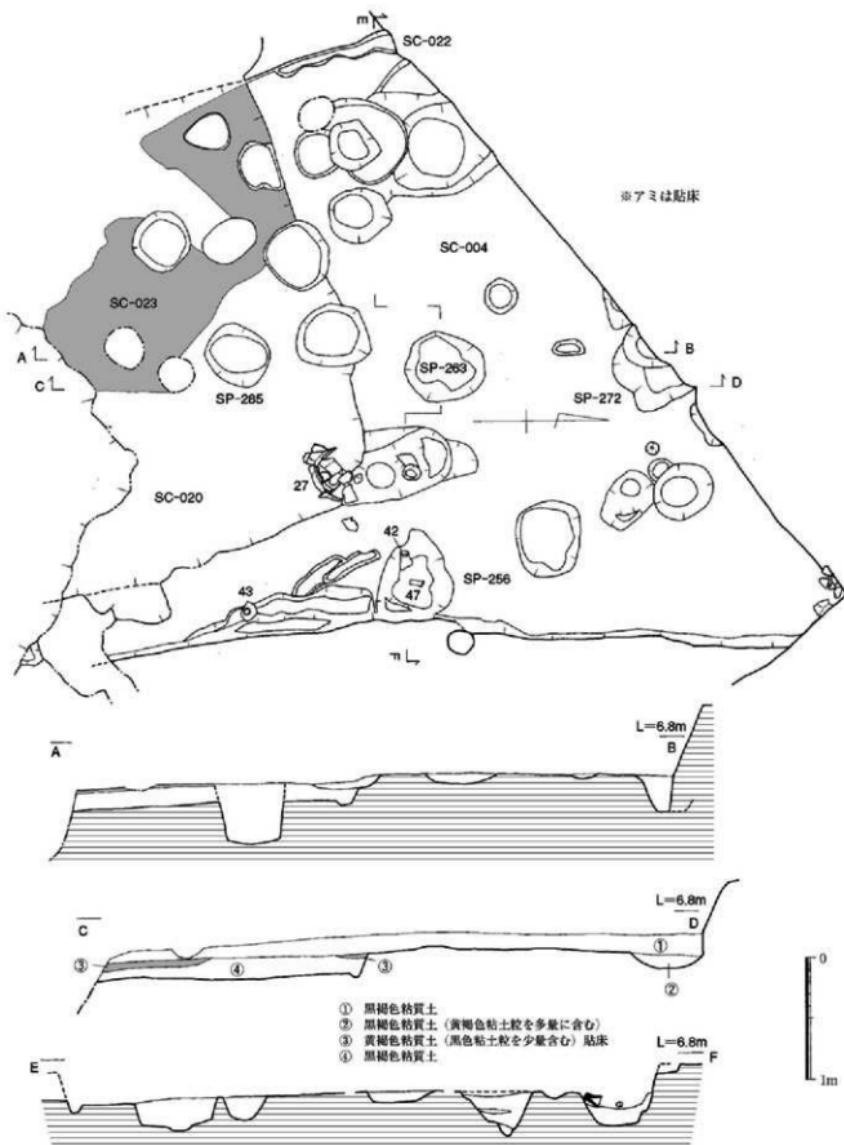


Fig. 10 SC-004 (1/40)

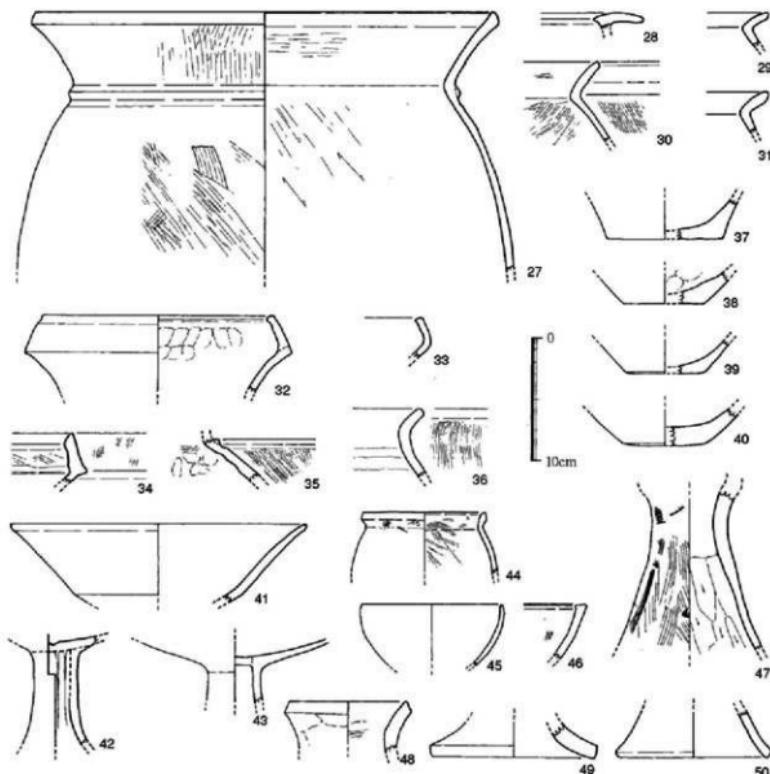


Fig. 11 SC-004出土遺物 (1/4)

SC-006 Fig. 12, PL. 3・4

調査区南東隅に検出し、唯一全形を知ることができる。上層に住居とみられる遺構覆土が薄く被るが、この住居に関しては状況が全く把握できなかった。SC-006の北東・南東隅は調査区外に伸び、北西隅は擾乱坑に破壊・削平され残りが悪い。南側はSC-007に切られる。東西に長い長方形プランを呈し、北東隅にベッド状遺構をもつ2本柱の竪穴住居である。東西5.6m、南北3.6m、検出面から床面までの深さは20cmが残る。床面は黒色粘質土混じりの地山ロームで厚さ5cmほどの貼床を施し、ベッド状遺構を造る。ベッドの規模は1.0×1.4mで、床面との比高5cm。西辺を除く壁際に幅15cm前後、深さ5cm前後の横溝が巡る。床面中央の窪みSP-203は地床がとと考えられ、平面形は不整で100×70cm、深さ15cm。焼土・炭化物は認められない。主柱穴はSP-201・202で、心々距離で2.3mを置く。いずれも楕円形プランを呈し、SP-201は径64～87cm、深さ50cm、SP-202は径40～60cm、深さ45cmで、ともに柱痕跡は確認できない。主柱穴の間には幅50cm前後、深さ5～10cmの浅い溝が掘られており、西へ若干傾斜する。他例より推して、この溝を埋めた後に炉と主柱穴が切られたと

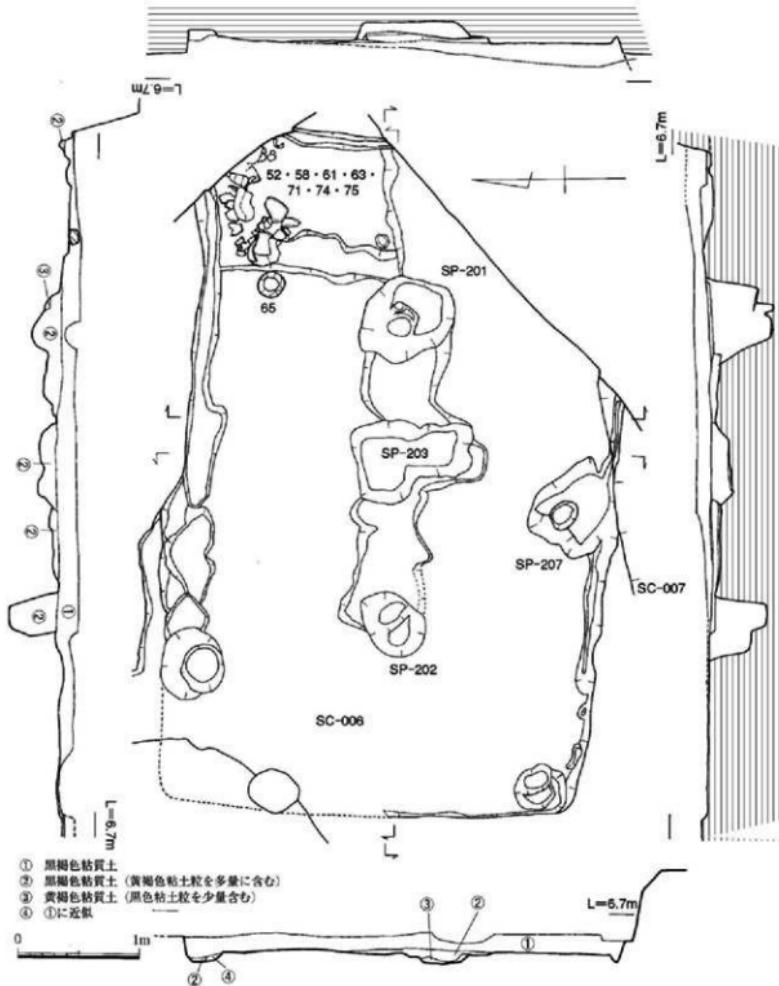


Fig. 12 SC-006 (1/40)

考えられるが、本例は切り合ひが明瞭でなかった。住居南辺には中心からやや西に偏して壁際土坑 SP-207を設ける。覆土は黒褐色粘質土である。ベッド状造構の直上で土器がまとまって出土した。

SC-006出土遺物 Fig. 13・14, PL. 6

遺物の一部はSC-011・012の番号で取り上げた。弥生土器・古式土師器の壺・壺・高杯・鉢・器台・支脚、手捏土器、土製投弾、黒曜石剝片・碎片、砥石が出土した。

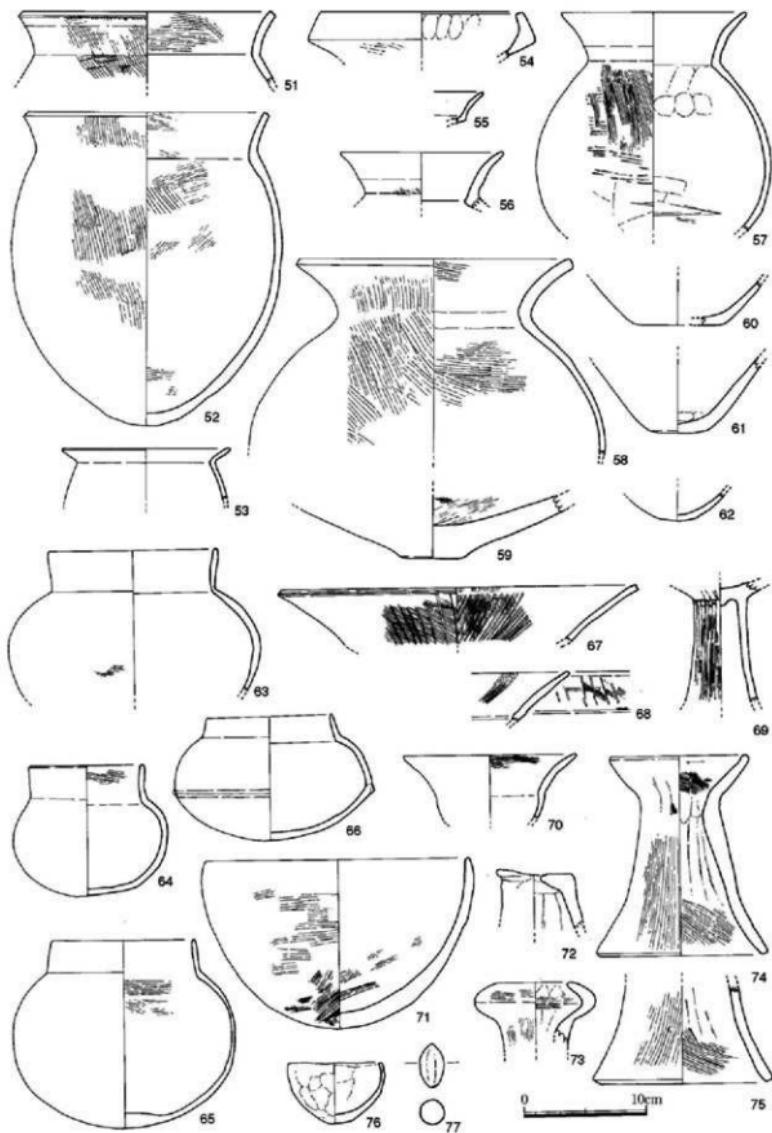


Fig. 13 SC-006出土遺物 I (1/4)

51・52は壺で、口縁が「く」字形に屈曲して外反し、丸底である。外面が縦～斜刷毛目、内面が横～斜刷毛目で、口縁端部は軽く横ナデする。51は外面灰褐色～黒褐色、内面橙褐色、胎土に砂粒を多く含み、焼成良好。52は黄白色を呈し、砂粒を多量に含み、焼成不良。

53は古式土師器壺で、摩滅するが胴部内面ヘラ削り。淡橙褐色を呈し、粗砂を少量含み、焼成良好。54は複合口縁壺。55は小片だが二重口縁壺か。胎土は精良。56～58は単口縁の壺で、頸部がつまり、口縁は外反して長く伸びる。56は口縁中位で肥厚し、胴部外面斜刷毛目、口縁内外横ナデ調整。鈍い橙色で、砂粒を多量に含み、焼成不良。57は胴部外面を平行タタキ後、縦の細い刷毛目、内面は指押さえをナデ消し、底部は刷毛目調整。口縁内外横ナデ。暗橙褐色～灰褐色を呈し、胎土は精良で細砂・雲母粒を少量含み、焼成不良。58は内外とも刷毛目調整のみ。淡橙褐色を呈し、粗砂混じりの細砂粒を多量に含み、焼成良好。59～62は壺・壺の底部で、安定の悪い平底ないし丸底である。63～66は中型の短頸壺で、63以外は口縁が内傾する。63は摩滅するが胴部下半に横刷毛目の痕跡が残る。胴部内面は削りの後ナデ調整。淡橙色を呈し、細砂を含み焼成良好。64も摩滅が著しく、口縁内面に横刷毛目を留めるのみ。淡黄褐色で、胎土精良、焼成不良。65は外面摩滅、内面は横刷毛目後ナデか。内底に平底の名残を留める。淡黄褐色で、胎土精良、焼成良好で口縁と胴下半に黒斑がある。66は胴部が偏球形で、胴中位に粘土帯の接合痕が明瞭に残り、この直下に小さな三角突帯を貼付する。内外とも摩滅が著しく調整痕は残らない。淡橙褐色で、胎土精良、焼成不良。67・68は高杯の口縁部で、内外面に刷毛目後暗文を施す。69は高杯脚で、坏底に突起を造り接合する。外面に横刷毛目後暗文を入れ、内面はナデ調整。70は鉢で、頸部で屈曲し、口縁が外反して長く伸びる。口縁内面に横刷毛目が残るが、他は摩滅している。71も鉢で、大振りで肉厚である。72・73は支脚、74・75は器台、76は手捏土器、77は土製投弾である。78は短頸壺か。口縁外面に線刻を施しており、絵画土器であろうか。くすんだクリーム色を呈し、胎土は精良、焼成不良。

以上の遺物は弥生時代後期～古墳時代初頭に位置づけられよう。

SC-007 Fig. 15

SC-006の南に接し、これを切っている。方形の平面プランをとるため住居の北西コーナー部としたが、大半は調査区南外にあり、竪穴住居とするに確証を欠く。現況で、東西2.9m、南北1.6mを測り、深さ5cm強と、削平により極めて残りが悪い。床面で3つのピットを検出した。

土器小片50、黒曜石碎片5が出土したが、図化できるものはない。タタキ目のある土器片が含まれており、弥生時代末～古墳時代前期の遺構とみられる。

SC-008 Fig. 16, PL. 4

SC-006の床面下、およびその周囲で検出した壁の立ち

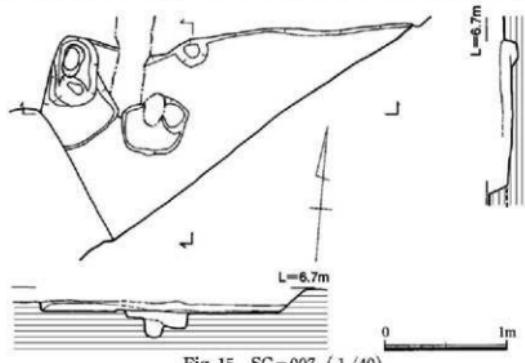


Fig. 15 SC-007 (1/40)

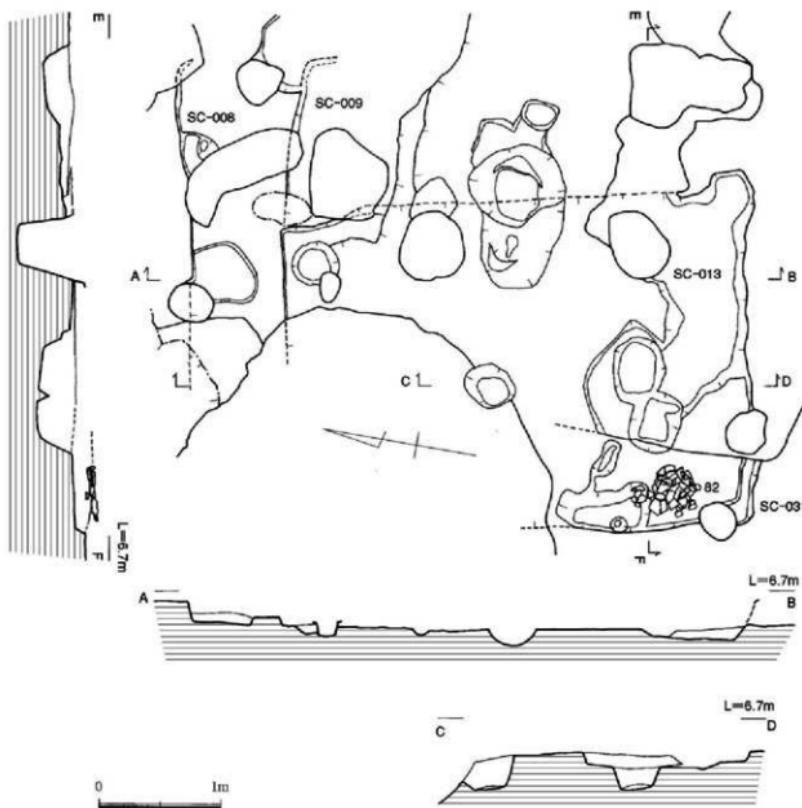


Fig. 16 SC-008出土遺物 (1/40)

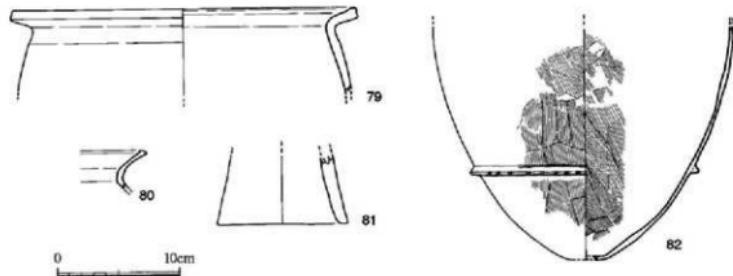


Fig. 17 SC-008出土遺物 (1/4)

上がりとみられる遺構から図のような住居を復元した。調査時にはそれぞれ別の遺構として番号を振り、SC-008・009・013・031として遺物を取り上げた。008は最も北側に検出した壁の立ち上がりとみられる遺構で、東西1.6mの長さに10cmほどの高さで伸びる。東端は擾乱坑に、西端はピットと他の住居に切られる。009はその南側に0.75~1.0mの間を置いて、東西に1.9mの長さに伸びる5cm前後の高さの立ち上がりで、西半は浅い段をなし低い。東端はピットに、西端は擾乱に切られる。013はSC-006の床面で検出した不整形の窪みで、南辺は直線的に2mほど伸びる。深さは10cmに満たない。031はSC-006の西外に検出した住居の南西コーナー部とみられる遺構で、東西0.6m、南北1.6m、深さ10cm。壁際の一部に浅い壁溝が巡り、まとまって出土した土器は床面から10cm以上浮いている。以上の遺構から、008を北辺、013及び031の一部を南辺、031を西辺とする方形プランの堅穴住居が復元でき、009は北側及び東側に取り付くベッド状遺構と考えることが可能である。規模は東西3.5m、南北4.5mで、南北に長い。ただし、想定される床面上に主柱穴や炉跡は認められない。

SC-008出土遺物 Fig. 17

上記のように遺物はSC-008・009・013・031から、弥生土器壺・壺・高杯・鉢・器台、古式土師器壺などコンテナ1箱が出土したが細片が多く、図化しうるものは少ない。

79は弥生土器壺で、口縁は「く」字形に屈曲して端部がやや肥厚する。頸部内面の稜はあまい。80は古式土師器壺の口縁部小片で、端部が内側に肥厚する。口縁横ナデ、頸部内面ナデ、胴部内面ヘラ削り。81は器台で、二次加熱を受ける。82は大形壺で胴下半のみ残る。平底の痕跡を留める。胴部内外とも縦～斜削毛目で、内底に指頭痕が残り、外底は摩滅する。胴部下位に断面三角形突帯を巡らせ、板小口を押圧して刻目を施す。SC-031より一括出土した。

SC-006よりも古く、一括出土の82より弥生時代後期末頃の時期が考えられよう。

SC-010 Fig. 18, PL. 3

調査区中央の北側に検出し、壁溝が認められたため堅穴住居とした。SC-020と切り合うが、重複する部分が更にSC-004に切られており、先後は明らかでない。南側はSC-021を切り、ピット多数とも切り合うため平面形が定かでないが、図のような楕円形プランと考えられ、長径3.9m、短径3.0m。検出面から床面まで約30cmが残り、東端は西側より一段高い。南西壁際に幅20cmほどの溝が一部巡るほか、床面に数個のピットが認められるがいずれも浅い。

SC-010出土遺物 Fig. 19

弥生土器壺・壺・高杯・鉢・器台・壺棺、古式土師器小型丸底、石庖丁、黒曜石剝片・碎片など、コンテナ1箱が出土した。

83・84は弥生土器壺で、口縁が「逆L」字形をなす。85~88も壺で、口縁が「く」字形に屈曲して外反する。以上6点は小片のため、図の傾きは不確実である。89も壺で口縁は「く」字形に屈曲し、内面に稜を持つ。胴部外面綾刷毛目、内面ナデ、口縁は内面横刷毛目後、内外を横ナデ。淡黄褐色で、繊砂粒と雲母粒を少量含み、焼成良好。90は中型壺棺の口縁部か。91は袋状口縁壺で、摩滅するが外面丹塗り。92は無頭壺、93は小鉢で、ともに摩滅が著しい。94は壺の一部か。外面に3条の波状文を施すが、小片のため天地・傾きは不確実である。灰～灰黒色で、胎土は精良で雲母粒を僅かに含み、焼成良好。95・96は壺の底部で、外底が窪み低い脚となる。97は壺の底部。98は古式土師器小型丸底で、他に底部片がある。摩滅が著しいが頭部外面に綾刷毛目を留める。99は支脚で二次加熱を受ける。

88・98等の弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器が少量出土するが、これらはSC-004・020等からの混入品と考えられ、弥生時代後期初頭頃の遺構とみられる。

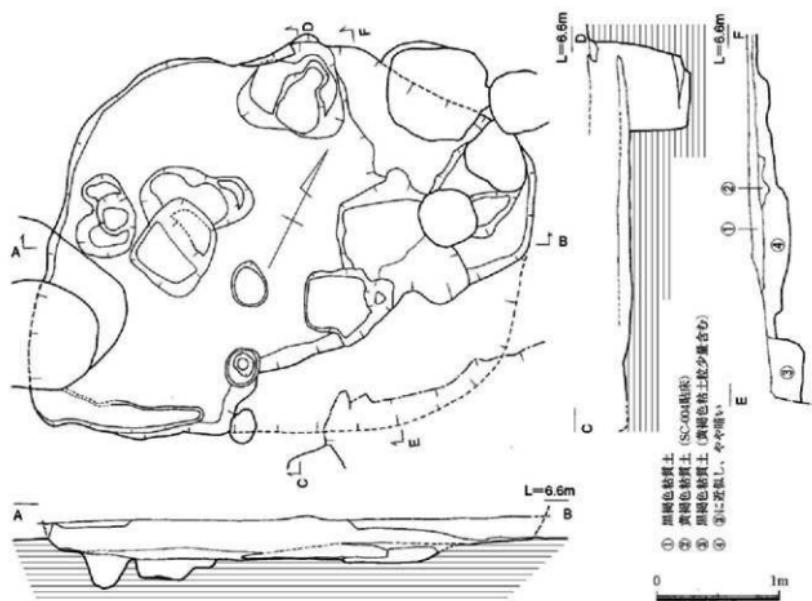


Fig. 18 SC-010 (1/40)

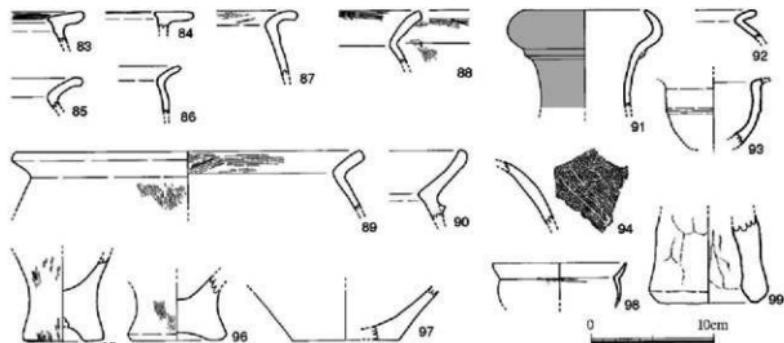


Fig. 19 SC-010出土遺物 (1/4)

SC-020 Fig. 20, PL. 3

SC-004の床面下に検出した方形プランの堅穴住居である。西半はSC-010と重複するが数度の精査でも切り合い関係を掴めず、平面形は不明である。南辺は擾乱坑により失う。また、SC-004の東外に検出した住居の一部は別の住居SC-017としたが、SC-020に伴うベッド状構造と考えられ、検出面からベッド面まで深さ20cmで、床面との比高は同じく20cm。床面北東辺のベッド境いに幅15～20cm、深さ3cmほどの溝を巡らせる。床面には複数のピットが認められるが、SP-275・276が他よ

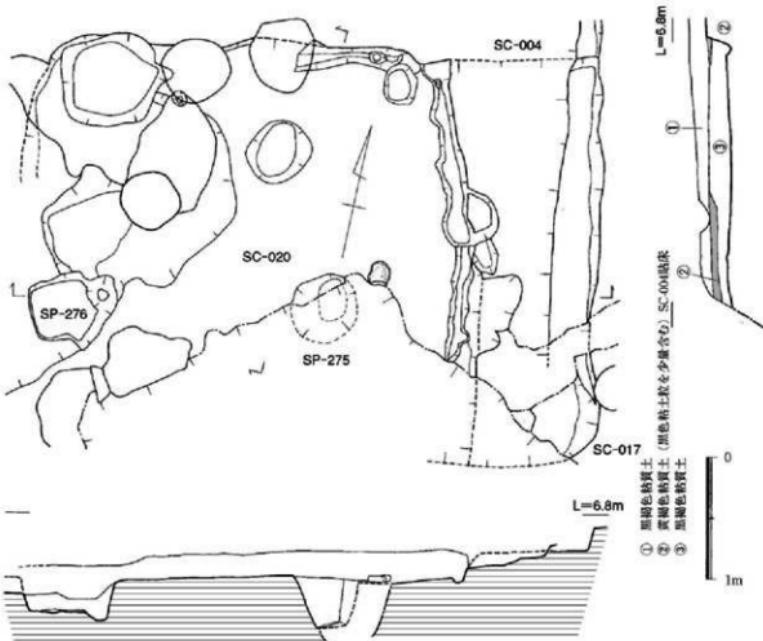


Fig. 20 SC-020 (1/40)

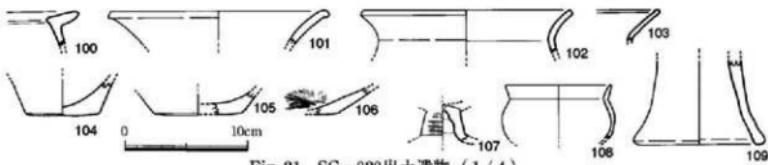


Fig. 21 SC-020出土遺物 (1/4)

り深く、2本柱となる可能性がある。炉の有無は不明である。覆土は黒褐色粘質土で、黒色粘土粒を含む地山ロームの掘削土で上面を覆い、SC-004の床面としている。

SC-020出土遺物 Fig. 21

弥生土器壺・壺・高杯・器台、古式土師器壺・高杯・小型丸底、砥石、磨石、黒曜石剥片・碎片がコンテナ1箱程度出土した。

100は弥生土器壺で、口縁が「逆L」字形に屈曲する。101も壺の口縁部小片で、これのみSC-017出土。102は「く」字形に緩く屈曲して開く壺で、摩滅して調整不明。細砂粒を多量に含み、焼成不良。103は古式土師器で布留系壺。104~106は壺・壺の底部で、丸味のある不安定な平底である。107は古式土師器の高杯脚で、外面は横ミガキを施す。108は古式土師器の小型丸底、109は器台である。

SC-004より古い住居と考えられる。古式土師器をSC-004からの混入遺物とみれば、弥生時代後期後半頃に位置づけられようか。

SC-027 Fig. 22, PL. 2

調査区中央のやや南西よりに位置する。方形プランの竪穴住居であるが、遺構の切り合いが激しく、全容は把握できない。東辺は直線的に3.9m伸び、南東コーナー部はほぼ直角に曲がるが、北東コーナー部は曖昧である。住居の西半は土坑やピット、擾乱坑に切られてプランが明瞭でない。床面は東端が10cmほど一段高くなっており、明確な形をなさないがベッド状遺構であろうか。床面のピットSP-403は70cm弱の深さがあるが、これに対応する柱穴ではなく、主柱穴は明確にできない。炉跡や壁溝も確認できない。

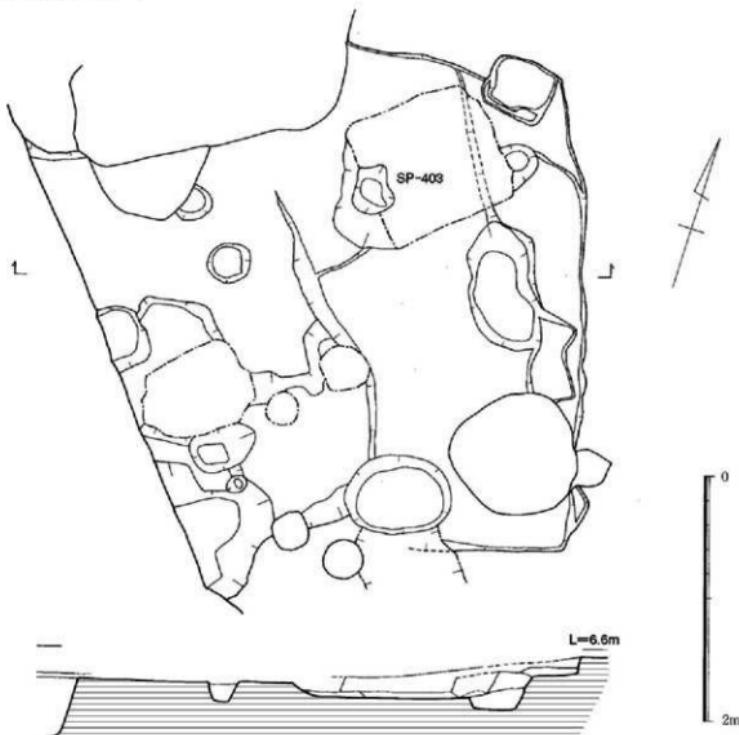


Fig. 22 SC-027 (1/40)

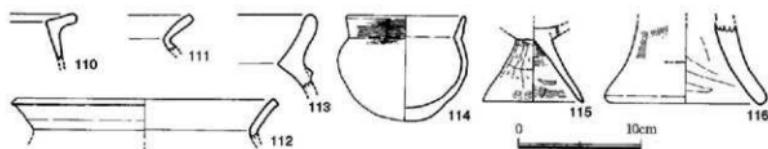


Fig. 23 SC-027出土遺物 (1/4)

SC-027出土遺物 Fig. 23, PL. 6

弥生土器・古式土師器の壺・壺棺・壺・高杯・蓋・器台の他、黒曜石碎片がコンテナ1箱出土した。110は弥生時代中期の壺で、「逆L」字形をなす。111・112は「く」字形に口縁が屈曲する壺で、112は古式土師器であろう。横ナデ調整。113は壺棺の口縁部小片である。114は丸底の小壺で、胴部外面ナデ、内面は器面が剥落する。115は古式土師器の小型器台の脚部で、受け部の底に差し込み接合する。外面はヘラ整形で下端のみ縱刷毛目、内面は横刷毛目調整である。器面の残りが良く、暗橙色で、胎土は精良で雲母粒を含み、焼成不良。116は器台で、外面縱刷毛目、内面ナデ調整。

古墳時代前期の遺構であろう。

SC-028 Fig. 24, PL. 3

調査区中央に位置し、北辺をSC-010に切られ、東辺は攪乱坑に破壊される。平面プランは隅丸長方形で、長径3m以上、短径2.3mを測る。深さ約20cmで、床面は平坦でなく中央が浅く窪む。長軸上に二つのピットが並ぶが、主柱穴とみるとには浅い。住居に含めたが、あるいは大形の土坑とすべきか。

SC-028出土遺物 Fig. 25

弥生土器壺・壺・高杯・器台、黒曜石碎片がコンテナ1箱出土した。

117～119は壺で、口縁が「逆L」字形をなす。117は摩滅するが口唇部にかすかに刻目が認められる。外面縱刷毛目で、口縁横ナデ調整。120・121は「く」字形に屈曲して口縁が開く壺で、内面の稜はあるが、小片のため図の傾きは不確実である。122は無頭壺である。123・125は壺の底部で外面縱刷毛目、内面は指頭痕をナデ調整する。124は壺の底部で、外側は丹塗りする。

他に図化可能な土器が11点あるが、全て弥生時代中期以前の土器であり、当遺構の時期も中期末に置くことができる。

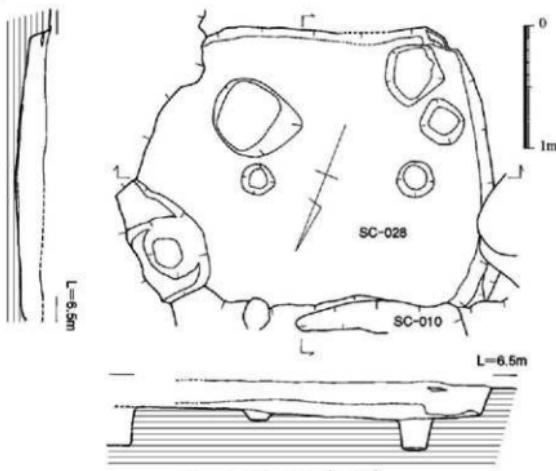


Fig. 24 SC-028 (1/40)

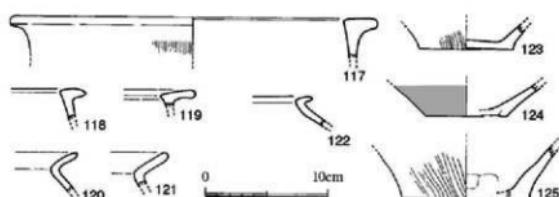


Fig. 25 SC-028出土遺物 (1/4)

SC-030 Fig. 26, PL. 2

調査区南壁際に検出した円形プランの竪穴住居である。上層に遺構覆土が被さっており、古式土師器がまとまって出土したことから古墳時代前期の遺構が存在したと考えられるが、プラン等は把握できず遺物のみSX-026として末尾に掲載した。SC-030は復元すれば径4.8mの円形住居となろう。壁の立ち上がりは20cmを残し、床面の北辺には不整な壁溝が一部認められる。SP-399は深めで、支柱穴の一部とみられる。床面は地山ロームと黒色粘質土を混ぜた土で厚さ7cm前後の貼床を施す。

SC-030出土遺物 Fig. 27

弥生土器壺・壺・高杯・鉢・器台、古式土師器壺・二重口縁壺、土製紡錘車・鋸型?、石鎌、黒曜石碎片がコンテナ1箱出土した。

126~130は壺で、口縁が「逆L」字形をなす。126は弥生時代前期の壺か。131・132は壺の底部で平底。133は複合口縁壺、134は高杯脚もしくは蓋か。135は無頸壺。136は古式土師器の有留系壺。137は手捏の鉢。138は土製紡錘車で、土器片の縁辺を削った再利用品であろう。139は截頭円錐形の土製品の一部で、上方から2孔を穿つが底に突き抜けない。孔内と上面が被熱しており、蛍光X線分析により白色の付着物から鉛・銅等が検出された。126・127・129・132・139は下層、他は上層出土。

下層出土土器のみから見れば、弥生時代中期中頃の遺構と考えられよう。

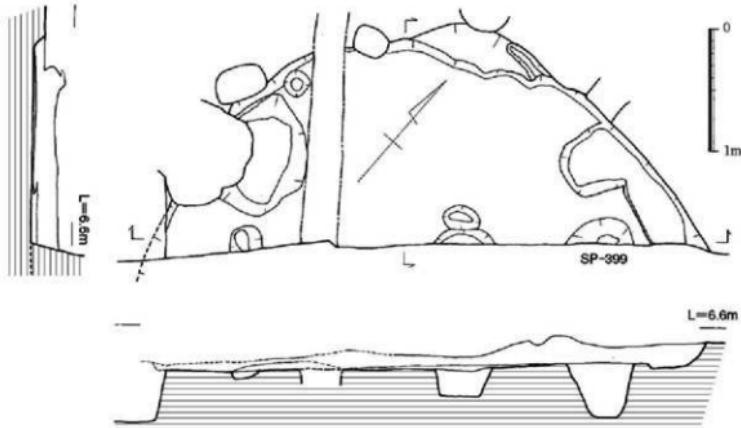


Fig. 26 SC-030 (1/40)

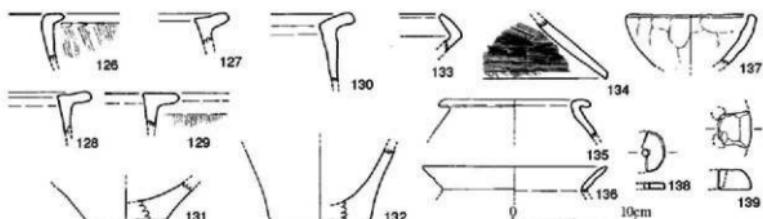


Fig. 27 SC-030出土遺物 (1/4)

(2) 井戸

SE-014 Fig. 28, PL. 5

調査区北東隅に位置する素掘り井戸である。SC-003を切っているが検出時に確認できず、SC-003の床面で検出した。平面プランはやや不整な円形を呈し、長径1.25m、短径0.9mを測る。深さ1.8mで、底面は径0.43～0.5mの稍円形をなす。覆土は黒褐色粘質土で、遺構が狭く深いため土層断面図は取れなかった。壁面にえぐれはなく、現在の湧水もない。

SE-014出土遺物 Fig. 29, PL. 6

弥生土器壺・壺・高杯・鉢・器台、滑石製紡錘車、黒曜石碎片、土製品が少量出土した。図示した遺物は弥生土器と土製品である。

140は口縁が「逆L」字形をなす壺、141～143は口縁が「く」字形に屈曲して聞く壺で、いずれも横ナデ調整を施す。144は小型の壺または鉢で、口縁は「く」字形に屈曲して短く聞く。外面綱刷毛目、内面ナデ、口縁横ナデ調整。145は壺または高杯の口縁部小片で、鋸先形をなす。

146は壺の脇部で、刻目突帯を巡らす。内外面とも刷毛目調整で、突帯は断面台形、刻目は板小口による。

147は壺の底部で平底、148は壺の底部で若干外底が膨らむ。149は高杯の口縁部で、屈曲部から口縁が短く外反する。内外面を横ナデ後、綱に暗文を入れるが内面はやや不明瞭である。150は小型の無頸壺で、外面を丹塗りし、内面は指頭痕が残る。

151は鉢で、内外面とも剥落して砂粒がむき出しであるが刷毛目調整か。152・153は支脚である。154は土製品で、一側面に刻みを2本入れ、獸脚状につくるが、アミで示した部分は剥落しており、性格不明である。

赤褐色を呈し、砂粒を含む胎土は他の弥生土器と大差ない。焼成良好。他に土塊を焼いたものがあるが図化しない。

弥生時代後期後半頃の井戸と考えられる。

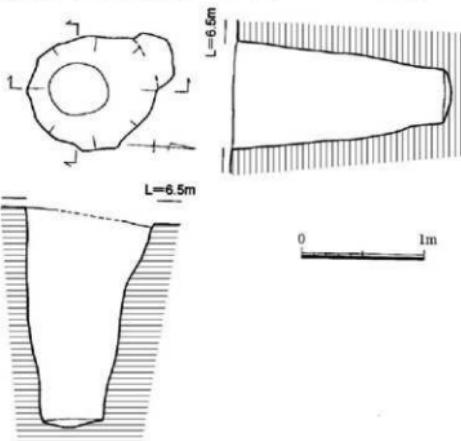


Fig. 28 SE-014 (1/40)

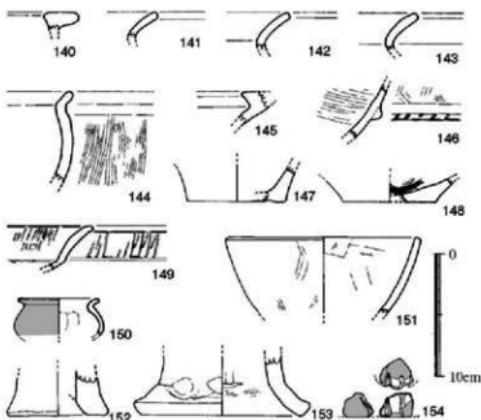


Fig. 29 SE-014出土遺物 (1/4)

SE-040 Fig. 30

調査区南西部に位置する。SC-027の掘削後にその床面上で検出した。平面プランは円形で、径1.0～1.07mを測る。円筒状に掘り下がっており、検出面から底面まで1.95mである。底面は径0.7～0.77mの円形の平坦面をなす。壁面に抉れはない。現在の湧水はない。

SE-040出土遺物 Fig. 31

弥生土器甕・壺・高杯・鉢、黒曜石碎片がコンテナ1箱出土した。

155～158は口縁が「逆L」字形に屈曲する甕である。最も残りの良い155は外面綫刷毛目、内面ナデ、口縁内外横ナデ調整である。赤橙色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好。156は胎土にカクセン石、157・158は雲母粒を含む。159～161は口縁が「く」字形に屈曲する甕であるが、小片のため図の傾きは不確実である。横ナデ調整で、胎土に細砂粒を含む他、160・161は雲母粒を含む。162・163は甕の底部で、安定の良い平底。外面綫刷毛目、内面は指頭痕をナデしており、胎土に多量の細砂粒と雲母粒を含む。164は袋状口縁甕の口縁部小片で、外面丹塗り。丹は暗赤色を呈し、胎土精良、焼成良好。165は瓢形壺の小片である。外面は横刷毛目後、突帯を横ナデし、丹塗り、内面には指押さえ痕が残る。丹は暗赤色を呈し、胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。166は小片だが直口鉢か。外面刷毛目後、口縁横ナデ、内面ナデ。胎土は精良で雲母粒を含み、焼成良好。167は鉢である。外面は板ないしヘラで粗くナデ、内面は横刷毛目調整。灰褐色を呈し、胎土に粗砂を含むが精良で、焼成不良。

167の鉢の他、丸底に近い平底の底部や断面「く」字形口縁の甕等が上層から出土しており、SE-040を切る古墳時代前期の住居SC-027から遺物が混入した可能性が考えられる。下層出土遺物は164の袋状口縁甕など弥生時代中期末以前に限られており、中期末には廃絶した井戸であると考えられよう。

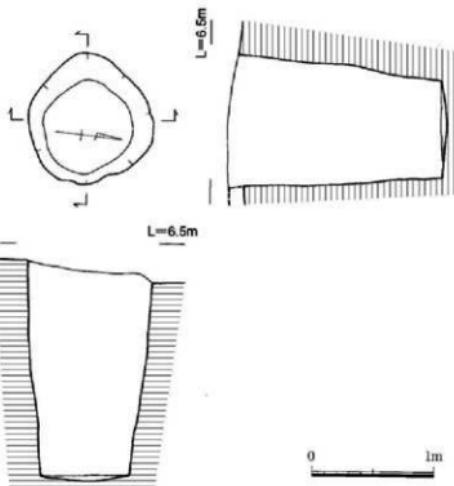


Fig. 30 SE-040 (1/40)

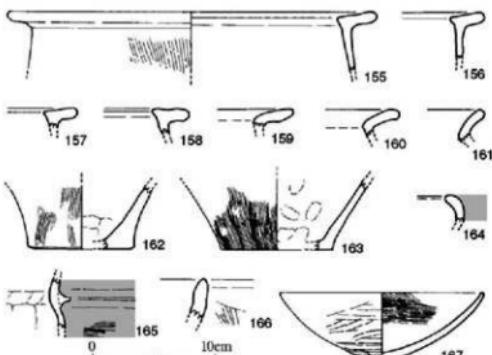


Fig. 31 SE-040出土遺物 (1/4)

SE-052 Fig. 32, PL. 5

調査区北西隅に検出した。平面プランは円形で、径0.7mを測る。円筒状に掘り下げており、検出面から底面まで1.1mとやや浅い。底面は平坦で、地山ロームの節理がありやや掘り過ぎた。覆土は黒色粘質土で、多量の土器が含まれていた。

北西に隣接して検出したSK-044・050にも大量の土器廃棄が行われていること、この土坑も0.85mと深いこと、時期的に近接すること等から、SE-052も井戸ではなく、廃棄土坑の可能性がある。

SE-052出土遺物 Fig. 33・34, PL. 6

弥生土器壺・壺・高杯・蓋・鉢・器台・支脚・壺棺、砾石、黒曜石碎片などがコンテナ7箱出土した。

168～173は口縁が「逆L」字形をなす壺である。168は口縁上面が内傾し、頸部に三角形突帯を貼付する。170～173は口縁内端が突出する。いずれも胴部外面継刷毛目、内面ナデ、口縁内外面横ナデ調整である。胎土は170を除き細砂粒を多量に含む他、いずれも雲母粒を含み、焼成は168・169が不良、他は良好。174～176は口縁が「く」字形に屈曲する壺で、頸部内面の稜は不明瞭である。174は胴部外面継刷毛目、内面ナデ、口縁内外面横ナデ調整。175は胴部外面継刷毛目、口縁横ナデ調整。176は口縁端部を上方にはね上げており、横ナデ調整。177・178は壺棺の口縁部小片である。177は「く」字形口縁で内湾し、頸部に突帯の痕跡が残る。胴外面継刷毛目、他は横ナデ。178は口縁がT字形をなし、頸部に断面台形突帯を貼付し、横ナデ。179～181は壺底部で、外面継刷毛目、内面ナデ。181は焼成後に内外から穿孔しており、孔の位置は中心を外れる。

182は小形の壺で、口縁は逆三角形に肥厚する。外面は横ナデし、縫に暗文を帶状に入れる。183～186は鋤先形口縁の広口壺である。183は口縁内側にひも状の粘土帯を貼付して飾り、外面に僅かに縫暗文の痕跡を留める。184も摩滅するが外面に等間隔に帶状の暗文を縫に配する。胎土にカクセン石を含む。185は口唇に刻目を入れ、頸部に三角突帯を回す。186は口縁上面に三角突帯を一条巡らせており、特異である。外面は丁寧にナデるが端部直下に指頭痕が残り、端部は横ナデ。砂粒は少なめだが精良ではなく雲母粒を含み、焼成良好。187は広口壺で丹塗り磨研。188は壺の胴部片で、外面に突帯を2条貼付し丹塗りする。189は瓢形壺の肩部で、高い突帯には横ナデ後、端部にヘラ先で刻目を入れ、外面丹塗り。胎土に細砂粒を少量含み、焼成不良。190・191は壺底部で、外面ヘラ研磨、内面ナデ。192はいわゆる双孔広口壺で、直立する口縁の相対する二箇所に穿孔がある。穿孔は内外より焼成前に行い、孔の上部には同心の弧状の線刻があり、穿孔時につけた傷か。外面継刷毛目、内面は指押さえをナデ消し、口縁内外横ナデ。外底は無調整で小さな凹凸がある。胎土に雲母粒が特に多い。

193は蓋である。外面に煤が付着しており煮炊きに供したか。194～198は鉢である。194は大形品で外面ヘラ研磨、内面ナデ。胎土にカクセン石を含む。195・196は調整痕が残らない。胎土に細砂粒と雲母粒を含み、焼成良好。197は胴部中位に三角突帯を巡らせる。内外面とも横に研磨し、丹塗り。外面の突帯以上には縫の暗文を施す。胎土は精良で雲母粒を含み、焼成不良。198はナデ後、口縁横ナデ調整。199～202は高杯の脚部である。199・200は外面丹塗り磨研。203～206は器台で、図の天地は不確実である。外面継刷毛目、内面は指またはヘラ整形。207～209は支脚で、二次加熱を受ける。

弥生時代中期末頃に一括廃棄したのであろう。

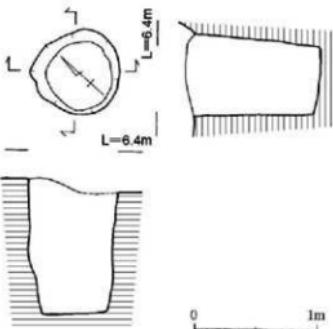


Fig. 32 SE-052 (1/40)

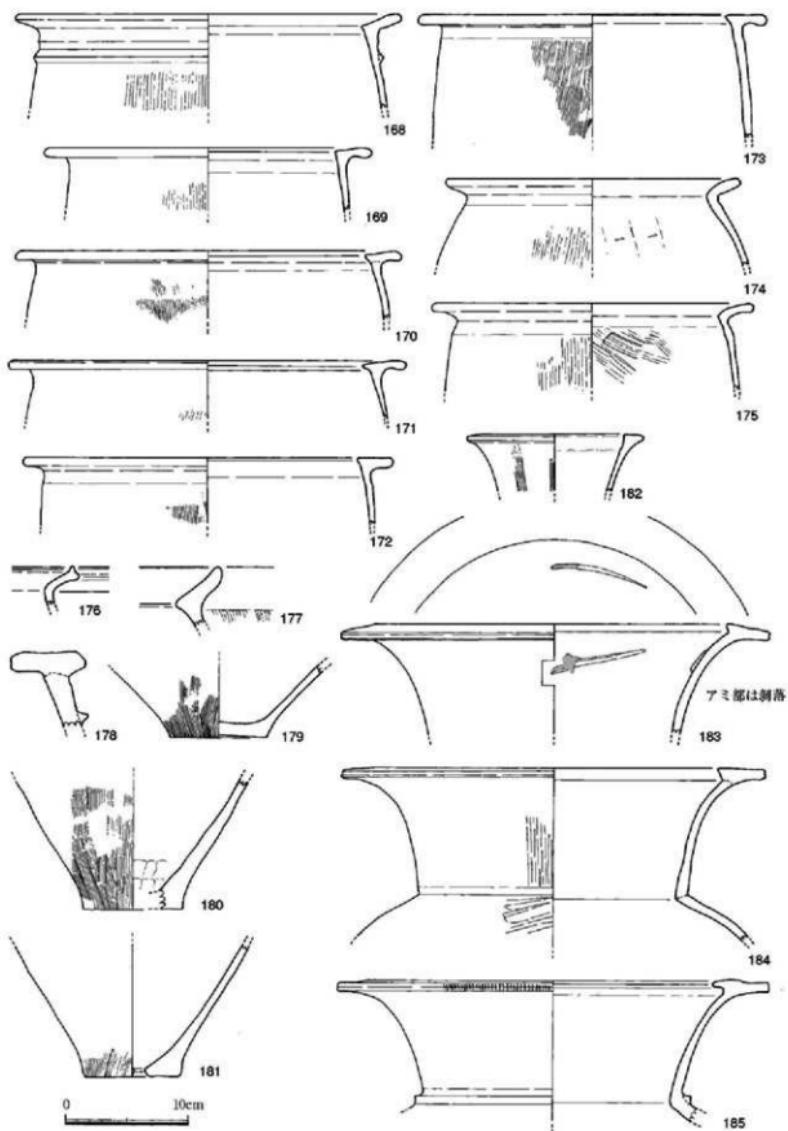


Fig. 33 SE-052出土遺物 I (1/4)

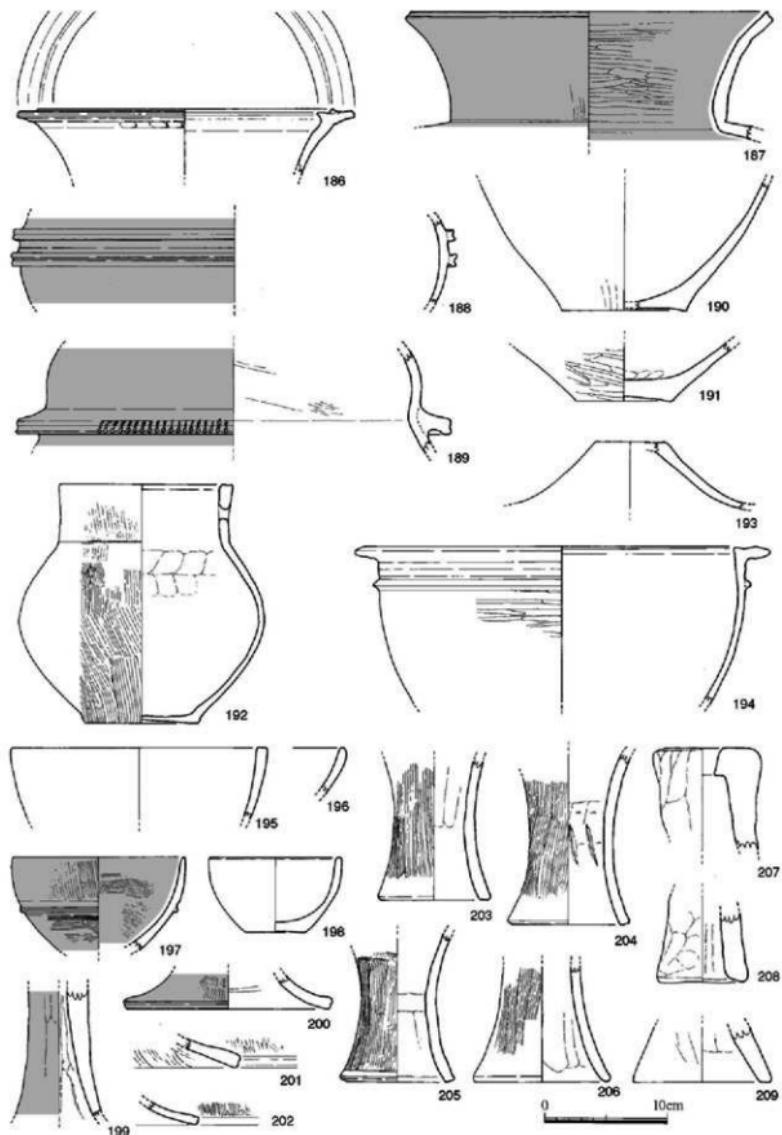


Fig. 34 SE-052出土遺物 II (1/4)

(3) 土坑

土坑は16基を検出した。うち8基を報告する。

SK-018 Fig. 35

SC-004の床面で検出した不整形の浅い土坑である。南北にやや長く、長径2.0m、短径1.7m。検出面から底面まで深さ15cmである。

SK-018出土遺物 Fig. 36, PL. 6

図示した弥生土器壺・高杯、土製品の他、甕小片など土器片30点が出土した。

210は壺の胴部小片で、刻目突帯を一条巡らせる。211は高杯口縁部で、長く伸びる。摩滅しており内面に僅かに擬のヘラミガキを留めるのみ。212は錐形土製品で、下端部は剥落する。無鉢截頭円錐型で、舞は隅丸長方形をなし、上下から2孔を穿孔する。摩滅により砂粒がむき出しになっており、調整痕は残らない。乳白色を呈し、胎土は精良でなく粗砂が多く、焼成良好。

遺構の切り合いから、SC-004（古墳時代前期）より古く位置づけられる。

SK-042 Fig. 35, PL. 4

調査区中央のやや西寄りに位置する。西側は擾乱坑に切られる。隅丸平行四辺形の平面プランで、長径2.7m、短径1.7m。検出面から底面までの深さ50cmで、断面逆台形をなす。

SK-042出土遺物 Fig. 36

弥生土器壺・壺・高杯・器台、砥石、黒曜石碎片がコンテナ1箱出土した。

213・214は壺の口縁部で「逆L」字形をなす。215は壺の底部で平底。216は広口壺の口縁部で鋤先形をなす。217は底部片で、安定の悪い平底である。内外面とも刷毛目調整。

遺物は上・下層に分けて取り上げたが、下層は弥生時代中期の土器で占められ、上層からは217などの後期に下る土器が出土している。

SK-043 Fig. 35, PL. 4

調査区の北西隅に位置し、SK-044を切る。南北に長い楕円形プランをなし、複数の柱穴が切り合った遺構であろう。長径1.0m、短径0.8m。中央が段状に深く、検出面から最深部まで50cm。

SK-043出土遺物 Fig. 36

弥生土器壺・壺・高杯・器台、板状石片（石庖丁？）が出土した。

218は弥生土器壺で、口縁は「逆L」字形。219は古式土師器布留系の壺、220は同じく在来系の壺。221も壺で、胴部外面に右上がりの平行タタキを施し、内面はヘラ削り後、ナデ調整。222は器種不明の胴部片で、外面平行タタキ、内面刷毛目調整。223は支脚である。224は鋤先形口縁の広口壺で、外面ナデ後に等間隔に帯状の綴刷毛目を施し、内面ナデ、口縁横ナデ。225は壺の底部で、外面は丹塗り磨研する。SK-044上層出土土器と接合し、本来044に含まれる遺物であろう。

遺物は上・下層に分けて取り上げたが、古式土師器は全て上層出土で、下層出土土器は弥生時代中期後半に限られる。二つの遺構が重複していた可能性が強い。

SK-044・050 Fig. 35, PL. 4

SK-043の東に接し、これに切られる土坑SK-044があり、この南東側に擾乱溝に隔てられて土坑SK-050がある。調査時には別の遺構として遺物を取り上げたが、ともに多量の弥生土器が廃棄され、

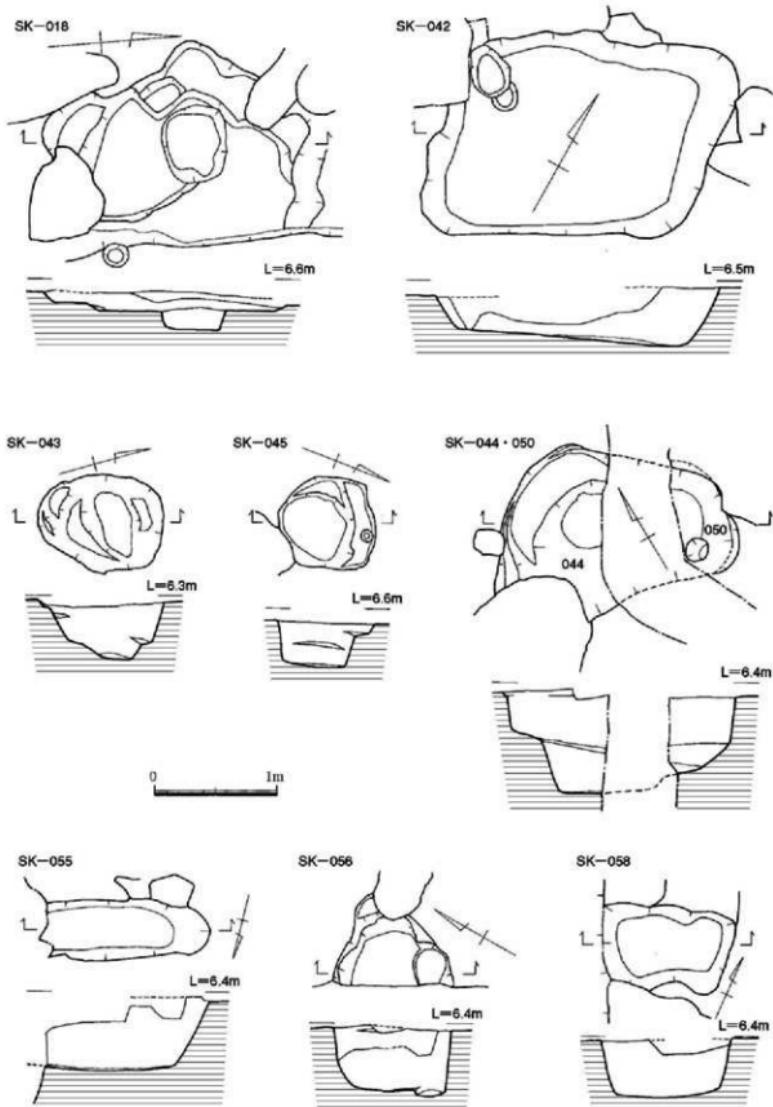


Fig. 35 SK-018 · 042 · 043 · 044 · 045 · 050 · 055 · 056 · 058 (1/40)

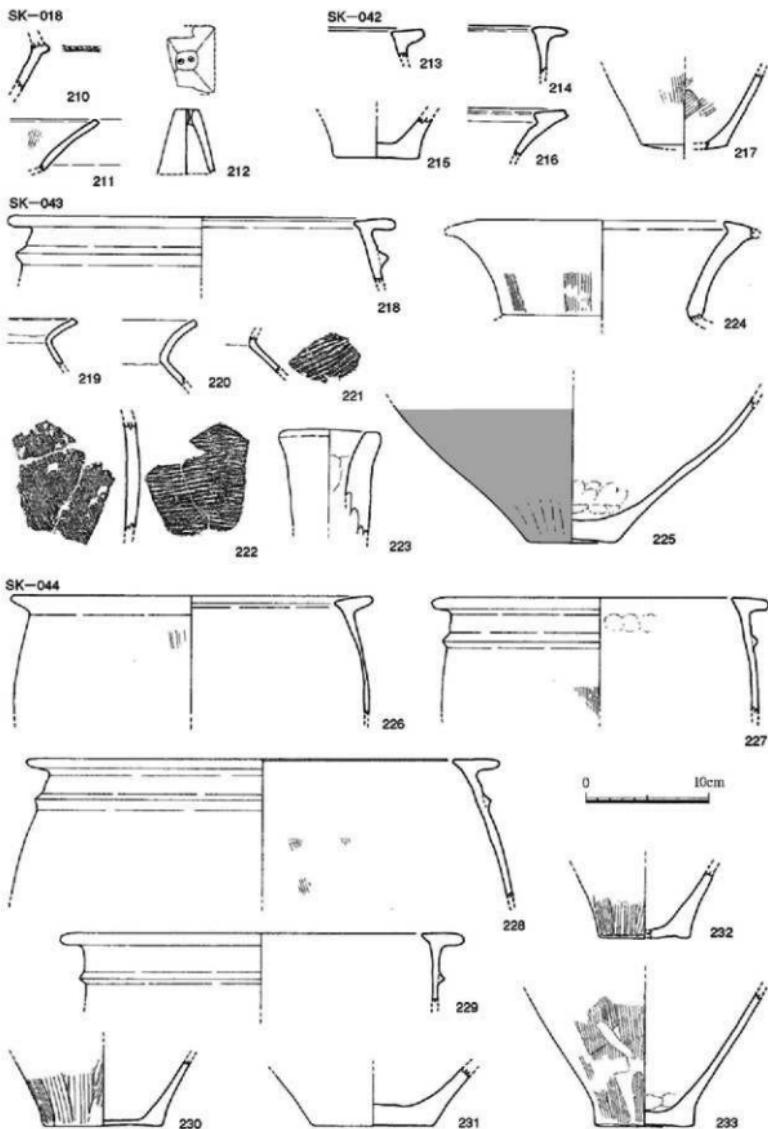


Fig. 36 SK-018・042・043・044出土遺物 (1/4)

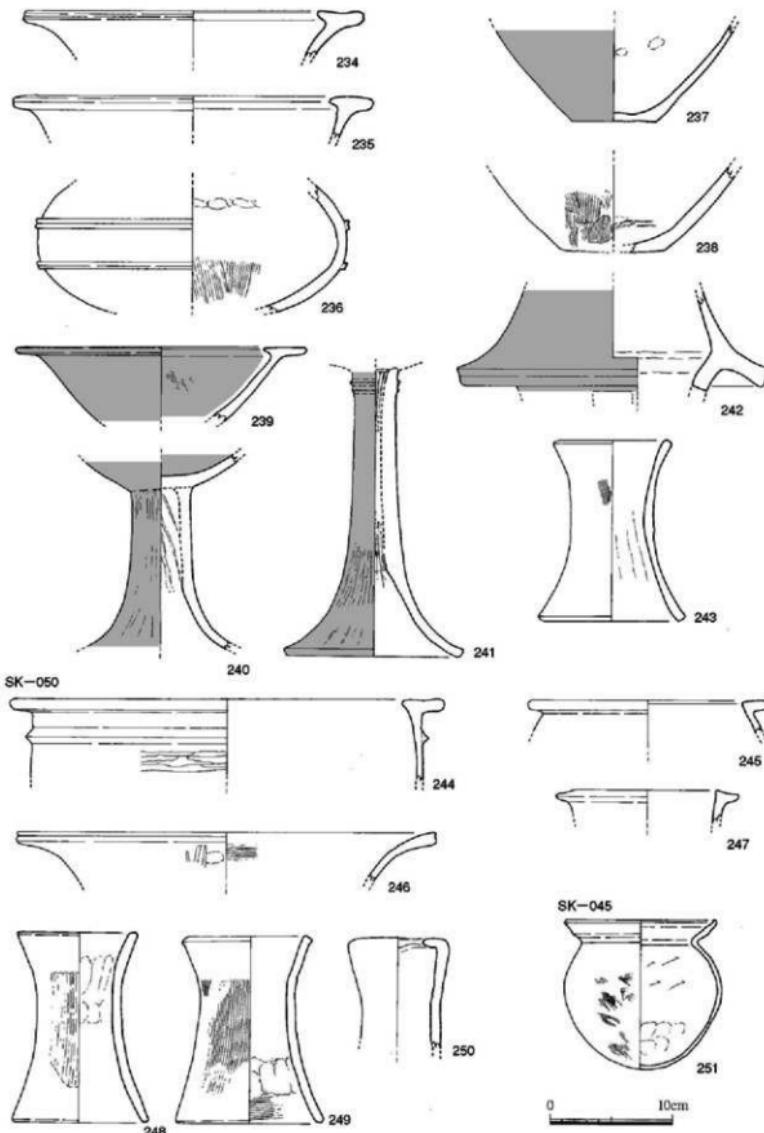


Fig. 37 SK-044・050・045出土遺物 (1/4)

接合する土器があること、時期差が認められることから一連の遺構として報告する。平面プランは南東～北西に長い楕円形で、長径2.0m、短径1.5m。底面はSK-044がやや深く、検出面から85cm。SK-050は同じく60cmで、底面南隅にピット状の浅い窪みがある。ともに覆土は黒色粘質土。

SK-044出土遺物 Fig. 36・37, PL. 6

上・中・下層に分けて遺物を取り上げたが、時期差はない。弥生土器壺・壺・高杯・筒形器台・鉢・器台・支脚・壺棺・砾石がコンテナ6箱出土した。壺棺は3個体あるが、図化していない。

全て弥生土器である。226～229は口縁が「逆L」字形をなす壺で、226は口縁上面が内傾し、他は水平で口縁が内側に突出し、頭部に三角突帯を貼付する。摩滅するものが多いが胴外面継刷毛目、内面ナデ、口縁内外横ナデ調整であろう。230・232・233は壺の底部である。いずれも外面継刷毛目、内面ナデ調整で、233は外面に一部ナデを加える。231は外面を丁寧にナデ調整しており、壺棺か壺の底部であろう。234・235は鶴先形口縁の広口壺であろう。236は壺の胴部で偏球形をなし、外面にM字突帯を2条貼付する。外面は底部付近がヘラ研磨、他は横ナデ、内面は上部を指整形、底部に粗い刷毛目を浅く施し、他はナデ調整。237は丹塗り研磨の壺底部で、内面は指頭痕を丁寧にナデ消す。238も壺で、外面は粗密2種類の継刷毛目、内面はヘラ・刷毛目具による粗い調整後ナデ。239～241は高杯である。239は鶴先形口縁の坏部で、内面と口縁上面が丹塗りで、外面は完全剥落するがおそらく丹塗りであろう。240は坏底から脚外面を丹塗り。脚外面を継に研磨、内面には螺旋状のシボリ痕がある。241は脚で、上端に突帯2条を巡らせる。外面を丹塗り研磨、内面はシボリ痕が残り、底部は横ナデ調整。242は筒形器台である。鶴部付近が1/2周ほど残るが、下端は透孔部分から折れており、四方向に長方形透孔が入る。器面が剥落するが、外面横ナデ、内面ナデ、外面から透孔内まで丹塗りを施す。243は器台で、摩滅が著しく、外面に継刷毛目、内面にナデの痕跡が一部残るのみである。

SK-050出土遺物 Fig. 37

上・下層に分けたが、時期差はない。弥生土器壺・壺・高杯・器台がコンテナ2箱出土した。

244・245は壺で、口縁が「逆L」字形をなす。244は頭部に三角突帯を回し、胴部外面は軽く横研磨する。246は広口壺で、外面は継に、内面は横に研磨する。247は小形壺の口縁部で、「逆L」字形をなす。248・249は器台、250は支脚である。

SK-044・050は弥生時代中期後半の遺構で、丹塗り土器など祭祀性の強い土器が多い。

SK-045 Fig. 35

SK-042の西1m弱に位置する。南東隅を擾乱坑に切られる。不整な隅丸方形プランで、径0.75～0.8m。検出面から底面まで35cmで、北～西側壁は段をなして落ちる。

SK-045出土遺物 Fig. 37, PL. 6

図示した古式土師器壺の他、弥生土器壺と土器小片約100点が出土した。251は布留系の小形壺で、胴部外面を細かい刷毛目後ナデ、内面をヘラ削りし、口縁内外を横ナデ、頭部内面をナデ調整する。内底には指頭痕が残る。黒褐～淡灰褐色で、胎土に粗砂混じりの砂粒を多く含み、焼成良好。

SK-055 Fig. 35, PL. 4

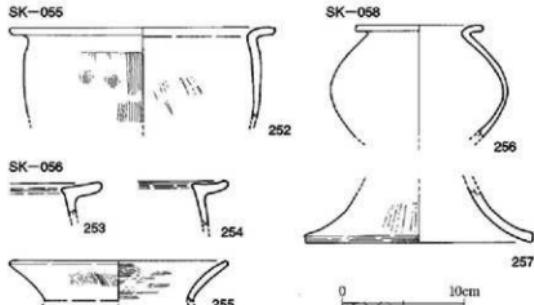
調査区西端の中央部に位置する。SK-056を切る。東西に長い楕円形プランで、東側は擾乱溝に破壊される。長径1.4m以上、短径0.5m。検出面から底面まで、深さ60cmで、断面逆台形をなす。

SK-055出土遺物 Fig. 38

弥生土器壺・壺のほか、土器小片が少量出土した。

252は弥生土器壺で、口縁は「く」字形に屈曲するが、底は丸い。外面縦刷毛目、内面粗刷毛目後、丁寧なナデ、口縁内外横ナデ調整。

図示した土器は弥生時代中期末だがSK-056を切っており、造構は後期に下ろう。



SK-056 Fig. 35, PL. 4

SK-055の西に接し、これ

に切られる。西側は攪乱溝に大きく破壊されている。平面プランは楕円形か。長径0.8m以上、短径1.0m。検出面から底面まで50cmで、底面の南端が浅く窪む。

SK-056出土遺物 Fig. 38

弥生土器壺・壺・高杯などが少量出土した。摩滅が著しい。253・254は弥生土器壺で、口縁は「逆L」字形をなす。255は小片だが「く」字形口縁の壺と思われる。外面斜刷毛目、内面横刷毛目後、内外を横ナデ調整。小片のため法量と図の傾きは不確実である。弥生時代後期の土坑であろう。

SK-058 Fig. 35, PL. 4

SK-056の北に接し、これに切られる。東西に長い不整隅丸長方形プランで、長径1.1m、短径0.7m。造構検出面から底面まで45cmで、断面逆台形を呈する。

SK-058出土遺物 Fig. 38

弥生土器壺・壺・高杯の他、土器小片約40点が出土した。256は弥生土器無頭壺で、口縁部の横ナデ以外は調整不明。257は高杯脚で、摩滅するが外面は縦の研磨。弥生時代中期末頃の土坑か。

(4) その他の造構と出土土器

SX-021出土遺物 Fig. 39, PL. 6

SX-028の上層に被っていた造構覆土で、堅穴住居の可能性があるが、平面プランを割むことができなかった。コンテナ1箱の遺物が出土し、小鉄斧(290)や絵画土器(272)などの重要遺物を含むため、まとめて報告する。図示した以外は土器細片と黒曜石碎片である。

258は弥生土器壺で、口縁は「逆L」字形をなす。259～261は古式土師器壺で、259は外反して開く口縁部の小片、260は肩部小片で外面が右上がりの平行タキ、内面がヘラ削り、261も肩部で外面が平行タキ後、縦刷毛目、内面は斜→横→斜の順で刷毛目調整。262は弥生土器壺の底部。263・264は弥生土器複合口縁壺。265は古式土師器の壺で焼成極不良。266は古式土師器高杯または台付鉢の脚で、外面横ミガキ、内面刷毛目調整。267は古式土師器鉢、268～270は同じく台付鉢である。271は勾玉形の土製品で、穿孔はない。272は壺の肩部片とみられ、外面に焼成前の線刻を施す。先に横の2本線を刻み、後に縦2本線を二組施す。縦線のうち左側は横の下線まで止まり、右側は上端まで突き抜けている。舟を描いたものであろうか。土器は内面に指頭痕がかすかに残るが摩滅しており、外

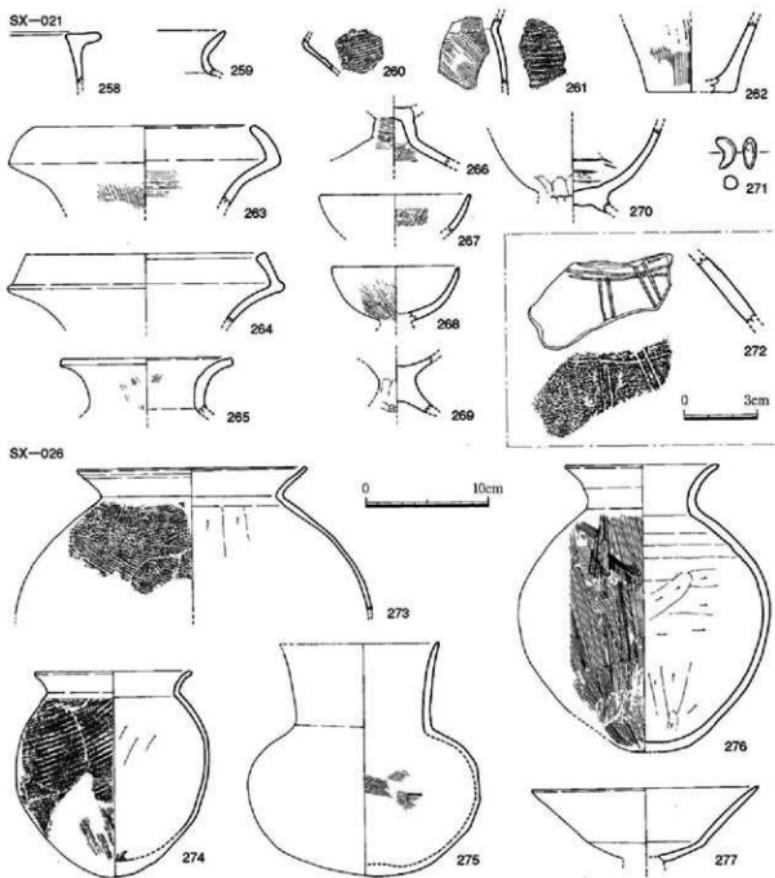


Fig. 39 SX-021・026出土遺物 (272は1/2、他は1/4)

面褐色、内面橙褐色で、胎土に中～微砂・雲母粒を少量含み、焼成良好である。

SX-026出土遺物 Fig. 39, PL. 6

SC-030の上層から古式土師器が一括出土した。数度にわたり精査を行ったが、遺構としてつかむに至らなかった。遺物はコンテナ1箱で、主要な土器を報告する。他に鉄製品、砥石、黒曜石剝片がある。

いずれも古式土師器である。273は壺で、口縁端部内外に沈線1条を各々巡らす。胴外面は上端に右上がりの平行タタキ後、重ねて右下がりの平行タタキを全面に施し、内面はヘラ削り後ナデ調整。口縁内外を横ナデし、頸部内面をナデ調整する。外面淡灰褐色、内面黒色で、胎土に細砂粒を多量と

雲母粒を含み、焼成不良で破面が黒色をなす。274はやや小振りの壺で、僅かに平底の痕跡を残す丸底で分厚い。胴外面が右上がりの平行タキ、内面はヘラ整形後、丁寧にナデ、最後に口縁内外横ナデ。外面黒色、内面淡灰褐色で、細砂を少量と大粒の雲母粒を含み、焼成不良で二次加熱により底部が赤変する。275は壺で器形が歪む。著しく摩滅し、胴内面に刷毛目を残すのみ。胎土は精良で粗砂粒・雲母粒・カクセン石を含み、焼成良好。276も壺で、平底の名残を留める丸底である。胴外面細かい刷毛目、内面はヘラ削り後ナデ調整で、底部にはヘラ整形痕が残る。口縁内外横ナデ調整。胎土に砂粒を少量含み、焼成良好。277は高杯で、坏底に差し込み接合した脚は抜け落ちる。届曲部から上は淡橙褐色、下は淡黄褐色で、異なる素地土を用いており、胎土精良で雲母粒を含み、焼成良好。

その他の出土土器 Fig. 40, PL. 6

報告から漏れた遺構から出土した土器のうち、特に重要なものを掲載した。

281と土製品以外はいずれも古式土師器である。278は布留系の壺である。摩滅するが胴外面は継刷毛目後、ナデ調整か。胴内面ヘラ削り、口縁横ナデ、頸部内面ナデ調整。底部外面に煤が付着する。279も壺で、胴外面は右上がりの平行タキ、内面は肩部指押さえ後丁寧なナデ調整、口縁内外横ナデ。胎土に大粒の雲母粒とカクセン石を含む。280は儀内系の二重口縁壺で、届曲部外面に粘土を貼付して垂れ下げ、横ナデ後に描波状文を施した後、浮文2個を貼付して竹管文を押圧する。描波状文の単位は5条以上で、少なくとも4段以上に及ぶ。外面橙色、内面灰褐色を呈し、胎土精良で微砂・雲母微粒を僅かに含み、焼成良好。SE-052・SK-050・053の上面を覆う浅い窪みから出土した。281は弥生土器複合口縁壺の小片。282は高杯で、坏部の2/3を欠く。坏部は外面届曲部に継刷毛目、内面にナデ。脚筒部は外面上端に横ミガキ、内面にヘラ削り痕が残る。他は調整不明。283は鉢で、外面継刷毛目で他は摩滅。284は鼓形器台で、突帯付近に横ナデ痕が残るが、他は調整不明。乳白色を呈し、胎土に石英粒等の細砂粒を多量に含み、焼成は極めて不良。285は小形器台で、脚のみ完存する。外面は摩滅するが細かい継刷毛目が僅かに残り、内面も同様の横刷毛目調整。286は支脚、287は手捏土器、288・289は土製投弾である。

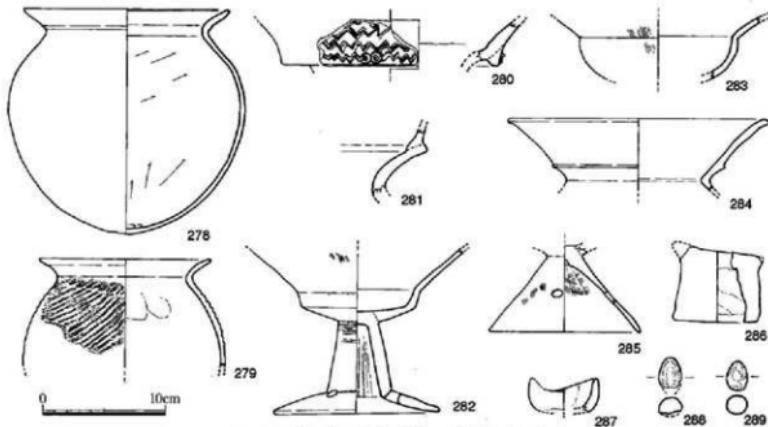


Fig. 40 その他の出土土器・土製品 (1/4)

(5) 鉄製品・ガラス製品・石製品 Fig. 41, PL. 6

290は小鉄斧で、基部側を欠損する。板状の両側を折り返している。鋸化が著しく、図は保存処理後のものである。SX-021出土。291は鉄製ヤリガンナである。基部を欠く。断面半月形をなし、刃

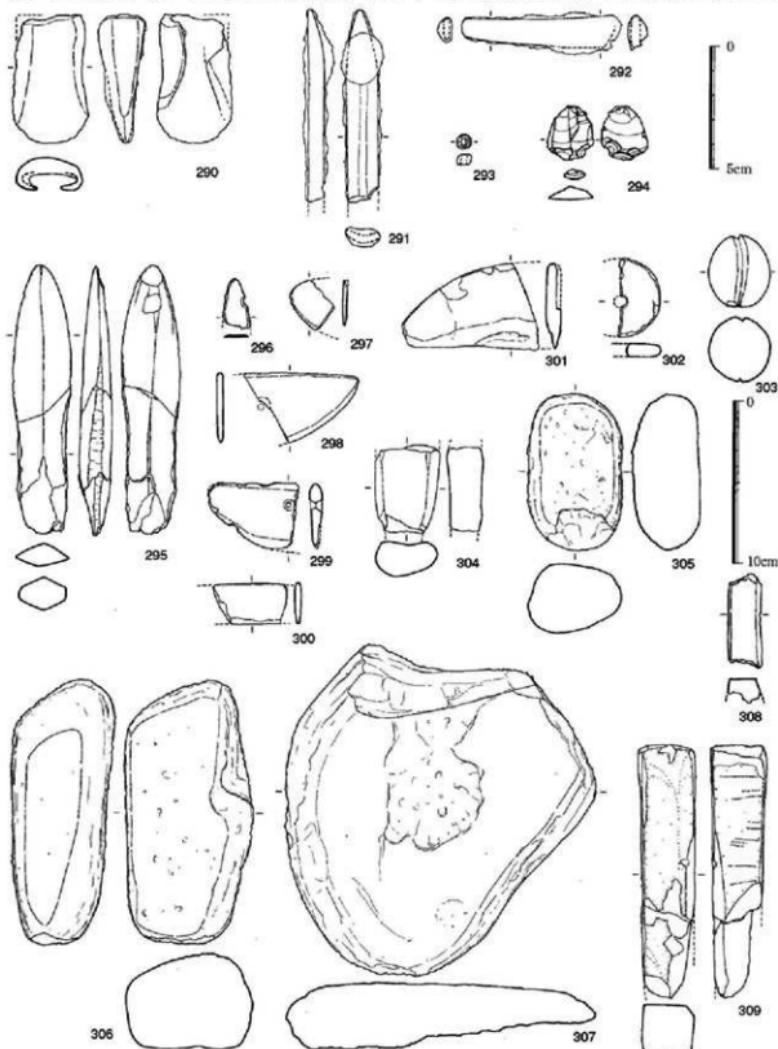


Fig. 41 鉄製品・ガラス製品・石製品 (290~294は1/2、他は1/3)

部は僅かに反りがある。SX-026出土。292は鉄製品で、刀子の一部であろうか。透過X線撮影を行ったが刃部割が折れているかどうか不明である。SC-030上層出土で、古墳時代前期の製品か。

293はガラス製小玉で、濃いコバルト色に発色する。SC-004出土。

294は黒曜石製のつまみ形石器である。295は磨製石剣である。基部は両縁辺に刃潰し状の加工を行って把手とし、刃部は研ぎ直しているが鋸が蛇行する。刃先には折れた痕跡が残り、破損した大振りの石劍を再利用したと考えられる。SC-003床面より出土した。296は薄い石片であるが、縁辺に刃を研ぎ出しておらず、磨製石錐の可能性がある。SC-004出土。297~299は石庖丁である。順にSC-006、SK-057、SC-010上層の出土品である。300は刃部が丸いが、背が湾曲することから石鎌の一部か。301は磨製の石鎌である。300・301はともにSC-030出土で、他にもう1点石鎌の一部とみられる破片がある。弥生時代中期。302は滑石製鋤車で、半損するが、孔は中心をはずれている。表裏から穿孔する。SE-014下層から出土した。303は石鍤か。球形に削りだして溝を一周させる。SP-402出土。304は砥石で、上下が折れているが、下端は研磨によりくびれており、穿孔具を兼ねるものか。砂岩製。305・306は蔽石で、下端に蔽打痕がある。305は両側面を磨石として使用する。ともにSC-020出土。307は台石で、表面中央に軽微な蔽打痕がある。裏面は安定を得るために打ち欠いている。今山産の玄武岩質安産岩を用いる。SC-020出土で、305・306とセットをなそう。308は粘板岩製の砥石で、2側面を使用する。SC-001出土。309も粘板岩製の砥石で、方柱状をなし、4側面を使用する。右側面と裏側面には研ぎ出しにより生じたとみられる浅い段が多く残る。SC-020出土。

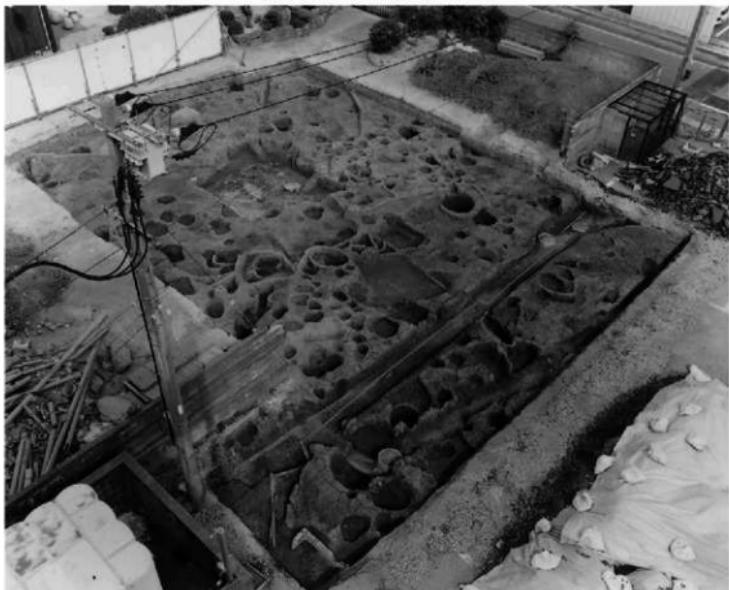
3. おわりに

調査の概要でも述べた通り、表土剥ぎ直後から調査区全域に遺構覆土が広がり、激しく切り合っていることが確認できた。遺構検出作業を繰り返したが、特に上層の遺構については充分に把握することができなかつた。確認した遺構は堅穴住居12軒、井戸3基、土坑16基である。その他、多数の柱穴があったがあまりにも密集しており、かつ中央に大きな擾乱坑があつて掘立柱建物を復元することは困難であった。激しい切り合いと調査時の誤認により各遺構の出土遺物にも混入が多くみられるが、あえて時期ごとに分ければ、弥生時代中期が堅穴住居3(SC-003・028・030)、井戸2(SE-040・052)、土坑4(SK-042・043・044(055)・058)、同後期が堅穴住居2(SC-010・020)、井戸1(SE-014)、土坑3(SK-018・055・056)、同終末から古墳時代前期が堅穴住居7(SC-001・002・004・006・007・008・027)、土坑1(SK-045)である。その他、プランが掴めなかつたSX-021・026の他、SC-006上層にも堅穴住居とみられる遺構覆土が認められ、古墳時代前期の住居の見落としが少なくとも3軒あったと思われる。一方、弥生時代中期～古墳時代前期以外の遺物としては、須恵器片、中世の土師器杯、白磁片・青磁碗片などが認められたがいずれも数点の出土に留まり、明確な遺構も確認できなかつた。

出土遺物はコンテナ80箱と多量で、限られた予算と整理期間では全てを報告することは不可能である。よって、特徴的な遺物については図化するよう努めたほか、各遺構出土土器は器種を網羅できるよう図化・掲載し、可能な限り多数の遺物を掲載するため遺物説明を必要最小限に留めた。このうち留意すべき遺物として、銚先形口縁の上面に三角突帯を巡らせた珍奇な壺(186)、絵画土器(78・272)、本市内で6例目となる鐸形土製品(212)、小鉄斧(290)、鉄製ヤリガンナ(291)、磨製石剣の再利用品(295)、青銅器鑄型？(139)などがある。



1. 第102次調査区全景（南西から）



2. 第102次調査区全景（西から）



1. SC-001 (北西から)



2. SC-002 (北西から)



3. SC-003 (北西から)



4. SC-003磨製石剣出土状況 (北から)



5. SC-027 (西から)



6. SC-030 (南西から)



1. SC-004・010・020・028 (南から)



2. SC-006 (南西から)



1. SC-004遺物出土状況（北西から）



2. SC-006遺物出土状況（南から）



3. SC-008遺物出土状況（南東から）



4. SK-042（南から）



5. SK-043・044・050（南東から）



6. SK-055・056・058（南から）



1. SE-014 (北東から)



2. SE-052 (南西から)



出土遺物（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	ひえ47 - ひえいせきぐんだい100じ・だい102じちょうさほうこく -
書名	比恵47 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第102次調査報告
編書名	-比恵遺跡群第100次・第102次調査報告-
次	
巻	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	956
編著者名	久住猛雄（I・II）、吉武学（III）、小畠弘己（II）（＊I～IIIは筆を表す）
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	西暦2007年3月30日

遺跡名ふりがな	ひえいせきぐんだい100じ			
遺跡名	比恵遺跡群第100次			
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくはかたえみみなみ4ちょうめ71ばん1,77ばん			
遺跡所在地	福岡市博多区博多駅南4丁目71番1,77番			
市町村コード	40130			
遺跡番号	0127			
北緯	33° 34' 46"（世界測地系）			
東経	130° 25' 56"（世界測地系）			
調査期間	2005. 06. 01～2005. 07. 01			
調査面積(m ²)	480.3			
調査原因	共同住宅建設			
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代～古墳時代前期、奈良時代	井戸2+溝状遺構2+掘立柱建物2+堅穴住居1	弥生土器+古式土器+須恵器+木製品+植物遺存体 (種子)	古墳時代前崩井戸より続核+古代の正方位の溝

遺跡名ふりがな	ひえいせきぐんだい102じ			
遺跡名	比恵遺跡群第102次			
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくはかたえみみなみ4ちょうめ100ばん1,99ばん2			
遺跡所在地	福岡市博多区博多駅南4丁目100番1,99番2			
市町村コード	40130			
遺跡番号	0127			
北緯	33° 34' 43"（世界測地系）			
東経	130° 25' 46"（世界測地系）			
調査期間	2005. 07. 04～2005. 08. 25			
調査面積(m ²)	220			
調査原因	共同住宅建設			
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代～古墳時代前期	堅穴住居12+井戸3+土坑16	弥生土器+古式土器+石器+鉄器+ガラス玉	錦形土製品+絵画土器

比恵 47

-比恵遺跡群第100次・第102次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第956集

2007年（平成19年）3月30日

発行 福岡市教育委員会

福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 高松印刷有限公司

福岡市東区松島1丁目4-10